

なか の はら だい に い せき
中ノ原第2遺跡

—新宮崎営農センター建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—



2021

宮崎市教育委員会

第Ⅰ章 遺跡周辺の環境

第1節 地理的環境（第1図）

中ノ原第2遺跡が所在する宮崎県宮崎市は九州島の南東部に位置する。市域の大部分は、宮崎平野の南端に位置するが、北西側は九州山地、南西側には鰐塚山に代表される南那珂山地が連なる。市街地の中心には、県下最大の河川である大淀川が流れ、この大淀川の沖積作用によって、現在の市街地が位置する沖積平野が形成された。

中ノ原第2遺跡は現在の宮崎市街地の北部、宮崎市立住吉南小学校東側の砂丘上に所在する。この砂丘は、一つ瀬川河口南岸から大淀川河口北岸付近まで、海岸線に沿って南北方向に形成された4本の砂丘列の中で、最も内陸側に位置する第1砂丘と呼ばれる砂丘であり、約3千年前には形成されていたと考えられている。中ノ原第2遺跡付近の標高は約13mから14mであり、砂丘頂部から西にやや下った位置にあたる。砂丘の西側には垂水台地から伸びる丘陵が迫るが、丘陵との間には低地が存在し、現在でも一部が水田として利用されている。このような低地を利用した水田風景が、中ノ原第2遺跡の主要な時代である弥生時代にも広がっていた可能性もある。また、弥生時代には第3、第4砂丘はまだ形成されていないことから、第1砂丘の東側、第2砂丘との間には、潟湖や入り江、低湿地といった風景が広がっていたと考えられる。

第2節 歴史的環境（第1図）

中ノ原第2遺跡が立地する砂丘周辺は、調査事例こそ少ないが数多くの遺跡が分布している。縄文時代に遡る明確な事例はないが、第1砂丘南部に所在する平原遺跡において市来式土器が出土したとされている。

弥生時代には遺跡数が増加し、第1砂丘南部に所在する櫛遺跡では弥生時代前期の積石墓と甕棺墓が検出され、第2砂丘上の石神遺跡では弥生時代中期の甕棺や鉄製品が出土している。また、第1砂丘と第2砂丘の砂丘間低地の微高地に所在する中須遺跡では、中期の周溝状遺構や掘立柱建物などが検出されたほか、溝状遺構から木柄付石斧が出土した。中ノ原第2遺跡に近接する遺跡としては、元村遺跡において烟を造成中に中期後半段階の伊予系高杯が出土している。

続く古墳時代になると、第1砂丘の南端に櫛1号墳が築造される。櫛1号墳は宮崎大学考古学研究室により調査が実施されており、古墳時代前期中葉に位置づけられる墳丘長52.5mの前方後円墳で、大型の木椁を埋葬施設とすることが確認されている。櫛1号墳以降、砂丘上や砂丘間低地に点々と古墳が築造されるが、詳細な時期は不明な事例が多い。第2砂丘上の山崎下ノ原第1遺跡では中期末の円墳、後期の馬埋葬土坑が検出されている。第1砂丘西側の丘陵には国指定史跡の蓮ヶ池横穴群に代表される横穴群が分布する。横穴は6世紀後葉の蓮ヶ池12号横穴を嚆矢として築造が開始されたと考えられており、県指定史跡の住吉村古墳や未発見のものも含めると200基以上の横穴が分布していたと考えられている。この横穴群の築造は7世紀後半まで継続する。集落遺跡としては、中期初頭段階の布留式系土器が出土した猿野遺跡や、中期から終末期の集落が確認された山崎上ノ原第1遺跡が第2砂丘上に所在する。山崎



第1図 中ノ原第2遺跡周辺遺跡分布図 (S=1/10000)



第2図 中ノ原第2遺跡調査区配置図 (S=1/3000)

上ノ原第1遺跡では、竈形土器や特殊扁壺、韓式系平底鉢、凹字形鉄器といった特徴的な遺物が出土している。

古代になると、第2砂丘上に所在する江田神社の記載が『延喜式』に見られる。また前述の猿野遺跡において古代瓦が出土している。

中世には、蓮ヶ池横穴群が築造された丘陵上に宮崎土持氏の家臣三須丹後守の居城と伝えられる丹後城が造られるが発掘調査がなされていないため詳細は明らかではない。発掘調査が行われた事例としては、第2砂丘と第3砂丘間の微高地上に所在する池開・江口遺跡が挙げられ、15世紀を中心とする居館跡が確認されている。

近世は、文政4年(1821年)に成立した『大日本沿海輿地全図』に「江田村」「山崎村」「塩路村」の記載があり、中ノ原第2遺跡周辺に村落が形成されていたことがわかる。また、蓮ヶ池横穴群南側に所在する蓮池(蓮ヶ池)、中池、稻荷池、御諏訪池、田池も近世末(弘化1年:1844年)に造られており、日本遺産に認定された「古代人のモニュメントー台地に絵を描く 南国宮崎の古墳景観ー」の構成遺産である蓮ヶ池横穴群の景観も、この頃にその素地が形成されたといえる。

第Ⅱ章 調査成果

第1節 調査に至る経緯（第2図）

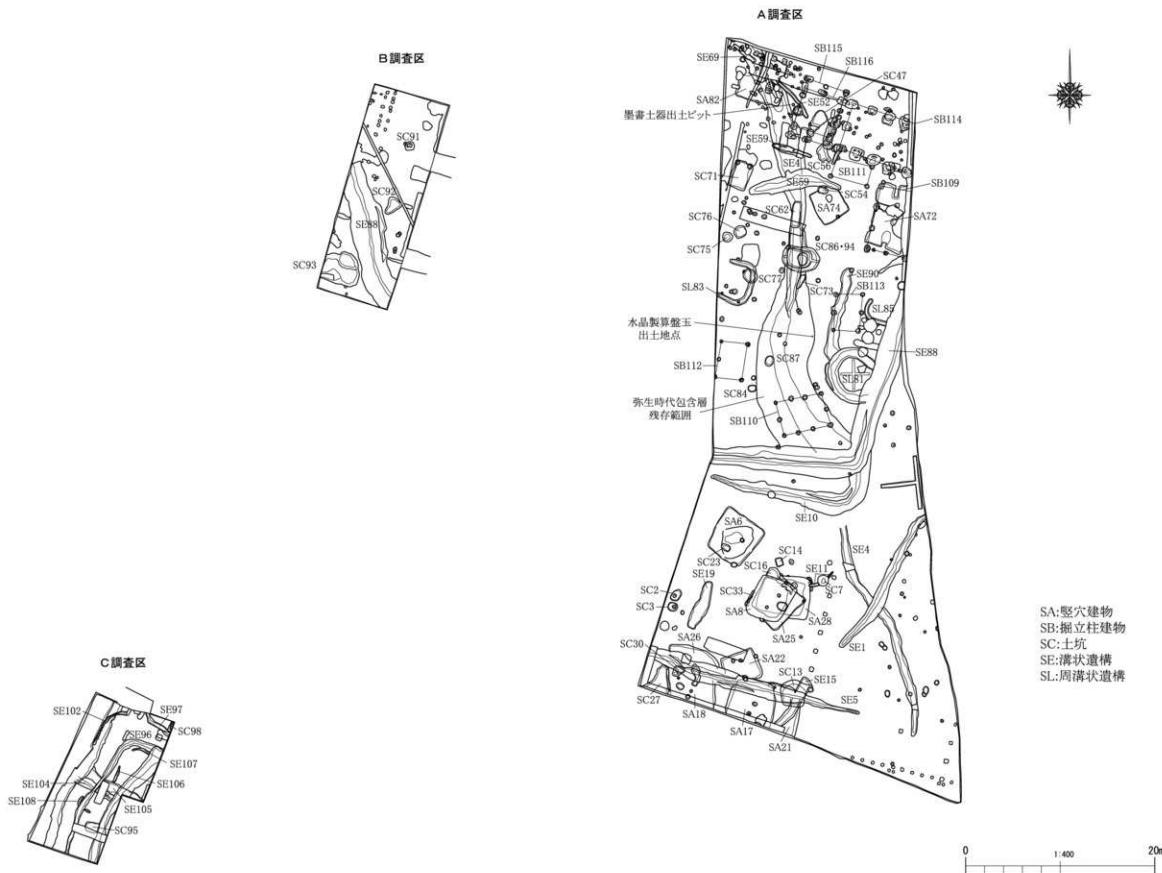
平成27年12月24日、新宮崎営農センター建設事業に伴い、民間事業者から宮崎市大字芳士字今出2657-1外における埋蔵文化財の有無について、宮崎市教育委員会文化財課（以下、宮崎市文化財課）に照会がなされた。事業予定地の一部が周知の埋蔵文化財包蔵地「中ノ原第2遺跡」を含んでいたことから事業者と協議のうえ、平成28年2月22日から26日、平成28年4月14日から19日、平成28年6月1日に確認調査を実施した。調査の結果、弥生時代の堅穴建物等の遺構や弥生土器等の遺物が確認され、埋蔵文化財が良好に残存していることが明らかになった。この結果を受けて、宮崎市文化財課と事業者の間で確認された埋蔵文化財に関する取り扱いの協議を行なったが、事業により埋蔵文化財への影響が免れない2,035m²に関して、平成29年1月30日から6月5日まで発掘調査による記録保存を実施した。

第2節 調査の概要（第3図）

調査対象地は事業内容から3箇所に分かれたため、主たる調査区となる東側の調査区をA調査区、北西側の調査区をB調査区、南西側の調査区をC調査区とした。また事業の工程からA調査区の南半を平成29年3月末までに完了する必要が生じたため、当該箇所から調査に取り掛かった。結果として、A調査区南半は弥生時代の堅穴建物が集中して分布しており、詳細な調査が行えなかつたことが大いに反省される。残るA調査区北半、B、C調査区は平成29年6月5日をもって現地における発掘調査を完了した。

基本層序は、A調査区の中央付近には弥生時代の包含層である暗褐色砂質土が残存していたが、その他の箇所は表土直下から地山であるにぶい黄橙色砂、灰白色砂が検出される状況であった。灰白色砂は通常にぶい黄橙色砂の下層に堆積する砂層である。このことは上部が削平されていることを示しており、灰白色砂が検出された付近は遺構の残存状況も悪かった。また、B調査区の構状遺構88の壁面において灰白色砂中に橙色の軽石を多量に含む層が検出された。第1砂丘の形成時期を検討する資料とするため、同層の資料を採取し自然科学分析を行った。その結果詳細は第Ⅱ章第5節自然科学分析に記載しているが、約4600年前に霧島火山群から噴出した霧島御池テフラが検出されている。

調査はバックホウによる表土剥ぎから実施した。調査対象地は、調査以前は畑地であったが搅乱も多く、大規模な搅乱については調査期間も考慮しバックホウにより掘削を行なった。表土剥ぎ後は人力により調査区内を精査し遺構検出作業を実施したが、砂丘上という立地から大部分の遺構埋土も地山も砂であり、乾燥すると真っ白になり判別が困難であった。また、遺構壁も砂であることから記録作業を迅速に行わないとすぐに崩落する、さらに風が強い日には遺構掘削後、数時間の間に風で運ばれてきた砂により遺構が埋没していくなど、乾燥と風に悩まされた調査であった。記録作業は、調査員による手測り実測、トータルステーションを用いた遺構実測、中判フィルム、35mmフィルムを用いた写真撮影作業により行った。また、調査区周辺の状況や、調査区全体を記録するため空中写真撮影を委託により行った。



第3図 中ノ原第2遺跡遺構配置図(S=1/400)

第3節 弥生時代の調査成果

弥生時代の遺構は竪穴建物 11 軒、掘立柱建物 4 棟、土坑 14 基、周溝状遺構 3 基、溝状遺構 4 条が検出され、これらの遺構は全て A 調査区に分布する。竪穴建物は A 調査区内でも南側と北側に偏って分布しており中央付近には分布しない。一方、周溝状遺構は中央付近にのみ分布する。また、A 調査区中央付近から、南北方向に伸びる溝のような形で弥生時代の包含層が検出された。これは地形的に低い部分にのみ削平を免れた包含層が残存したためである。調査区を設定した箇所を見ると、現在は砂丘頂部から西へと緩やかに下る地形となっているが、旧地形は細かな起伏が存在していたことがここから明らかである。

第1項 竪穴建物

竪穴建物 6（第4・5図） A 調査区の南西側で検出された平面方形の竪穴建物である。長軸 5 m、短軸 4.7 m、検出面からの深さ 0.25 m を測る。削平により残存状況は非常に悪く床面付近がかろうじて残っている状況であった。建物中央付近は土坑状に一段深くなり、遺物の大半はそこから出土した。床面を精査したが柱穴は判然としなかった。

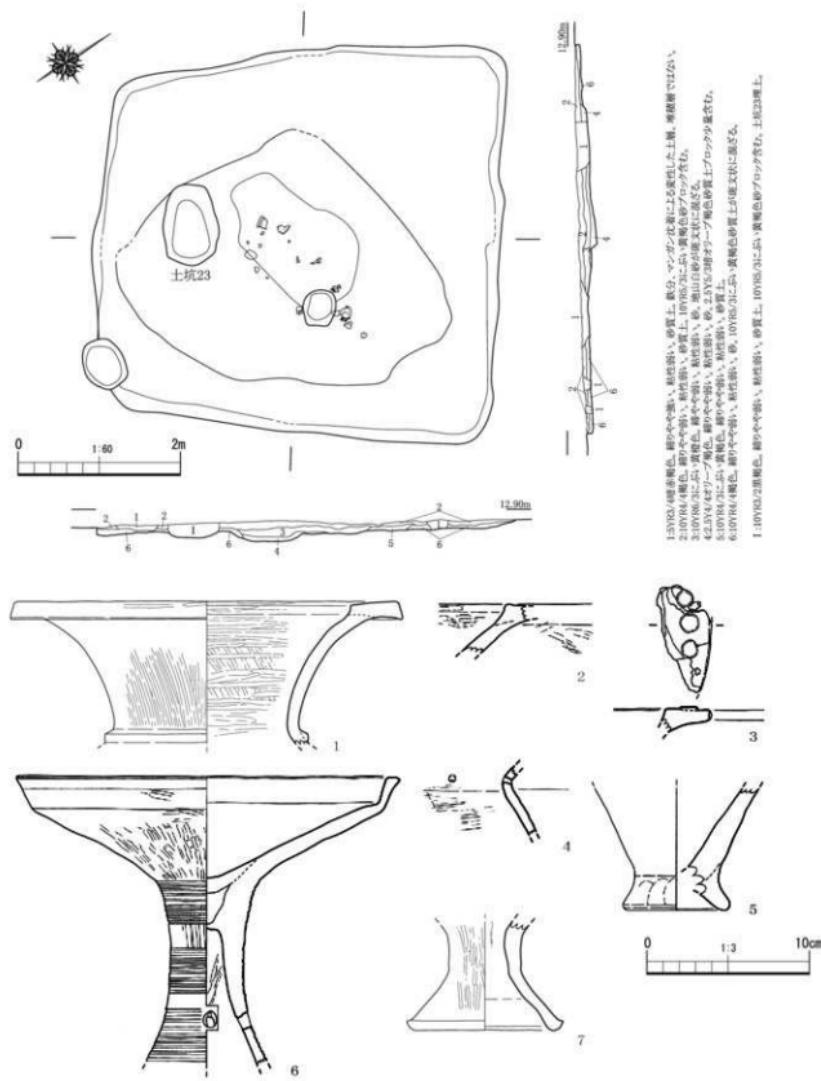
1 から 3 は豊後系の壺である。鋤先状口縁を呈し、3 は口縁部上面に円形浮文を施す。4、5 は甕である。4 は頸部付近の破片で、屈曲部上位に円形の穿孔が施されている。瀬戸内系の鉢の可能性がある。5 は裾部がハの字に外方に張り出す。6 は瀬戸内系の高坏である。脚部に回線文を施し、坏底面は円盤充填による成形で、中心から口縁部に向かい直線的に立ち上がる。口縁部外面には回線文を施さない。この特徴から中期末から後期初頭に位置づけられる。7 は器台の脚部である。8 は頁岩製の砥石である。欠損により大部分を欠く。9 は尾鈴山酸性岩製の砥石である。10 は尾鈴山酸性岩製の台石である。鉄分が付着する。

竪穴建物 8（第6・7図） A 調査区の南西側で 3 軒の竪穴建物が切り合う形で検出された。

竪穴建物 8 は切り合い関係から竪穴建物 25, 28 に後出する。平面方形で長軸 4.5 m、短軸 4.3 m、検出面からの深さ 0.5 m を測る。壁面は砂丘上に構築されているため崩れており緩やかに立ち上がる。特に南西側は大きく崩れており隅角付近が膨らんでいる。一方、北東側の隅角付近は段を有するが建物の入口であった可能性がある。柱穴は床面を精査したが判然としなかった。

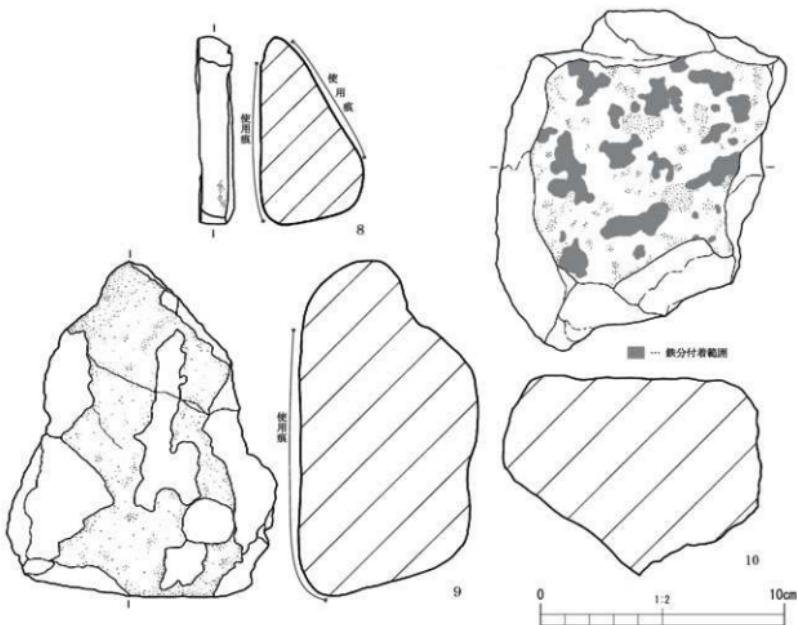
遺物は建物のほぼ全面に渡って出土した。11、12 は壺の底部から胴部片である。外面縦位のミガキ調整や胎土が類似する。13、14 も壺の底部から胴部片である。13 は器面調整が粗雑でユビオサエが明瞭に残る。15、16 は甕の底部片である。裾部がハの字状に外方へ張り出す。17 は土製勾玉である。18、19 は頁岩製の砥石である。

竪穴建物 25（第6・8図） 竪穴建物 25 は切り合い関係から、竪穴建物 28 に後出し、竪穴建物 8 に先行する。平面方形で長軸 4.7 m、短軸 4.3 m、検出面からの深さ 0.35 m を測る。床面を精査したところ主柱穴は 2 基検出された。壁面は砂丘上に構築されているため崩れており緩やかに立ち上がる。



第4図 竪穴建物6及び出土遺物実測図 (S=1/60・S=1/3)

遺物は細片化した土器が多く、図化できたものは3点である。20は鉢で、口縁部外面に回線文を施す。21は緑色堆積岩製の回基式の磨製石鏃である。22は安山岩製の打製石鏃である。有茎式で鏃長8.7cmを測り先端部と茎部付近を研磨しているため、局部磨製石鏃とすべきかも



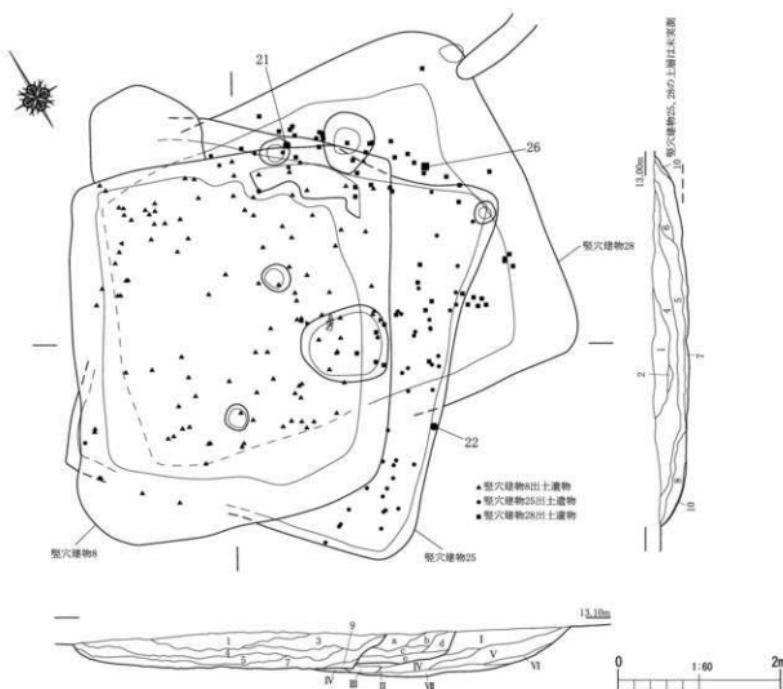
第5図 壁穴建物6出土遺物実測図 (S=1/2)

しれない。建物壁面に接するような位置で出土した。

壁穴建物 28 (第6・9図) 壁穴建物 28 は、切り合ひ関係から壁穴建物 8, 25 に先行する。平面方形で長軸 5.3 m 程度、短軸 4.4 m、検出面からの深さ 0.55 m を測る。壁面は砂地のため崩れおり緩やかに立ち上がる。柱穴は床面を精査したが判然としなかった。

遺物は細片化した土器が多く、図化できたものは 5 点である。23 は甕口縁部である。24 はミニチュア土器の底部、25 は甕の胴部片で 3 条の突帯を貼り付ける。26 は安山岩製の凸基 I 式の打製石鏟である。27 は砂岩製の敲石で両小口に使用痕が見られる。

壁穴建物 17 (第10～14図) A調査区の南端で検出され、切り合ひ関係から壁穴建物 21 に後出する。建物北側を近世の溝状遺構 5 に切られる。建物南側は調査区外に広がるが平面方形を呈すると思われ、南北 4.5 m 以上、東西 5.1 m、検出面からの深さ 0.4 m を測る。主柱穴は 2 基である。使用時の最終的な床面と考えられる縮りが強い層 6, 7 層からも遺物が出土しているが、これは崩落しやすい砂層を壁面としているため、使用時から崩れては床に均すという行為を繰り返していたためと想定される。建物中央東寄りから炉が検出された。炉の北側は強い被熱により赤化し硬質になっている。平面形は不整形で、長軸 0.6 m、短軸 0.45 m、深



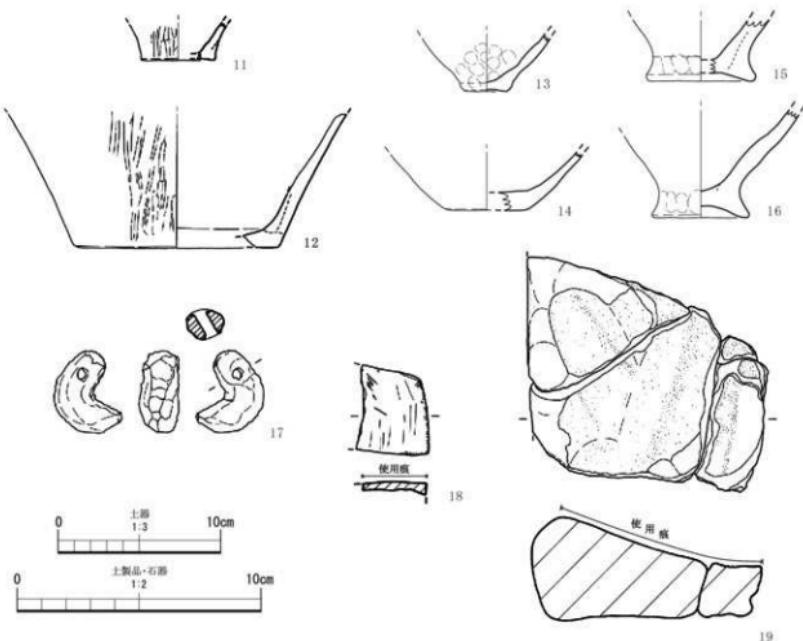
- 1:10YR2/1 黒色。繊りやや有。粘性弱い。砂質土。黒ボク土と砂が混ざった層。
 2:10YR3/3暗褐色。繊りやや弱い。粘性弱い。砂質土。
 3:10YR4/4にぶ・黄褐色。繊りやや弱い。粘性弱い。砂質土。下位を中心にして山10YR6/4にぶ・黄褐色砂混ざる。
 4:10YR4/4暗褐色。繊りやや弱い。粘性弱い。砂質土。下位を中心にして山10YR6/4にぶ・黄褐色砂混ざる。
 5:10YR4/3にぶ・黄褐色。繊りやや弱い。粘性弱い。砂質土。地山10YR6/4にぶ・黄褐色砂ブロック径3cm程度含む。
 6:10YR4/3にぶ・黄褐色。繊りやや弱い。粘性弱い。砂質土。地山10YR6/4にぶ・黄褐色砂ブロック径3cm程度多量に含む。
 7:10YR4/3にぶ・黄褐色。繊り有。粘性弱い。砂質土。地山10YR6/4にぶ・黄褐色砂ブロック主体層。
 8:10YR4/4暗褐色。繊りやや弱い。粘性弱い。砂質土。地山10YR6/4にぶ・黄褐色砂多量に混ざる。
 9:10YR4/4暗褐色。繊りやや弱い。粘性弱い。砂質土。地山10YR6/4にぶ・黄褐色砂ブロック多量に含む。
 10:10YR6/4にぶ・黄褐色。繊りやや弱い。粘性無。砂。地山砂の崩れ。
 a:10YR2/2黒褐色。繊りやや弱い。粘性弱い。砂質土。
 b:10YR3/3暗褐色。繊りやや有。粘性弱い。砂質土。
 c:10YR4/4暗褐色。繊りやや弱い。粘性弱い。砂質土。層そのものの硬質ブロック径3cm程度含む。
 d:10YR4/4暗褐色。繊りやや弱い。粘性弱い。砂質土。
 e:10YR4/4暗褐色。繊り強い。粘性弱い。砂質土。硬化面。硬質ブロックが層より密に入る。ただし遺物を少量含む。
 f:10YR4/6褐色。繊りやや弱い。粘性弱い。砂質土。
 g:10YR4/3にぶ・黄褐色。繊りやや有。粘性弱い。砂質土。層の影響有。
 h:10YR4/4暗褐色。繊りやや弱い。粘性弱い。砂。
 i:10YR4/4暗褐色。繊りやや弱い。粘性弱い。砂。層そのものの硬質ブロック径2cm程度含む。
 j:10YR4/4暗褐色。繊りやや弱い。粘性弱い。砂。層そのものの硬質ブロック径2cm程度多量に含む。
 k:10YR4/4暗褐色。繊りやや弱い。粘性弱い。砂。建物内に堆積した砂が踏みしめられた層か。

1~10:竪穴建物8埋土
 a~e:竪穴建物25埋土
 f~VII:竪穴建物28埋土

第6図 竪穴建物8・25・28実測図 (S=1/60)

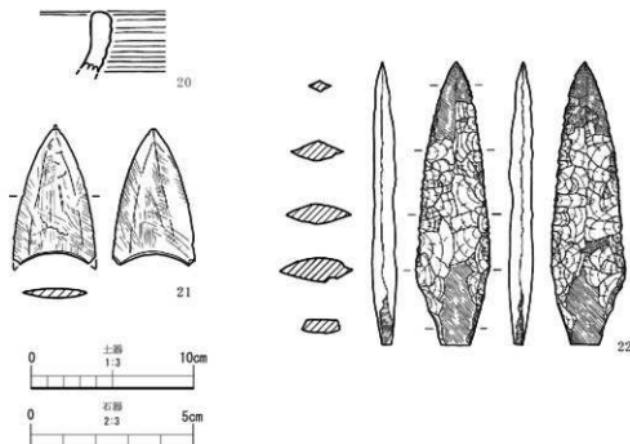
さ0.15mを測る。断面観察から（炉跡断面図の1～3層の部分）浅い掘り込みを有していたと考えられる。建物南側の調査区壁際で大型の砥石が出土した。この砥石周辺も被熱により床面が赤化している。前述のように炉跡が検出されたことから建物埋土のふるいがけが必須であるが、調査期間が限られていたとはいえ行えなかった点は大いに反省される。

遺物は建物のほぼ全面に渡って出土した。28は瀬戸内系の器台の脚部である。裾端部を貼

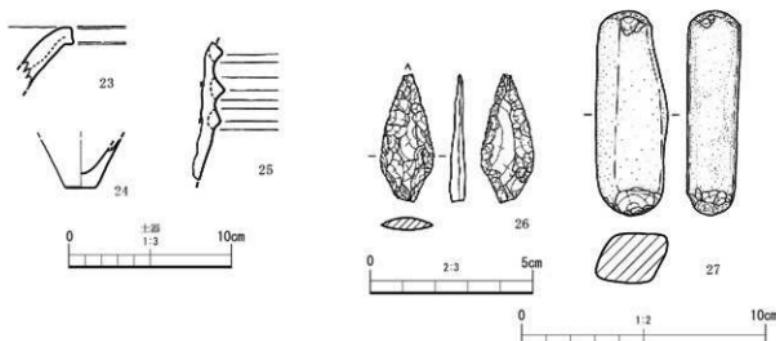


第7図 積穴建物8出土遺物実測図(S=1/3・S=1/2)

り付けにより三角形状に肥厚し外面に回線文を施す。29は壺の口縁部で鋸先状を呈する。30は免田式の長頸壺の肩部で、沈線により直線文と重弧文を描く。31は小型の壺で粗雑な作りである。肩部付近に貼り付けにより突帶を施す。32は小型の広口壺である。34、35は豊後系の多条急突壺の頸部、肩部片である。36は壺の底部で僅かに上げ底を呈する。37から43は甕である。37は中溝式の甕で貼付突帯に刻目を施す。38から40は口縁部がくの字状に屈曲する。38は胴部径が口縁部径を上回る。41、42は大型の甕で貼付突帯を有する。43は甕の底部から胴部片で底部は低い上げ底で裾部が外方へ張り出す。44は粘土塊である。植物の纖維痕が見られ被熱している。45はチャート製の打製石鏽である。回基式で先端部と基部を欠く。46は砂岩製の敲石である。一方の小口面に使用痕が見られる。47は砂岩製の台石である。一部に研磨痕が見られ砥石としても使用されたと考えられる。48は被熱しており酸化鉄と思われる赤色の物質が付着している。ただし酸化鉄は石自体に含まれている鉄分の可能性も否定できない。層状に石英、水晶の結晶が入る。石材は石灰岩であろうか。49は尾鈴山酸性岩製の磨石である。50は砂岩製の砥石(筋砥石)である。長期にわたって使用されたと考えられ複数の使用面が存在する。また、棒状のものを研磨したことによる筋状の使用痕が明瞭に見られる。



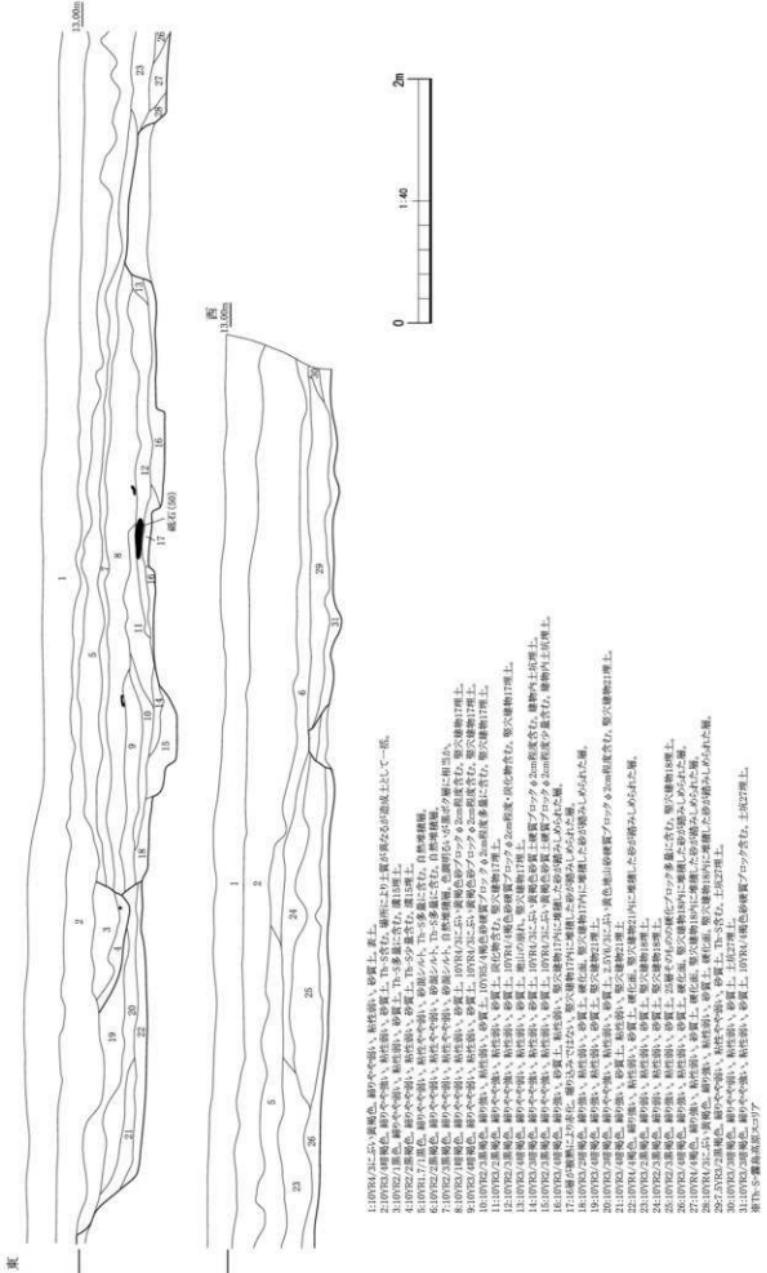
第8図 積穴建物25出土遺物実測図(S=1/3・2/3)



第9図 積穴建物28出土遺物実測図(S=1/3・2/3・1/2)

積穴建物 18（第 10・15・16 図） A 調査区の南端、積穴建物 17 の西側で検出された。建物の北側は溝状構造 5 に西側は土坑 27 に切られ、南側は調査区外に広がっている。平面形は方形を呈すると考えられ、規模が確認できる東西方向は 5.0 m を測る。検出面からの深さは 0.55 m で、積穴建物 17 と同様に使用時の最終的な床面にあたる層からも遺物が出土することから、使用時に崩れては床を均すということを繰り返していたと考えられる。また、堆積した床面上から土坑を掘削している。積穴建物 17 とは異なり調査区内では炉は検出されなかった。床面を精査したが明瞭な主柱穴は確認できなかった。

遺物は建物南東側ではほとんど出土しておらず偏りがある。51、52 は瀬戸内系の高杯脚部である。両資料ともに裾部を三角形状に肥厚している。51 は円形の穿孔を施し、肥厚した裾



部上面に刻目を施す。52は外面に回線文を施す。53は免田式の壺肩部である。沈線により直線文と重弧文を施す。54は甕底部で裾部がハの字状に張り出す。55は壺頸部から胴部である。肩部に3条の三角突帯を貼り付ける。56は緑色堆積岩製の磨製石鏃である。57は尾鈴山酸性岩製の磨石である。一部に鉄分が付着する。

竪穴建物 21（第 10・17 図） A調査区の南端、竪穴建物 17 の東側で竪穴建物 17 に切られる形で検出された。建物の北側は溝状遺構 5、土坑 13 に切られ、溝状遺構 15 に建物中央付近を切られる。南側は調査区外へと広がっている。平面形は方形になるとと思われ、検出面からの深さは 0.3 m を測る。隣接する竪穴建物 17、18 と同様に崩れた砂を敷き均しながら床面にしたと考えられ、使用時の最終的な床面にあたる土層内からも遺物が出土する。

58 は免田式の壺の肩部で沈線により直線文を施す。59 は平底の甕底部である。60 は平底の鉢で口縁部を欠く。61 は凝灰岩製の台石である。

竪穴建物 22（第 18 図） A調査区の南側で検出された。建物南側を溝状遺構 5 に切られる。平面形は方形を呈し、長軸 3.7 m、短軸 3.2 m、検出面からの深さ 0.3 m を測り、近接する竪穴建物と比較すると規模が小さい。床面を精査したところ主柱穴は 2 基検出された。

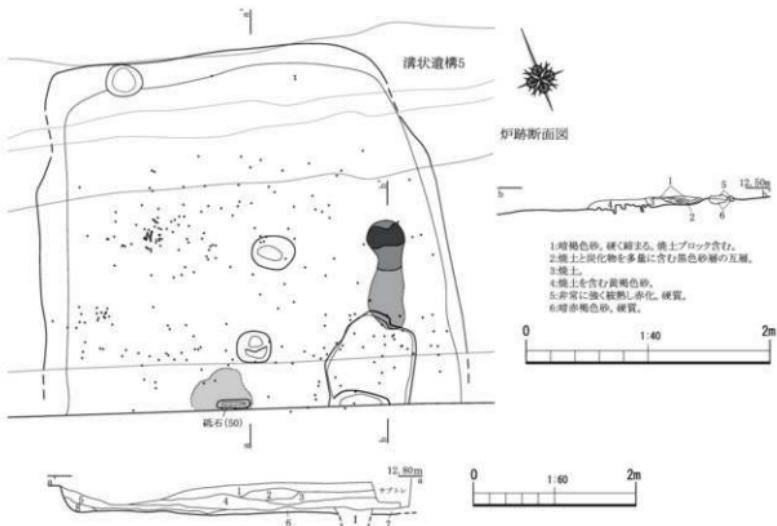
遺物の出土量は少量で図化に耐えうる資料は 62 の三角形の貼付突帯を施す甕胴部片のみである。

竪穴建物 26（第 19 図） A調査区の南西側で検出された。溝状遺構 5 を挟んであるため直接的な切り合い関係を確認することはできないが、竪穴建物 26 が後にする場合、竪穴建物 18 を切る状況になるはずであるが、それが見られなかったことから竪穴建物 18 に先行すると判断できる。検出面からの深さは 0.38 m を測る。

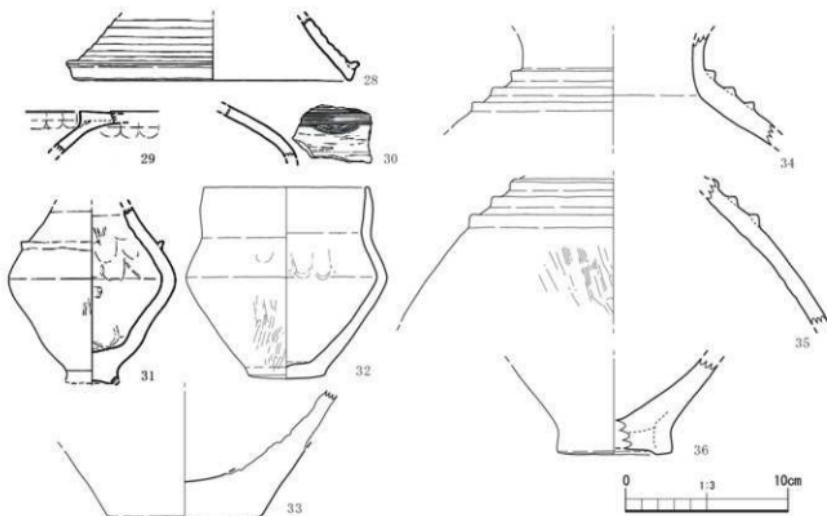
遺物の出土量は少量で北西側に偏る傾向にある。63 は漸戸内系の壺の口縁部から頸部片である。口縁端部を T 字形に肥厚し頸部には回線文を施す。64 は壺の肩部で三角貼付突帯を施す。65 はチャート製の回基式打製石鏃である。66 は硬質砂岩の砥石である。

竪穴建物 72（第 20 図） A調査区の北東側で検出され、東半は搅乱に切られるが調査区外に広がるものと考えられる。平面形はいわゆる間仕切りを有する建物で、調査区内では 3 箇所の突出壁が確認できる。規模が確認できる南北軸は 7.1 m を測る。残存状況が悪く検出面からの深さは 0.15 m しか残っていないかった。床面を精査したが主柱穴は 1 基しか確認できなかった。また、住居の中央付近に土坑を有する。

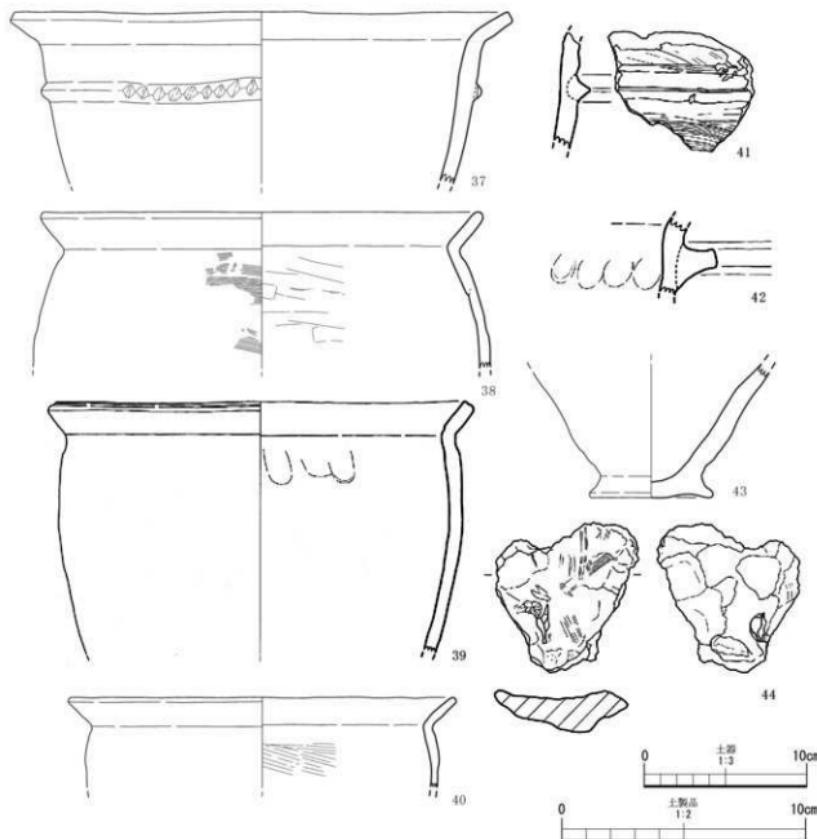
67 は鉢である。薄手でジョッキ形を呈し、外面に丁寧なミガキを施す。68 は広口壺の口縁部、69、70 は壺底部である。71 は中構式の甕で頸部下に刻目突帯を貼り付ける。72 は尾鈴山酸性岩製のスクレイパー、73 は砂岩製の敲石で両小口に使用痕が見られる。74 は軽石製品で中央に円形の穿孔を施すが貫通していない。75 は鉄片である。



1:10VRJ/4暗褐色。細りやや強い。粘性弱い。砂質土。10YR4/4褐色砂層2cm程度のブロック微量に含む。
2:10YR5/2黒褐色。細りやや強い。粘性弱い。砂質土。10YR5/3C 黄褐色砂層2cm程度のブロック含む。
3:10YR5/2暗褐色。細りやや強い。粘性弱い。砂質土。10YR5/3C 黄褐色砂層2cm程度のブロック含む。
4:10YR4/3C 黄褐色。細りやや強い。粘性弱い。砂質土。10YR4/4褐色砂層2cm程度のブロック含む。
5:10YR5/3C 黄褐色。細りやや強い。粘性弱い。砂質土。10YR4/4褐色砂質土砂質ブロック5cm程度含む。
6:10YR4/4 黄褐色。細り強い。粘性弱い。砂質土。10YR4/4褐色砂質土砂質ブロック5cm程度含む。
7:10YR3/4 黄褐色。細りやや強い。粘性弱い。砂質土。10YR3/3 黑褐色。細りやや強い。粘性弱い。砂質土。
8:10YR3/3 黑褐色。細りやや強い。粘性弱い。砂質土。10YR5/3C 黄褐色砂質土砂質ブロック含む。ビット堆土。



第11図 壁穴建物17実測図 (S=1/60・1/40) 及び出土遺物実測図 (S=1/3)



第12図 堪穴建物17出土遺物実測図①(S=1/3・1/2)

堪穴建物 74（第21図） A調査区の北側で検出された。溝状構造 59 と土坑 54 に切られる。平面形は方形を呈し、長軸 3.65 m、短軸 3.3 m、検出面からの深さは 0.1 m を測る。平面規模は堪穴建物 22 に近い。上部は削平を受けており、床面付近が幸うじて残存する状況であった。建物の中央北寄りで焼土面が検出された。焼土面は平面不整形で長軸 0.7 m、短軸 0.6 m、断面観察から浅い掘り込みを有している。堪穴建物 17 で検出された炉と比較すると被熱度合いは弱く、日常的な火所と考えられる。

遺物の出土量は少量で、焼土面やその周辺からも土器片が出土したもののが化に耐えうるもののはなかった。

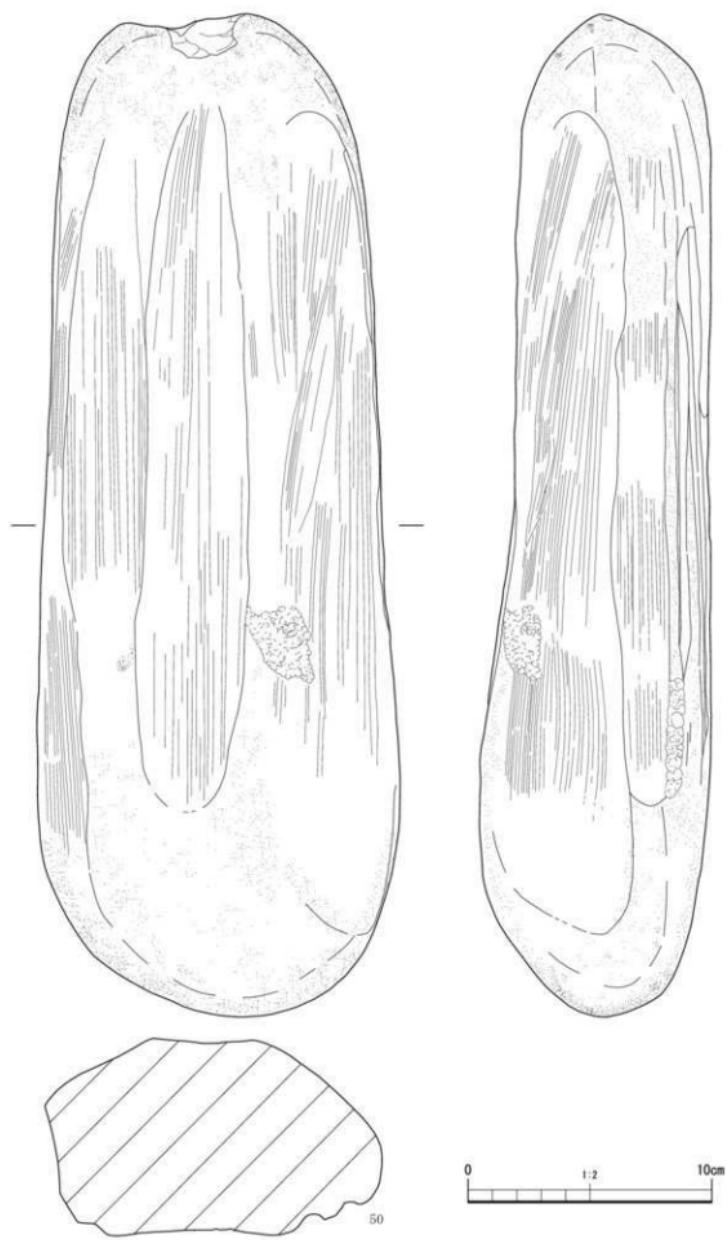
堪穴建物 82（第22・23図） A調査区の北西端で検出された。残存状況は非常に悪く、建物



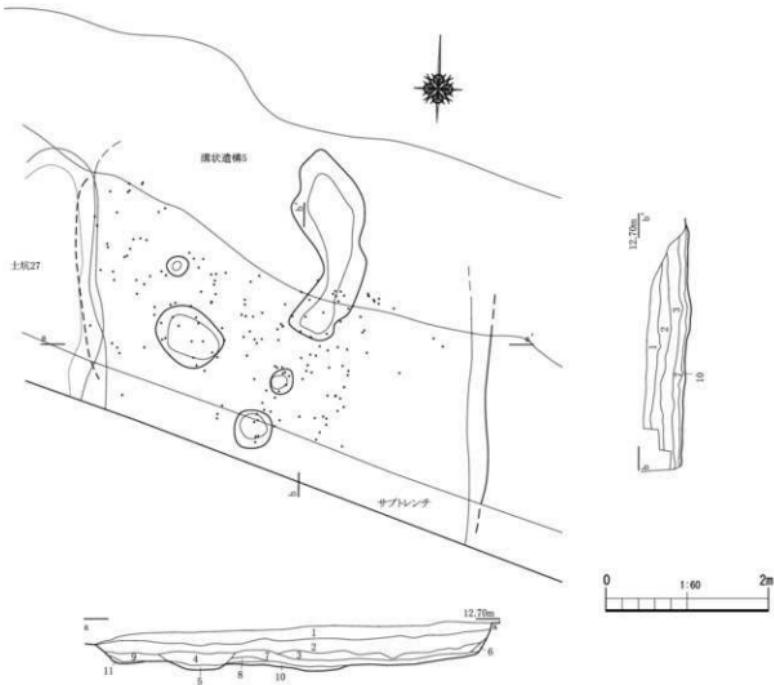
北西側は搅乱により完全に失われていた。平面形はいわゆる間仕切りを有する建物で、残存していた範囲では2箇所の突出部を有する。長軸4.85m、短軸4.8m、検出面からの深さ0.2mを測る。主柱穴は多数の搅乱のため判然としない。建物の中央と南西側に土坑を有し、特に南西側の土坑から多くの遺物が出土した。

76、77は須歎系の壺である。同一個体であり、口縁部上に円形浮文を施し、頭部から胴部にかけて三角突帯を貼り付ける。赤彩が施されている。78は瀬戸内系の器台口縁部である。外面に円形の刺突文を施す。79、80は直口壺の口縁部である。80は外面に回線文が施されている。81、82は中溝式の壺である。頭部下に刻目突帯を貼り付ける。83は山ノ口式の壺の底部である。胎土に雲母を含む。84は安山岩製の凸基式打製石鐵である。85は軽石製品である。破片のため全形は明らかではないが断面半円形の弧を描く掘り込みが施されている。86は砂岩製の不明石製品である。図化した上面側に浅い窪みを有する。87は砂岩製の砥石である。88は砂岩製の敲石である。側面に多数の使用痕が見られる。89は鉄鐵である。薄い鉄片を加工した簡易なもので2つの穿孔が施されている。

第13図 竪穴建物17出土遺物実測図②(S=2/3・1/2)



第14図 竪穴建物17出土遺物実測図③(S=1/2)



1:10YR4/3に54、黄褐色。細りやや弱い、粘性弱い、砂質土。

2:10YR4/3暗褐色。細り有、粘性弱い、砂質土。他のものが硬化的した様3cm程度のブロックを含む。

3:10YR3/2褐色。細りやや有、粘性弱い、砂質土。深度約30cmの10YR6/4に54、黄褐色砂ブロック含む。

4:10YR3/2黒褐色。細りやや有、粘性弱い、砂質土。上部埋土。

5:4層と地山砂2.5%1黄褐色の混合層。粗粒、土塊埋土。

6:10YR6/4に54、黄褐色。細りやや有、粘性無、路、地山砂の隙れ。

7:10YR4/3に54、黄褐色。細りやや有、粘性弱い、砂質土。径3cm程度の10YR6/4に54、黄褐色砂ブロック含む。

8:10YR2/3暗褐色。細り弱い、粘性弱い、砂質土。

9:10YR6/4に54、黄褐色。細りやや有、粘性弱い、砂質土。地山砂主体。

10:10YR4/4褐色。細りやや有、粘性弱い、砂質土。地山砂で、炭化の混合層。

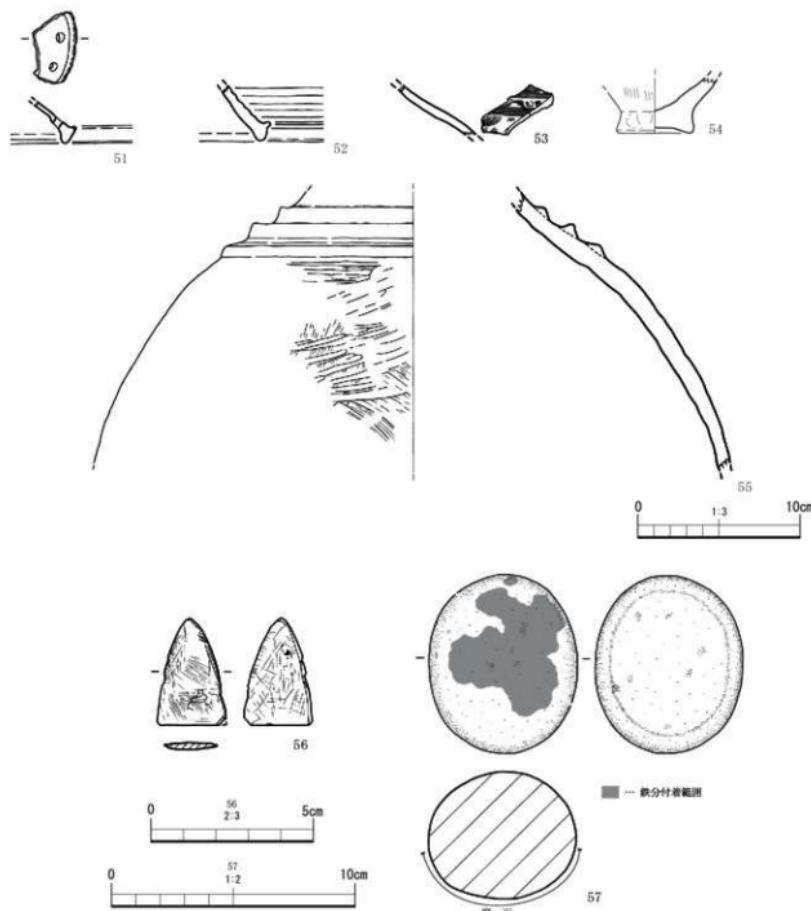
11:10YR5/4に54、黄褐色。細り弱い、粘性無、砂、地山砂の隙れ。

第15図 堅穴建物18実測図 (S=1/60)

第2項 挖立柱建物

掘立柱建物 110(第24図) A調査区の中央付近で検出された3間×2間の掘立柱建物である。桁行間4.9m、梁行間3.5mを測り、建物主軸はN-10°-Eである。柱穴の平面形は不整円形で直径は0.4mから0.55mである。柱穴の埋土は暗褐色砂で、弥生時代の包含層の埋土と類似する。図化可能な遺物は出土していない。

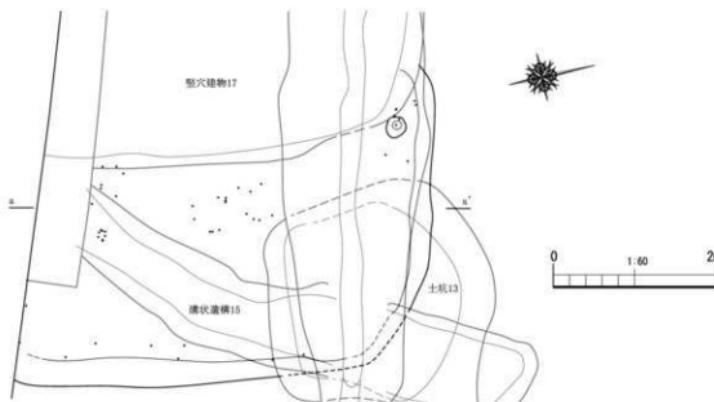
掘立柱建物 111(第25図) A調査区の北側で検出された1間×1間の掘立柱建物である。桁行間3.25m、梁行間2.05mを測り、建物主軸はN-15°-Wである。柱穴の平面形は不整円形で直径は0.5mである。柱穴の埋土は暗褐色砂で、図化可能な遺物は出土していない。埋土の質感が他の弥生時代の遺構と類似するため、弥生時代に帰属すると判断した。



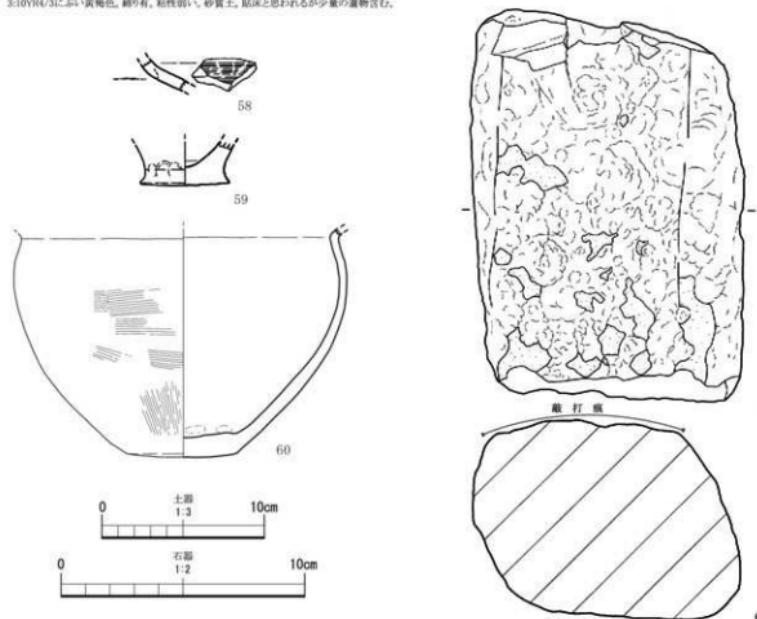
第16図 積穴建物18出土遺物実測図 (S=1/3・S=2/3・S=1/2)

掘立柱建物 112(第26図) A調査区の中央西側で検出された2間×1間の掘立柱建物である。桁行間3.9m、梁行間2.75mを測り、建物主軸はN-8.5°-Eである。柱穴の平面形は不整円形で直径は0.3mから0.55mである。柱穴の埋土は暗褐色砂で、図化可能な遺物は出土していない。埋土の質感が他の弥生時代の遺構と類似するため、弥生時代に帰属すると判断した。

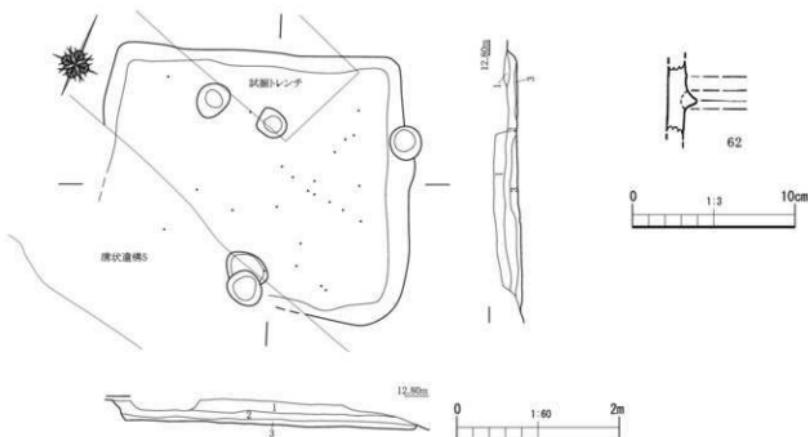
掘立柱建物 113(第27図) A調査区の中央東側で検出された2間×1間の掘立柱建物である。桁行間3.8m、梁行間2.8mを測り、建物主軸はN-3.5°-Eである。柱穴の平面形は不整



1:10YR3/3暗褐色。細やかで弱い、粘性弱い、砂質土。
2:10YR3/4暗褐色。細やかで弱い、粘性弱い、砂質土。径3cm程度の2層そのものの硬質ブロック含む。
3:10YH4/3に近い黄褐色。細や有、粘性弱い、砂質土。粘土と思われるが少量の遺物含む。



第17図 壓穴建物21及び出土遺物実測図 (S=1/60・S=1/3・S=1/2)



第18図 堪穴建物22及び出土遺物実測図 (S=1/60・S=1/3)

円形で直径は0.35mから0.65mを測る。柱穴の埋土は暗褐色砂で、図化可能な遺物は出土していない。埋土の質感が他の弥生時代の遺構と類似するため、弥生時代に帰属すると判断した。

第3項 土坑

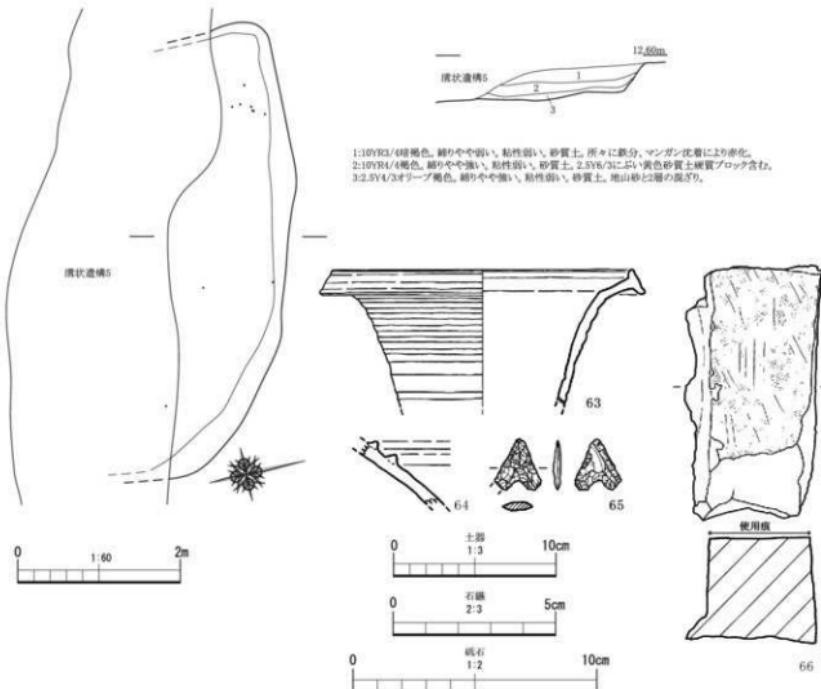
土坑2（第28図） A調査区の南西側で検出された平面楕円形の土坑である。長軸1.36m、短軸0.9m、検出面からの深さ0.26mを測る。断面を見ると土坑中央付近が一段窪むが、埋土は均質なものであった。

土坑3（第28図） A調査区の南西側、土坑2の南に近接する位置で検出された平面円形の土坑である。直径1.05m、検出面からの深さ0.28mを測る。断面を見ると東側が一段窪むが、埋土は均質なものであった。

土坑7（第28図） A調査区の南側中央付近、溝状遺構11を切る形で検出された。平面円形で直径1.15m、検出面からの深さ0.32mを測る。埋土内に炭化物粒を含むが、被熱痕跡は確認できなかった。少量の土器が出土したが図化可能な遺物はなかった。

土坑14（第28図） A調査区の南側中央付近、堪穴建物28の北に近接する位置で検出された。平面隅丸方形で、長軸0.88m、短軸0.72m、検出面からの深さ0.08mを測る。

土坑16（第28図） A調査区の南側中央付近、堪穴建物8に切られる形で検出された。平面



第19図 堅穴建物26及び出土遺物実測図 (S=1/60・S=1/3・S=2/3・S=1/2)

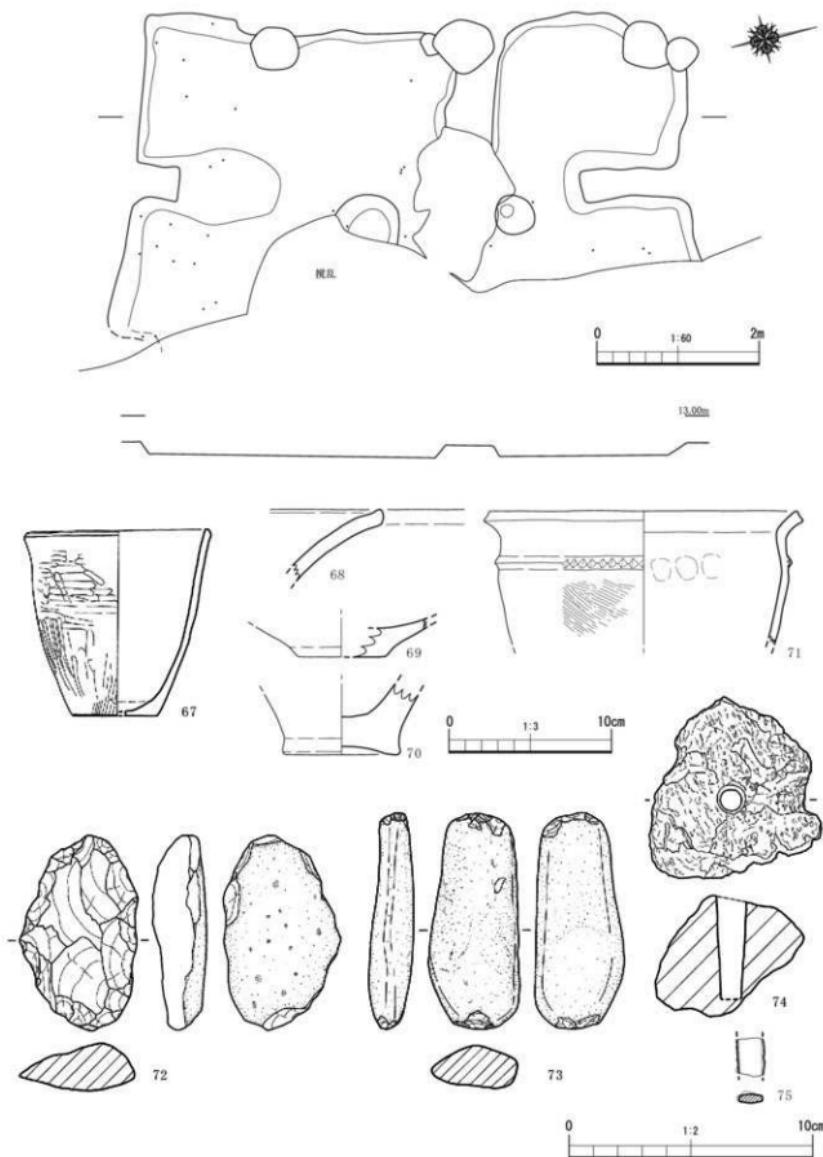
形は橢円形を呈すると思われ、東西軸は1.38 m、検出面からの深さ0.25 mを測る。少量の土器が出土したが図化可能な遺物はなかった。

土坑30（第28図） A調査区の南西側、堅穴建物18の床面下から検出された。平面形は歪な三角形状で、長軸1.24 m、短軸1 m、検出面からの深さ0.18 mを測る。検出位置から堅穴建物18の建物内土坑の可能性もある。

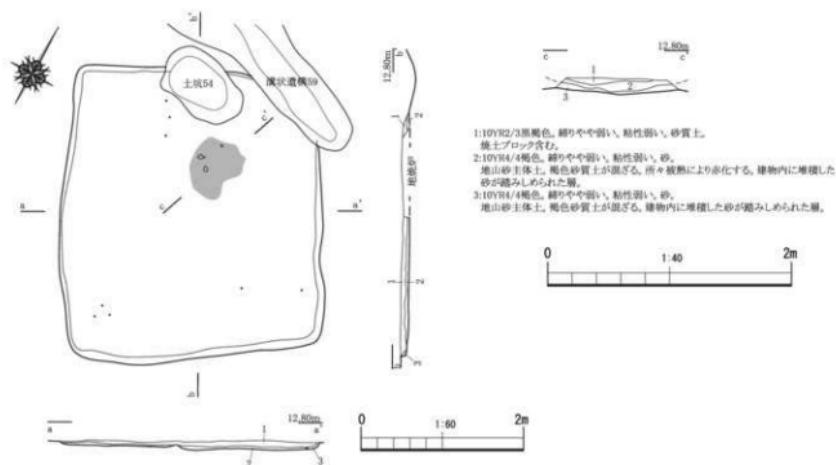
土坑33（第29図） A調査区の南西側、堅穴建物8、25に切られる形で検出された。平面形は残存部が僅かなため判然としないが、確認できる範囲で長さ1.28 mを測る。少量の土器が出土したが図化可能な遺物はなかった。

土坑71（第29図） A調査区の北西側で検出された平面方形の土坑である。長軸3 m、短軸1.98 m、検出面からの深さ0.62 mを測る。遺構北端の床面から2基のピットが検出された。

遺物の出土量は少量で、1、2層を中心に出土した。90は甕の口縁部で、口縁端部に沈線を施す。



第20図 竪穴建物72実測図 ($S=1/60$) 及び出土遺物実測図 ($S=1/3 \cdot S=1/2$)



第21図 竪穴建物74実測図(S=1/60)及び地焼炉断面図(S=1/40)

91は甕の底部である。低い上げ底で裾部が外方へと張り出す。

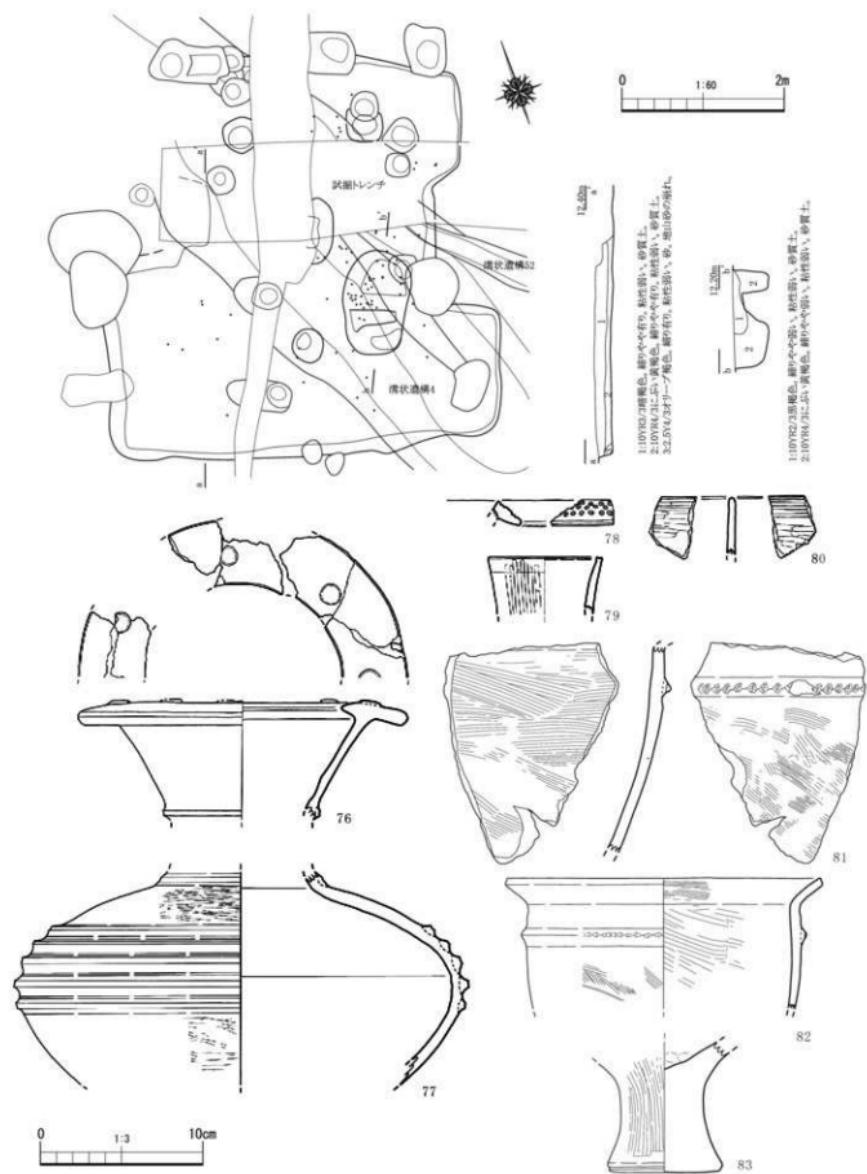
土坑75(第29図) A調査区の北西側で土坑76と並んで検出された。平面形は歪な円形で径1.04m、断面はボウル形を呈し検出面からの深さ0.32mを測る。

土坑76(第29図) A調査区の北西側で土坑75の東側で検出された。平面形は歪な円形で径1.3mを測る。断面は平底で壁面がほぼ垂直に立ち上がる。東壁は埋没途中に一部崩落しオーバーハングしている。

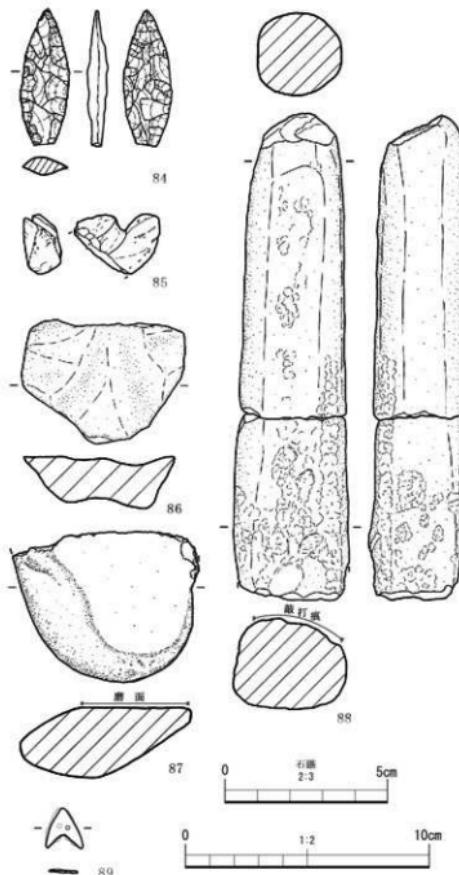
土坑77(第30図) A調査区の北西側で周溝状遺構83を切る形で検出された。平面形は梢円形で長軸1.46m、短軸1.3m、検出面からの深さ0.16mを測る。断面は浅い皿状を呈するが、周辺で検出された地山がにぶい黄橙色砂と灰白砂の境界付近であることから上部は削平を受けていると思われる。

遺物の出土量は土坑規模と比較すると多く、器形が復元できるものも多い。92は甕のミニチュア土器、93は鉢のミニチュア土器である。94は壺で口縁部がくの字状に屈曲し、外面にミガキを施す。95は壺の胴部から底部である。96は大型の壺の胴部で外面にミガキを施す。97は中溝式の甕で頸部下に刻目突帯を貼り付ける。口縁端部がナデにより回線状に窪む。98は尾鈴山酸性岩製の磨石である。

土坑84(第31図) A調査区の中央西側で検出された平面梢円形の土坑である。長軸1.15m、



第22図 竪穴建物82実測図(S=1/60)及び出土遺物実測図(S=1/3)



第23図 積穴建物82出土遺物実測図(S=2/3・S=1/2)

る。102は壺の頸部から胴部片である。103は壺の肩部片で外面に線刻が施されている。線の太さは2種あり、1mm程度の幅のものと、針状の工具で線刻された非常に細い幅のものがある。線刻が破片外に広がっているためモチーフは判然としないが、鋸歯を組み合わせたものである。104は壺の底部である。105、106は甕の口縁部で106は薄手の器壁である。107は中溝式の甕で頸部下に貼付突帯を施す。108は軽石製品である。欠損しているが本来は環状を呈すると考えられる。径8mm程度の円形の穴を開けている。

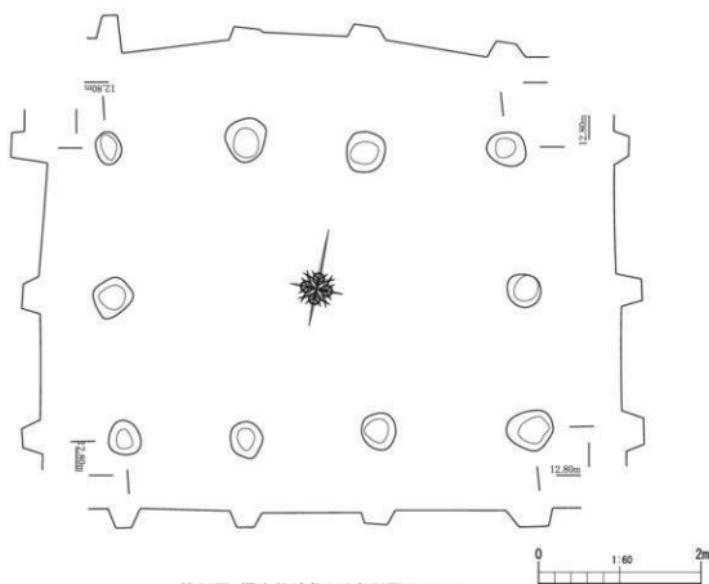
土坑94(第31・34図) 土坑86に切られる形で検出された平面梢円形の土坑である。長軸3.92

短軸0.85m、検出面からの深さ0.2mを測る。断面は逆台形状を呈し、埋土は弥生時代包含層に似る黒褐色砂質土である。

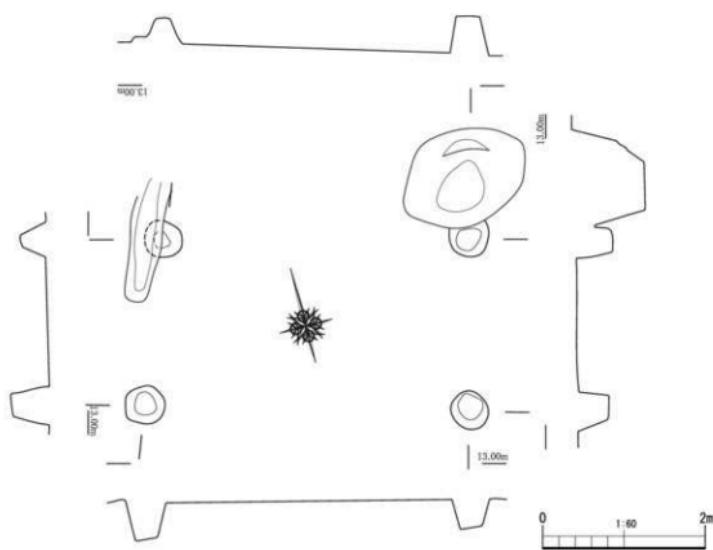
土坑87(第31図) A調査区の中央付近で検出された平面梢円形の土坑である。長軸0.9m、短軸0.72m、検出面からの深さ0.2mを測る。断面は角の無い逆台形状を呈し埋土は弥生時代包含層に似る黒褐色砂質土である。

土坑86(第31～33図) A調査区の中央北寄りで検出された平面隅丸方形の土坑である。長軸2.52m、短軸1.98m、検出面からの深さ0.35mを測る。断面は西側が垂直に近い角度で立ち上がるが、東側は皿状に緩やかに立ち上がる。

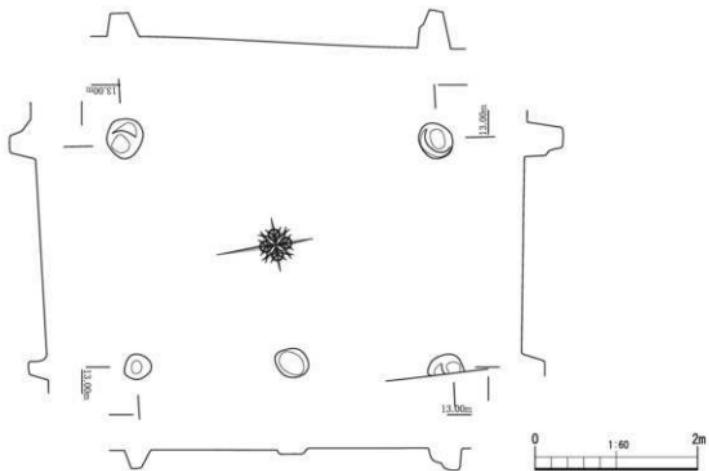
99は豊後系の甕である。口縁部から胴部片で、口縁端部外縫と上部に竹管文を、肩部付近に波状文を施す。100、101は鉢である。101は黒髮式の脚台付鉢で口縁部から頸部にかけて外面に粘土を貼り付け肥厚している。



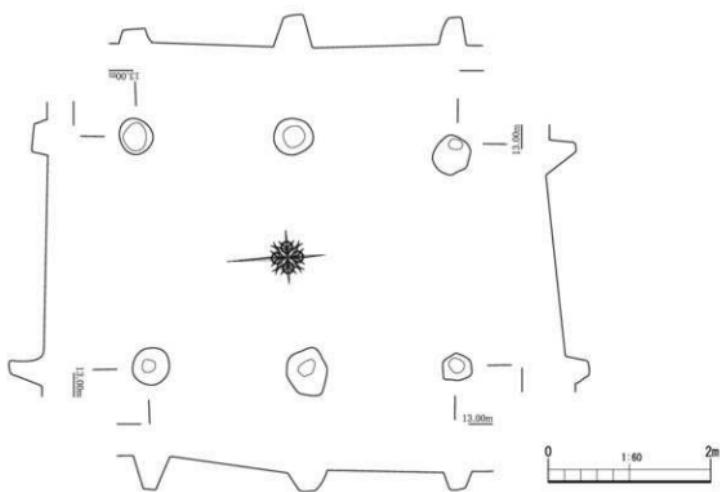
第24図 挖立柱建物110実測図 (S=1/60)



第25図 挖立柱建物111実測図 (S=1/60)



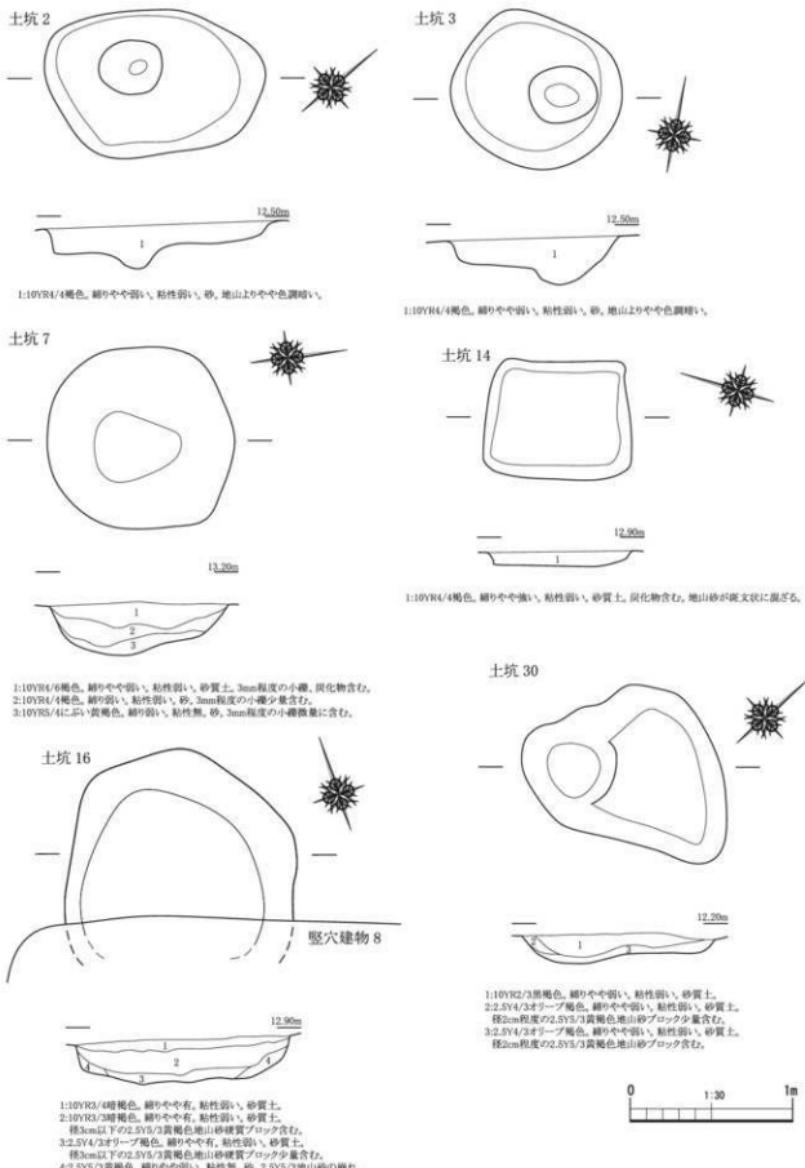
第26図 挖立柱建物112実測図 (S=1/60)



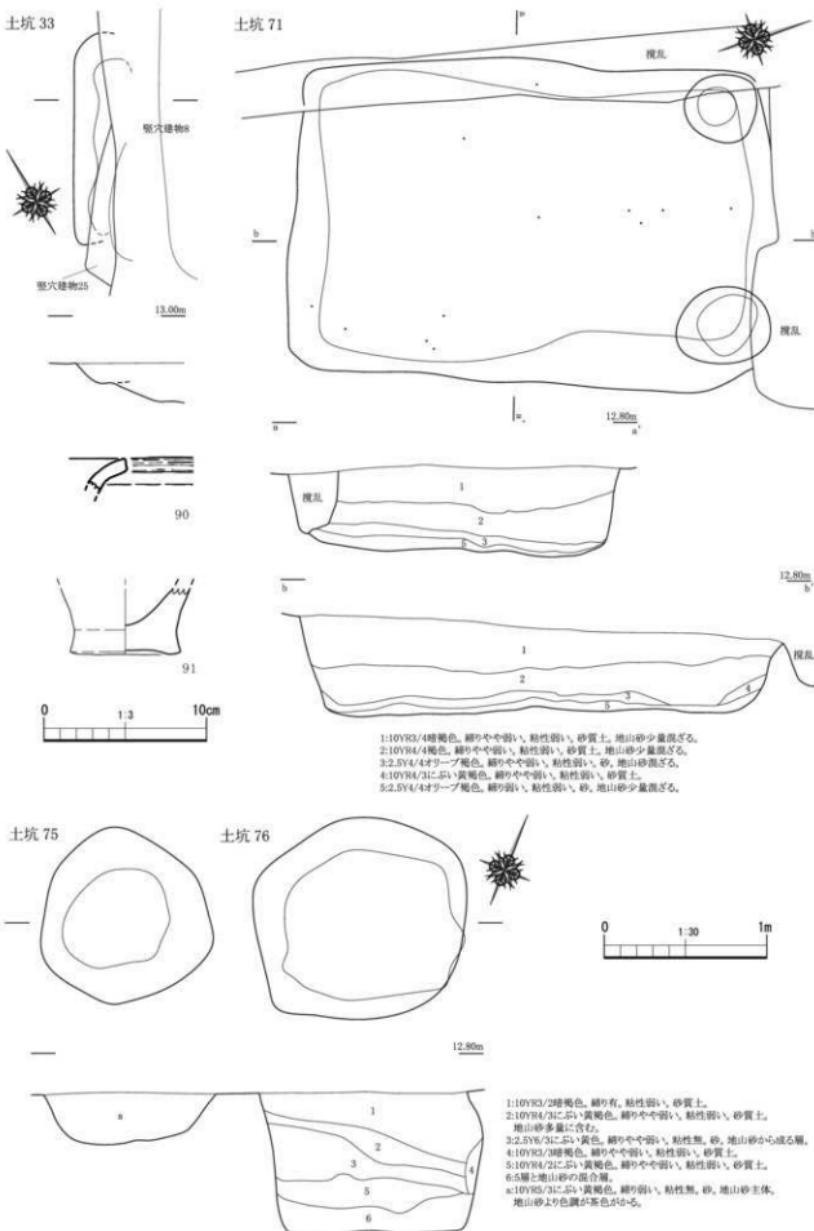
第27図 挖立柱建物113実測図 (S=1/60)

m、短軸 2.7 m、検出面からの深さ 0.44 m を測る。

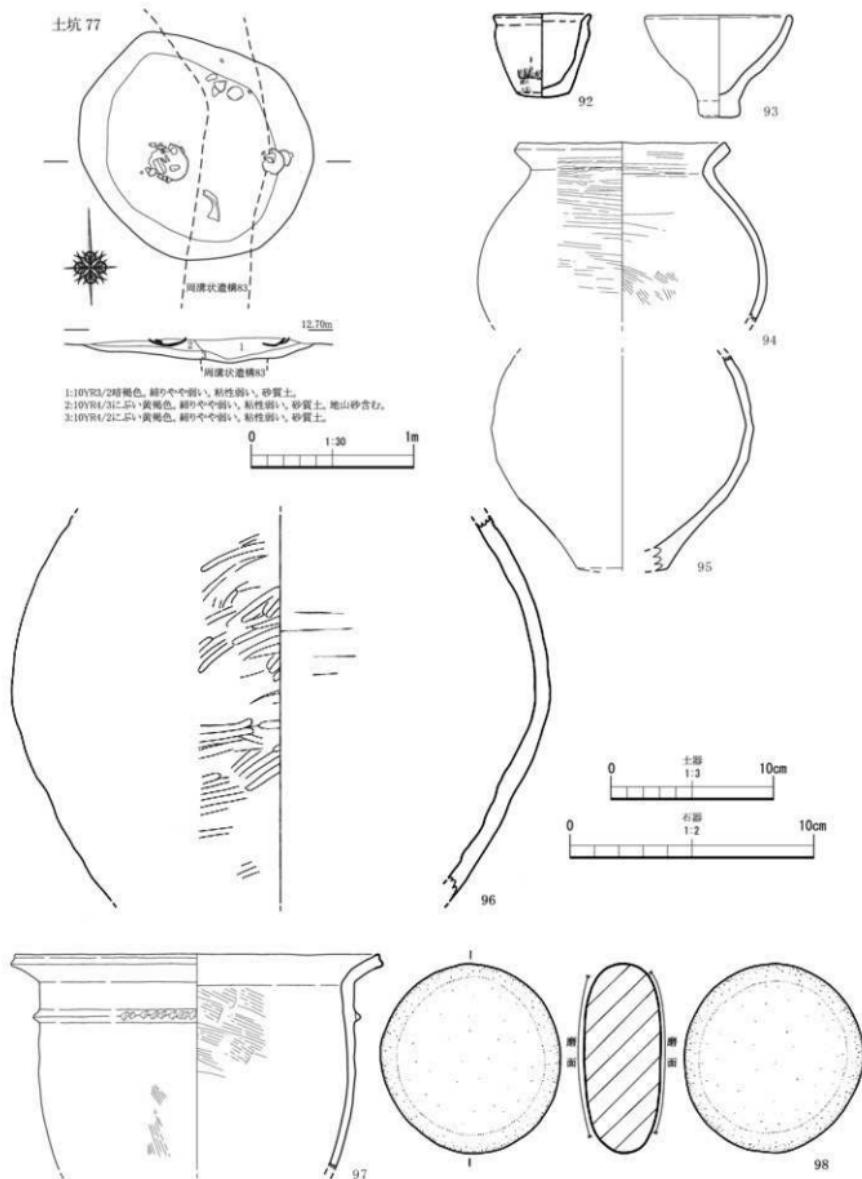
109、110 は堺の口縁部である。口縁部がくの字に屈曲する。109 は口縁端部を上方に摘み上げている。



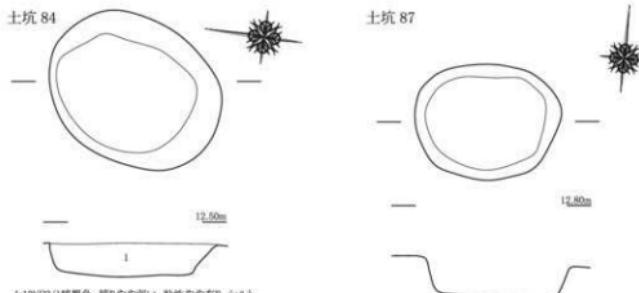
第28図 弥生時代土坑実測図① (S=1/30)



第29図 弥生時代土坑実測図(S=1/30) 及び出土遺物実測図①(S=1/3)

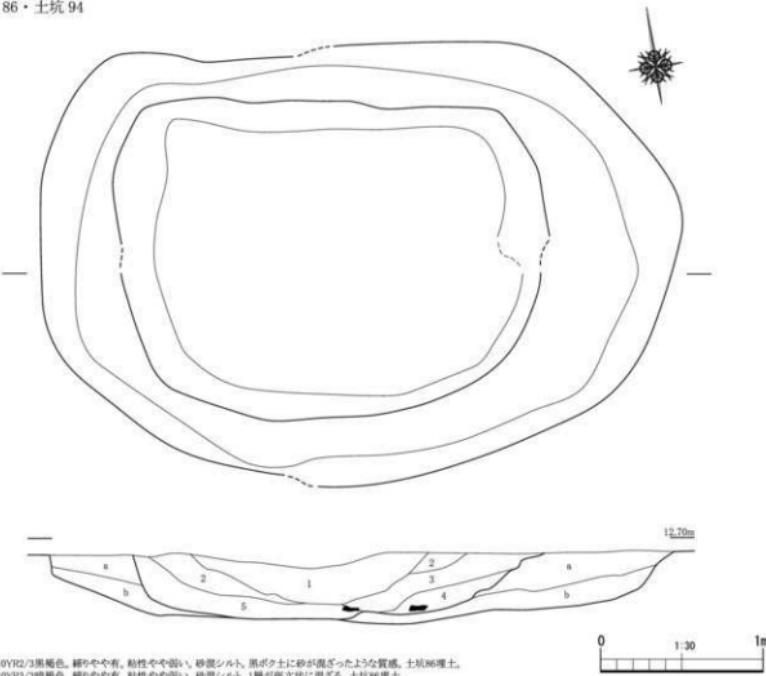


第30図 弥生時代土坑実測図(S=1/30) 及び出土遺物実測図②(S=1/3・1/2)



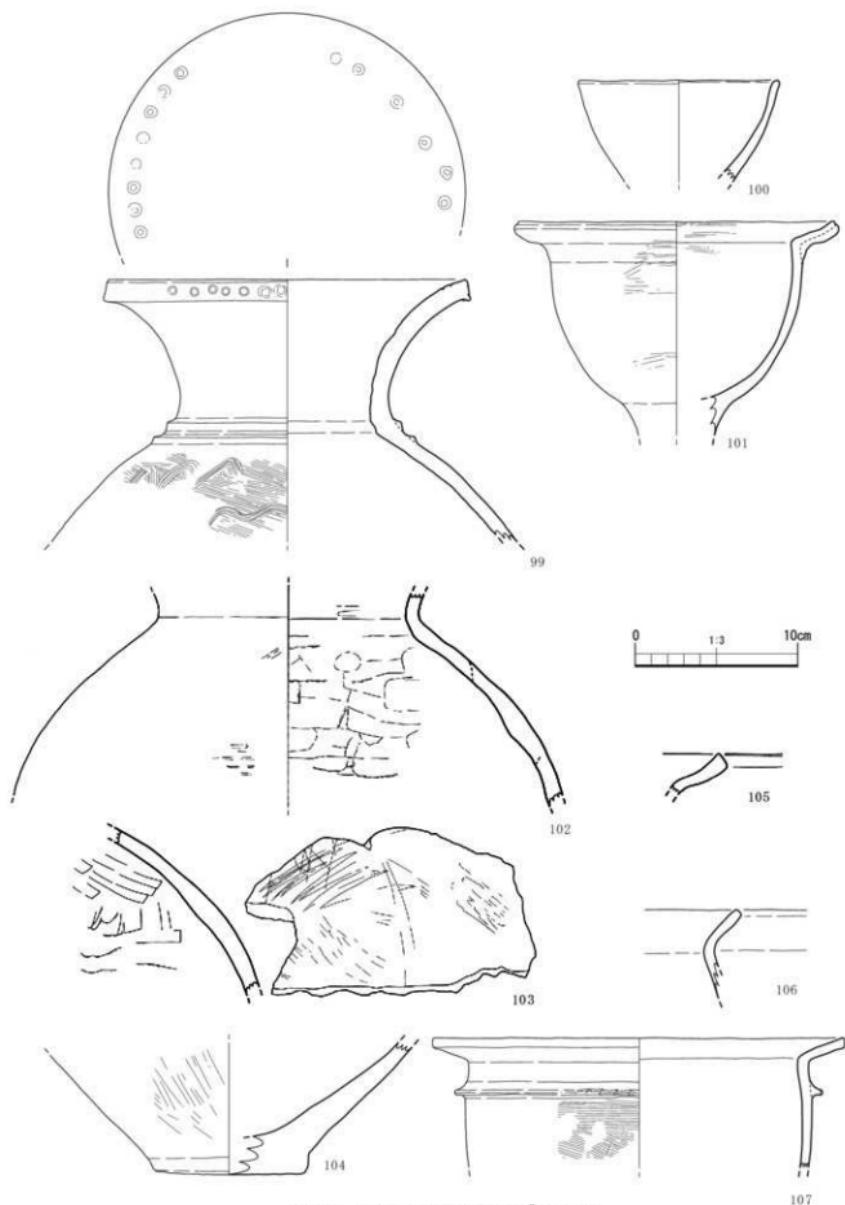
1:10YR2/1暗褐色。締りやや弱い。粘性やや有り。シルト。
下位は地山砂が少量混ざる。

土坑 86・土坑 94

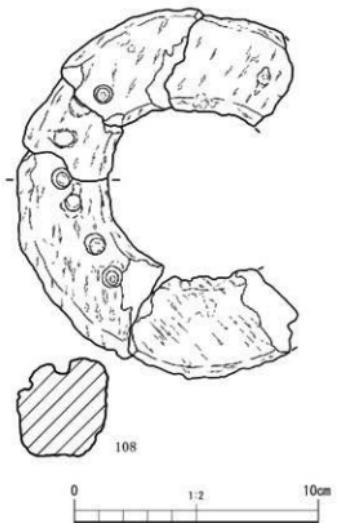


- 1:10YR2/2黒褐色。締りやや有り。粘性やや弱い。砂質シルト。固ボク土に砂が混ざったような質感。土坑86埋土。
2:10YR2/3暗褐色。締りやや有り。粘性やや弱い。砂質シルト。1層が断文状に混ざる。土坑86埋土。
3:10YR2/3暗褐色。締りやや有り。粘性やや弱い。砂質シルト。地山砂硬質ブロック少量含む。1層が断文状に混ざる。土坑86埋土。
4:10YR2/3暗褐色。締りやや有り。粘性弱い。砂質土。砂質シルト。地山砂硬質ブロック少量含む。土坑86埋土。
5:10YR2/2黒褐色。締りやや弱い。粘性弱い。砂質土。土坑94埋土。
a:10YR2/4暗褐色。締りやや有り。粘性弱い。砂質土。土坑94埋土。
b:10YR4/3iに近い。黄褐色。締りやや有り。粘性弱い。砂質土。土坑94埋土。

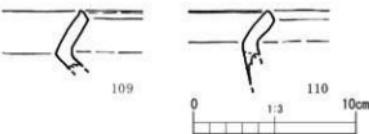
第31図 弥生時代土坑実測図②(S=1/30)



第32図 土坑86出土遺物実測図①(S=1/3)



第33図 土坑86出土遺物実測図②(S=1/2)



第34図 土坑94出土遺物実測図(S=1/3)

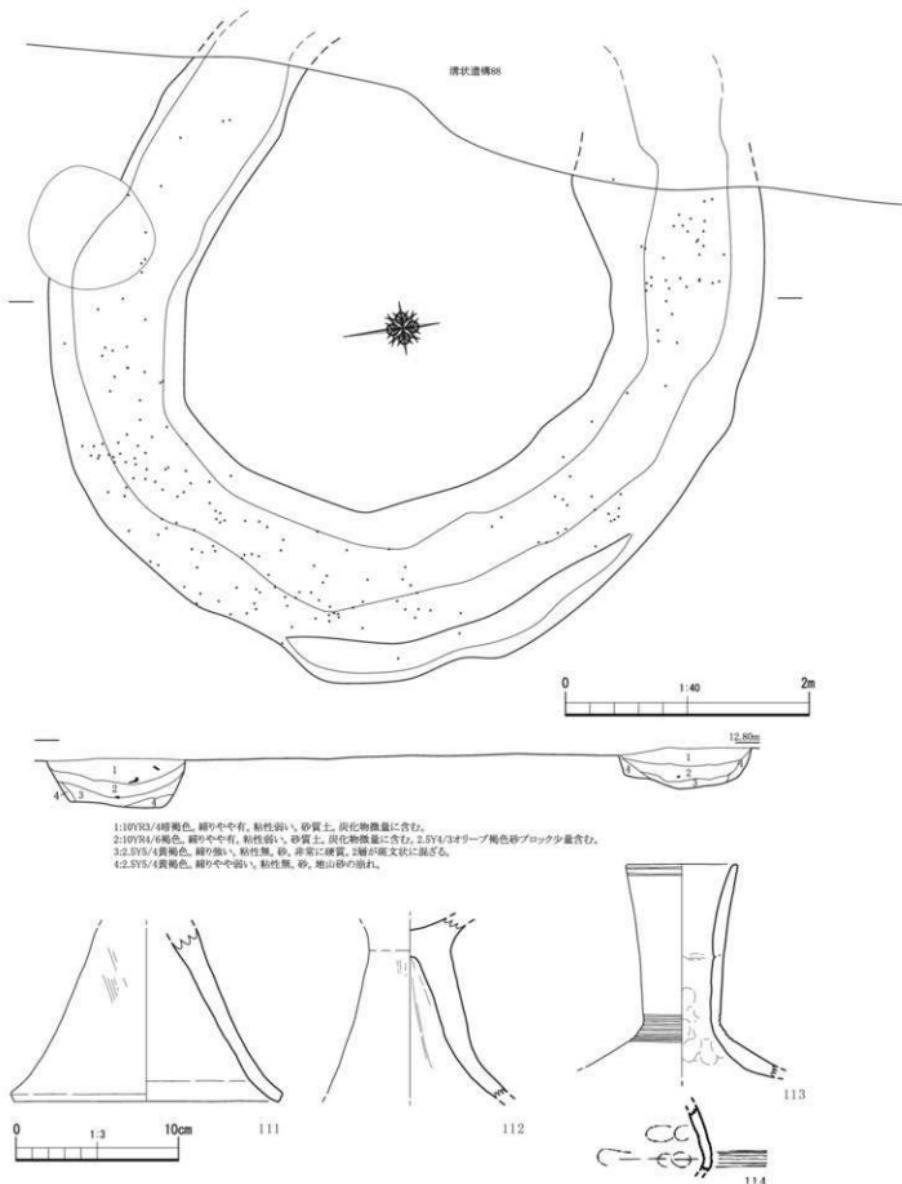
第4項 周溝状遺構

周溝状遺構 81（第35～37図）A調査区の中央付近で東側を溝状遺構 88に切られる形で検出された。平面形はやや歪な円形で、外周の直径は5.84m、周溝幅は1.4mから0.94m、検出面からの深さ0.38mを測る。周溝幅が広くなっている箇所はテラス状の段を有している。周溝の横断面は逆台形を呈し、最下層（3層）が硬化している。土層断面図を作成した箇所においては再掘削の状況は確認できなかった。また、周溝内側の区画にサブトレンチを設定し掘削を行なったが関連する遺構は検出されなかつた。

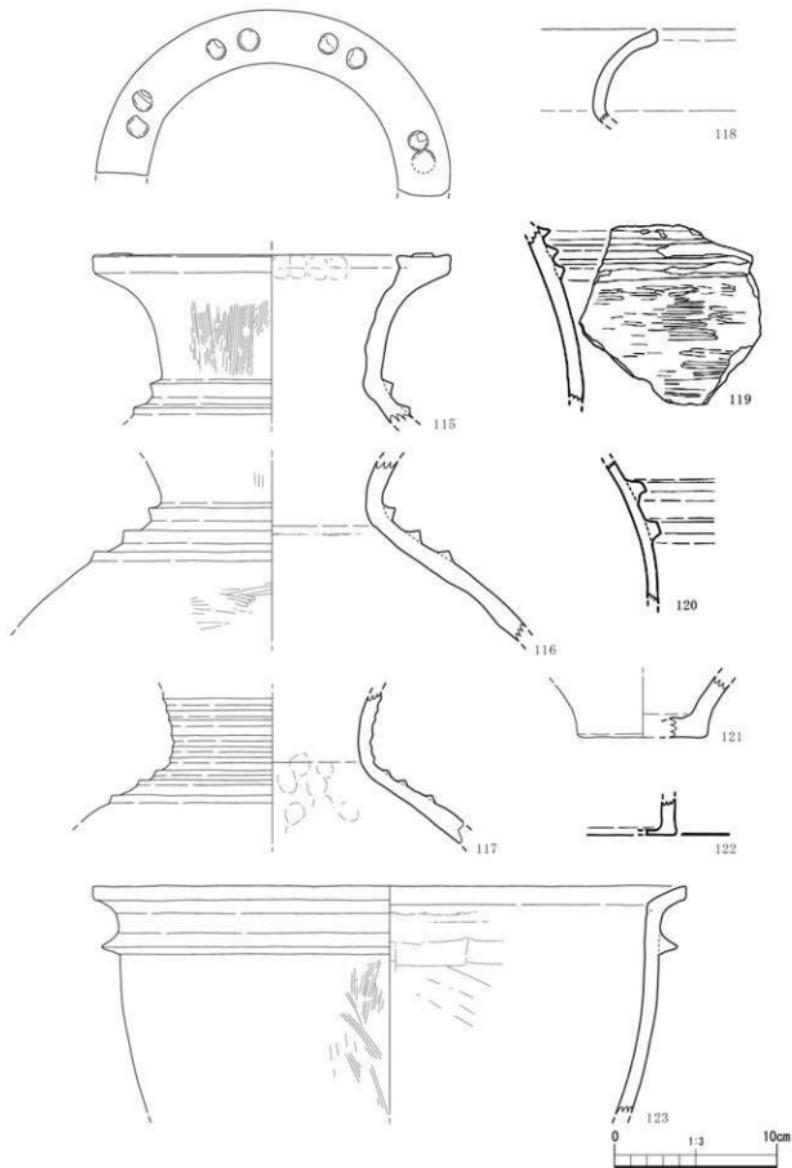
遺物は濃淡はあるが局所的ではなく満遍なく出土する傾向にあった。111、112は高壺の脚部である。直線的に開き裾端部が外方へ屈曲する。残存部位においては穿孔は確認できなかった。113、114は長頸壺である。口縁部、頸部、胴部にそれぞれ沈線により直線文を施す。115、116は豊後系の壺である。115は鋤先状口縁を呈し、口縁部上に円形浮文を施す。何れも頸部から肩部に三角突帯を貼り付ける。118は広口壺の口縁部である。119、120は壺の胴部で突帯を貼り付ける。121は壺の底部である。122は小型のジョッキ形土器の底部である。底部は非常に薄手で丁寧な作りである。123から128は甕である。123、124は刻目をもたない突帯を、125から127は刻目突帯を貼り付ける。125、126は刻目を突帯に対して直角に、127は斜めに刺突する。129は鉢で胴部から口縁部に向かって僅かに内湾する。130は砂岩製の敲石で一方の小口面に使用痕が見られる。

周溝状遺構 83（第38図）調査区の北西側で土坑77に切られる形で検出された。周溝の一部は調査区外へと広がる。周辺の地山がにぶい黄橙色砂と灰白砂の境界付近であることに加え、表土直下で地山が検出されたことから上部が削平を受けていると考えられる。削平の影響も考慮する必要があるが、平面形はコの字形になると思われ、外周幅4.78m、周溝最大幅は0.64m、検出面からの深さ0.22mを測る。周溝の横断面はU字形を呈し、周溝状遺構 81とは異なり硬化した土層は検出されなかつた。

遺物は南辺、特に南西側を中心に出した。131は瀬戸内系の高壺である。壺底面は円盤充填による成形で、ほぼ水平の壺底面と直立する口縁部を有する。口縁部外面には凹線文を施す。脚部は直線的な柱から屈曲し裾に向かいスカート状に開き、裾端部は三角形状に肥厚する。柱



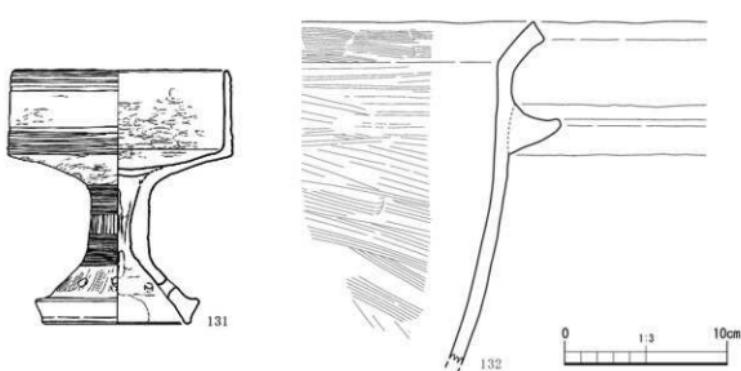
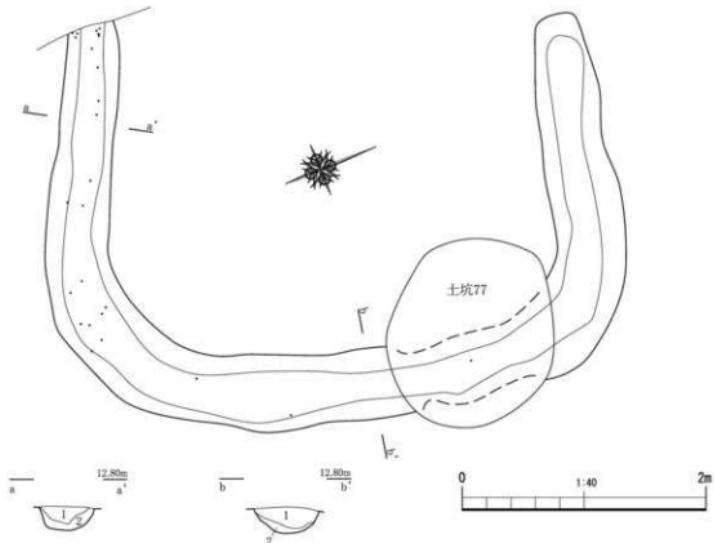
第35図 周溝状遺構81実測図 (S=1/40) 及び出土遺物実測図 (S=1/3)



第36図 周溝状遺構81出土遺物実測図①(S=1/3)



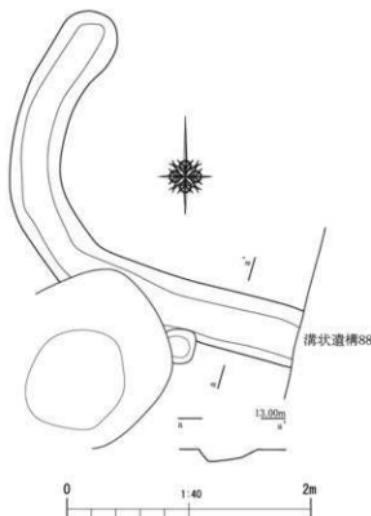
第37図 周溝状遺構81出土遺物実測図②(S=1/3・1/2)



第38図 周溝状遺構83実測図(S=1/40) 及び出土遺物実測図(S=1/3)

外面は四線文を施し内面にはシボリ痕が残る。蓋部には円形の穿孔が施される。132は中溝式の大型の甕である。口縁部はくの字に屈曲し、頸部下に突帯を貼り付ける。口縁部の屈曲はやや緩くなっている。

周溝状遺構 85 (第39図) A調査区の中央北寄りで溝状遺構 88 に東側を切られる形で検出



第39図 周溝状遺構85実測図 (S=1/40)

された。周辺の地山は灰白砂であることから上部が大きく削平されていると考えられる。周溝状遺構と認定した根拠は、平面形が弧を描きながら約90°屈曲する形状からで、本来は周溝状遺構83に類似する形状であったと考えられる。周溝最大幅は0.48m、検出面からの深さ0.1mを測る。周溝の横断面は逆台形状を呈し、硬化した土層は検出されなかった。

第5項 溝状遺構

溝状遺構11（第40図） A調査区の中央南側、土坑7に切られる形で検出された。横断面は逆台形を呈し、最大幅0.3m、検出面からの深さ0.1mを測る。

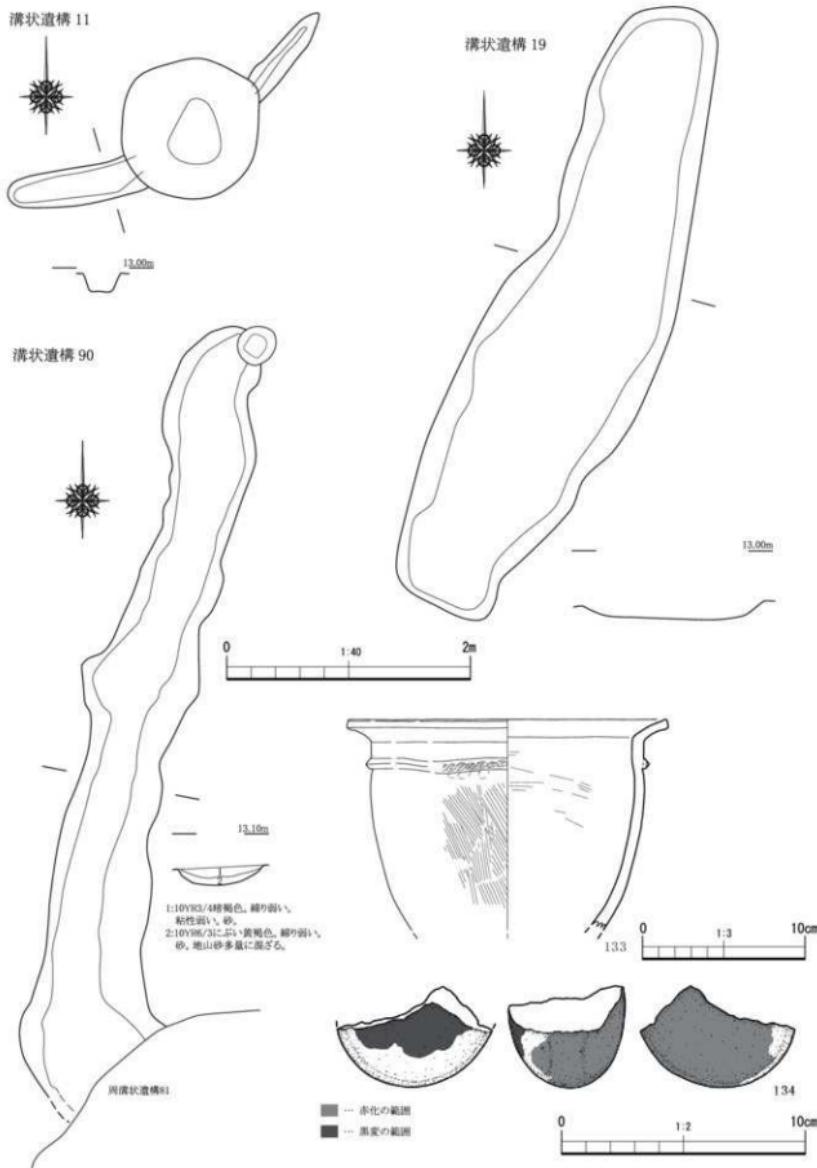
溝状遺構19（第40図） A調査区の南西側で検出された。横断面は浅い皿状を呈し、最大幅1.48m、検出面からの深さ0.14mを測る。

溝状遺構90（第40図） 調査区の中央付近において、周溝状遺構81に切られる形で検出された。横断面は緩いU字形で、最大幅1.1m、検出面からの深さ0.15mを測る。

133は中溝式の甕である。口縁部の屈曲は強く内面の稜は明瞭である。頸部下に突帯に対し斜めに刻目を施した突帯を貼り付ける。134は尾鈴山酸性岩製の磨石である。被熱により一部が赤化、黒変している。

第6項 弥生時代包含層（第41・42図）

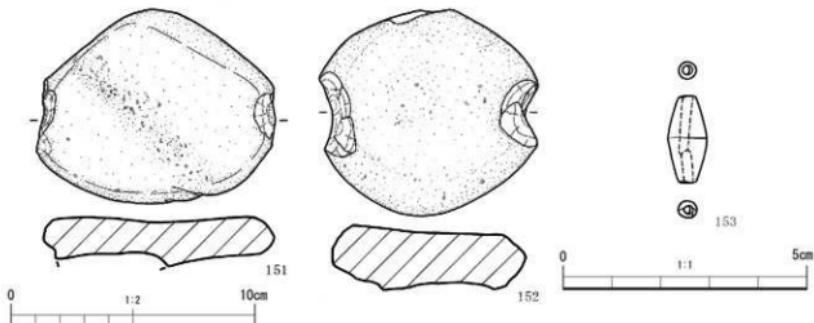
135から153は、A調査区の中央付近で確認された包含層から出土した遺物である。135から139は高杯である。135と136は同一個体と考えられ、口縁部は僅かに内湾し、外面に回線文を施す。137から139は脚部で、137は外面に回線文を施す。138は円形の穿孔を施すが貫通していない。140から143は壺である。141は口縁端部外面に回線文を施す。144は甕もしくは壺の口縁部である。口縁端部を上下に肥厚しそこに回線文を施す。145から147は甕である。145は頸部下に刺突文を施す。146口縁端部がナデにより回線状に窪む。148は鉢底部である。平底で胴部は外方に大きく開く。149は甕の底部、150は口縁部を欠くが甕のミニチュア土器と思われる。151、152は砂岩製の石錐で長軸に繩掛けを作出している。153は水晶製の算盤玉である。長さ17.5mm、直径8.0mm、重さ1.2gを測る。鉄錐による両面穿孔で、直径よりも高さが大きく綫長の形状である。大賀氏による分類のC類（大賀2011）が同様の形状ではあるが、「直徑が5mmから7mm程度で片面穿孔されるもの」という特徴は合致しない。九州島内では福

第40図 弥生時代溝状造構実測図 ($S=1/40$) 及び出土遺物実測図 ($S=1/3 \cdot 1/2$)



第41図 弥生時代包含層出土遺物実測図①(S=1/3)

岡県城野遺跡、潤地頭給遺跡がC類の生産遺跡として知られるが（谷澤2020）、前述のとおり両遺跡で出土した製品、未製品よりもサイズが大きく、類似する資料としては岡山県才地遺跡堅穴住居51出土の資料（報告書には棗玉と記載）が挙げられる。



第42図 弥生時代包含層出土遺物実測図②(S=1/2・1/1)

第4節 古代以降の調査成果

古代以降と幅広い時期の報告となるが、明確に古代に帰属すると考えられる遺構は墨書き器が出土したピットのみであるためここで纏めて報告する。

第1項 掘立柱建物

掘立柱建物 109 (第43図) A調査区の北東で検出され堅穴建物 72 を切る。周辺の地山は灰白砂であり、上部は削平を受けたと考えられる。調査区内で検出された範囲では 3 間 × 2 間である。桁行間 6.85 m、梁行間 4.2 m を測り、建物主軸は E -20° - S である。柱穴の平面形は不整形で、径 0.75 m から 0.38 m、検出面からの深さは最も深いもので 0.43 m を測る。埋土の上層は霧島高原スコリア（以下 Th-S）を多量に含む。遺物は弥生時代の土器片が出土したが、建物の時期を示す資料ではない。

掘立柱建物 114 (第44・45図) A調査区の北端付近で検出された。切り合ひ関係から掘立柱建物 116 に後出す。調査区内で検出された範囲では 4 間 × 2 間である。桁行間 7.7 m、梁行間 4.9 m を測り、建物主軸は N -21° - E である。柱穴の平面形は隅丸方形を基調とするが不整形で、一辺が 1.5 m から 0.8 m、検出面からの深さは最も深いもので 1.15 m を測る。一部柱穴で柱の据え替えが行われている。遺構規模が大きいことや、埋土に地山砂ブロックを多量に含み締りが弱いこと、団化は行っていないが煙管片が出土したことから、当初は規格的に配された近世墓の集まりも想定したが、土層断面に柱痕と考えられる土層が確認できること、配置の規格性が高いことから掘立柱建物と判断した。

115 は弥生土器壺の口縁部である。155 は青磁菊皿である。156 は陶器瓶で黒褐色の釉を施す。157 は磁器の紅皿で型押し成形である。158 は砂岩製の磨石である。

掘立柱建物 115（第 46 図） A 調査区の北端付近で検出された。切り合い関係から掘立柱建物 116 に後出する。建物規模は 3 間 × 2 間で、桁行間 5.2 m、梁行間 4.4 m を測る。建物主軸は N-17° - E である。柱穴の平面形は不整形で円形基調のものと方形基調のものが混在する。柱穴の規模は、最大のもので径 1.1 m、検出面からの深さ 0.7 m を測る。

159 は一見すると弥生土器の壺底部付近のように思えるが、破断面の外面側が端面を有していることから鉢のような形態になると思われる。また、そのラインを追うと波状口縁になると考えられる。

掘立柱建物 116（第 47 図） A 調査区の北端付近で検出された 3 間 × 2 間の掘立柱建物である。西列の 1 柱穴は掘立柱建物 114 の柱穴との切り合いで判然としなかった。柱穴の平面形は不整形で円形基調のものと方形基調のものが混在する。柱穴の規模は、最大のもので長軸 1.1 m、検出面からの深さ 0.65 m を測る。

160 は陶器瓶である。黒褐色の釉を施す。

第2項 土坑

土坑 13（第 48 図） A 調査区の南端、竪穴建物 21 を切り、溝状遺構 5 に切られる形で検出された。平面形は不整形で最大幅 3.58 m、検出面からの深さ 0.2 m を測る。埋土に Th-S を含む。

土坑 27（第 48 図） A 調査区の南西端、竪穴建物 18 を切る形で検出された。一部が調査区外に広がるが平面形は不整形で、長軸 2.84 m 以上を測る。断面は浅い皿状を呈し、検出面からの深さは 0.36 m を測る。

161 は弥生土器の高杯脚部である。外面に回線文を施す。162 は弥生土器の鉢である。平底で胴部は緩やかに内湾して口縁部に至る。163 は弥生土器の鉢底部である。

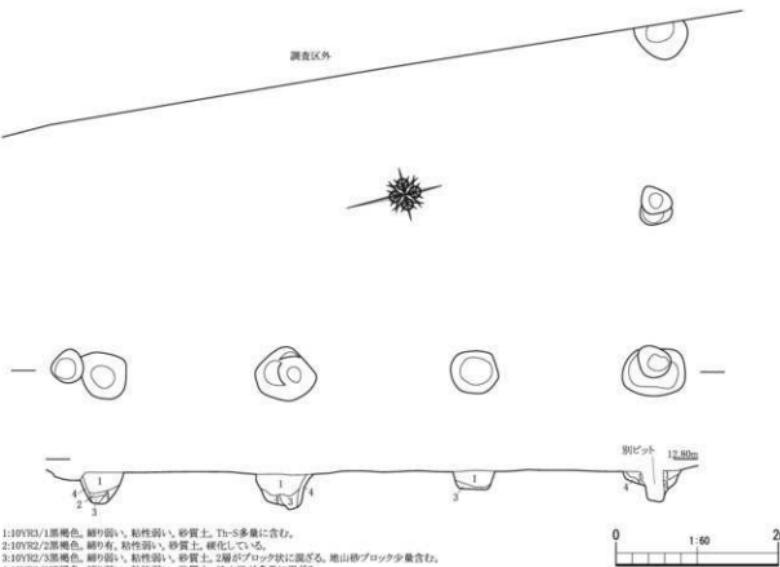
土坑 47（第 49 図） A 調査区の北端付近で検出された平面不整形の土坑である。長軸 1.9 m、短軸 1.4 m を測り東壁の一部はオーバーハングする。検出面からの深さは 0.36 m を測る。埋土に Th-S を含む。

土坑 54（第 49 図） A 調査区の北側で検出され、竪穴建物 74 を切る。平面形は歪な梢円形で長軸 1.1 m、短軸 0.66 m を測る。検出面からの深さは 0.13 m を測り、断面は浅い皿状を呈する。

164 は弥生土器の甕口縁から頸部である。

土坑 56（第 49 図） 調査区の北側で検出された平面不整形の土坑である。掘立柱建物 116 の柱穴に一部を切られる。長軸 2.04 m、短軸 1.1 m、検出面からの深さ 0.24 m を測る。短軸の断面形は皿状を呈し、埋土は Th-S を多量に含む。

土坑 62（第 49 図） A 調査区の北側で検出された平面隅丸長方形の土坑である。溝状遺構 4



第43図 挖立柱建物109実測図(S=1/60)

を切る。長軸 2.67 m、短軸 0.91 m、検出面からの深さ 0.28 m を測る。壁面は垂直に近い角度で立ち上がり、埋土中に多量の Th-S を含む。

165 は頁岩製の砥石である。

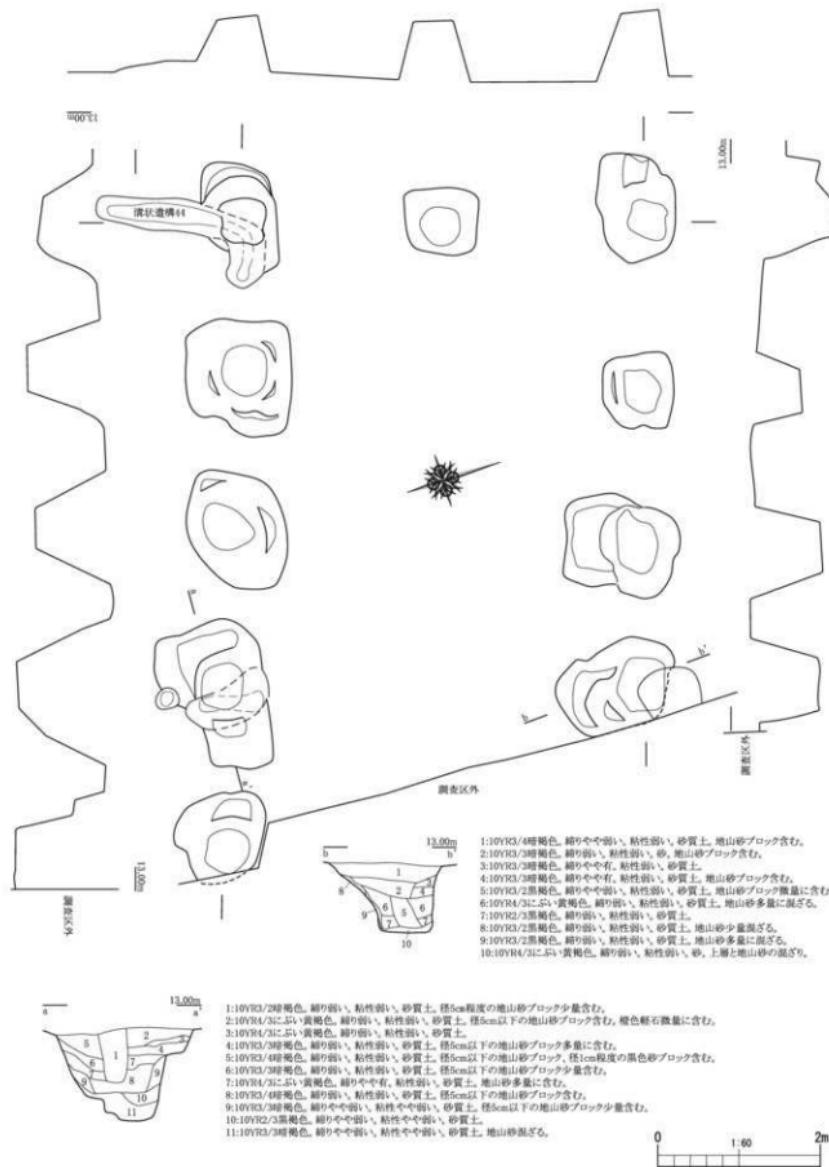
土坑 73 (第 49 図) A 調査区の北側で検出された平面歪な橢円形の土坑である。長軸 1.68 m、短軸 0.58 m、検出面からの深さ 0.08 m を測る。埋土中に多量の Th-S を含む。

土坑 93 (第 50 図) B 調査区の南西端で検出された大型の土坑で西側は調査区外に広がる。平面、断面ともに不整形で、東西 3.9 m 以上、南北 3.46 m、検出面からの深さ 0.5 m を測る。埋土中に Th-S を多量に含む。

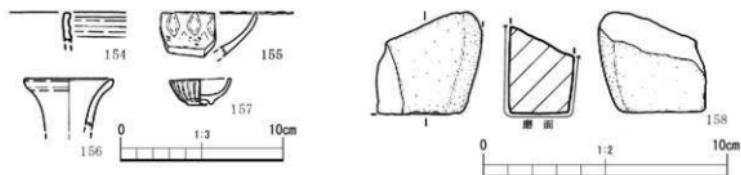
遺物は少量出土したが細片のため図化できなかった。

土坑 91 (第 51 図) B 調査区の北側で検出された平面不整円形の径 1 m の土坑である。断面は擂鉢状を呈し検出面からの深さは 0.56 m を測る。埋土中に Th-S を含む。

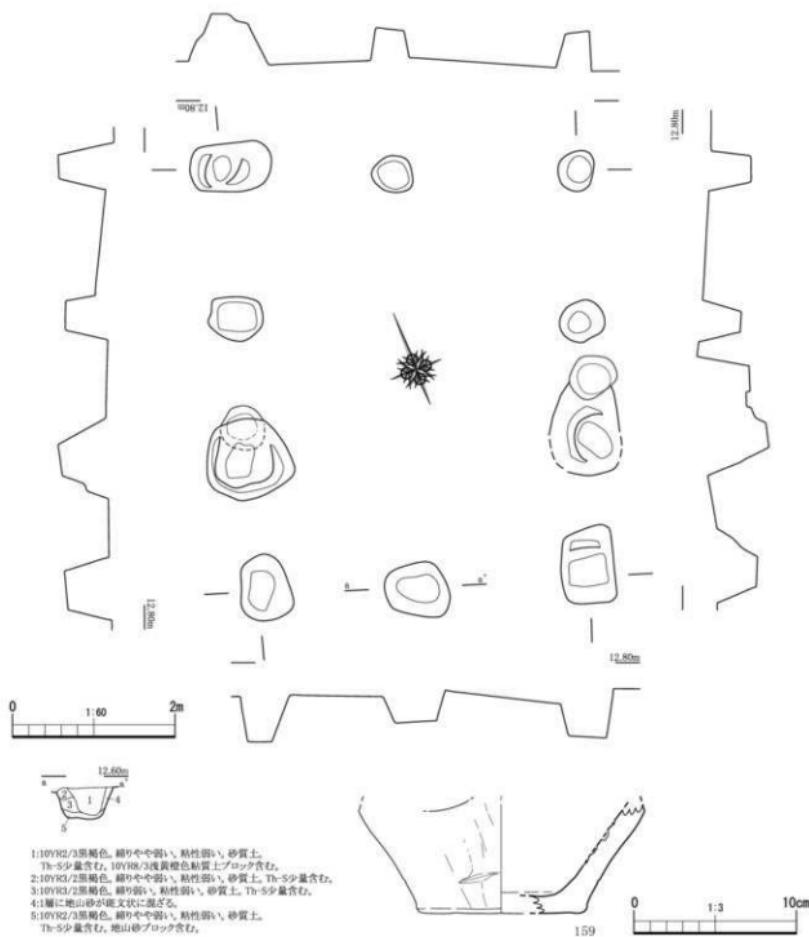
土坑 95 (第 51 図) C 調査区の南側で検出された土坑である。搅乱と試掘トレンチにより遺構の一部が切られている。長軸 1.5 m 以上、検出面からの深さ 0.2 m を測る。断面は皿状を呈



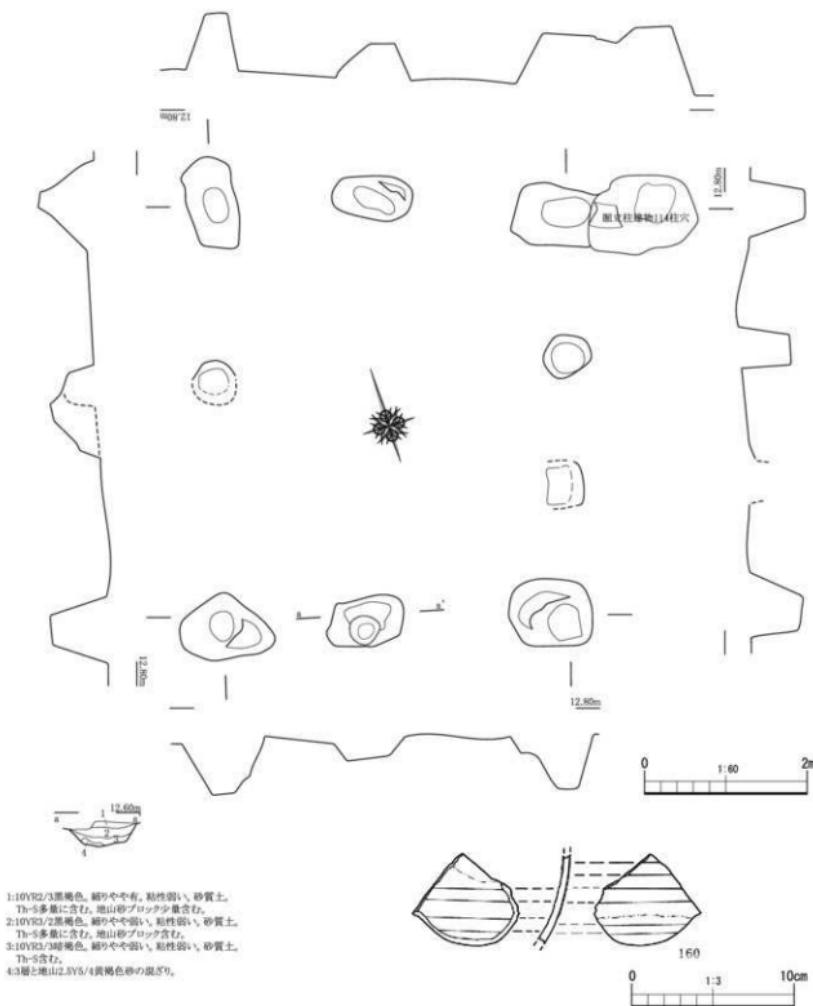
第44図 掘立柱建物114実測図 (S=1/60)



第45図 掘立柱建物114出土遺物実測図(S=1/3・1/2)



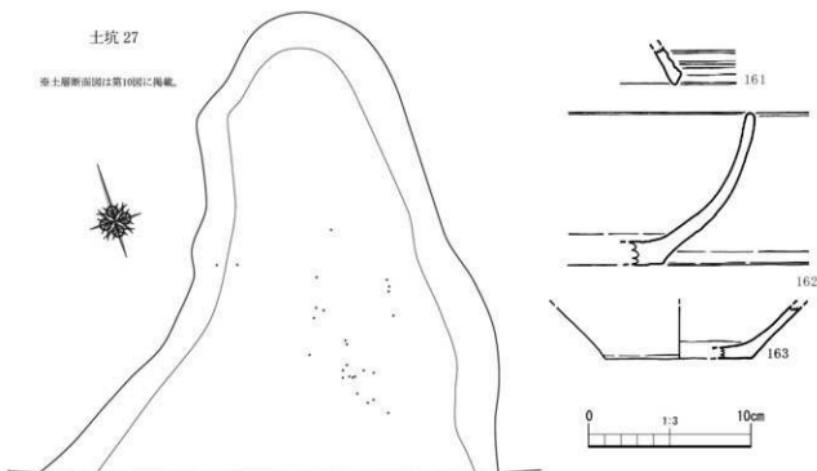
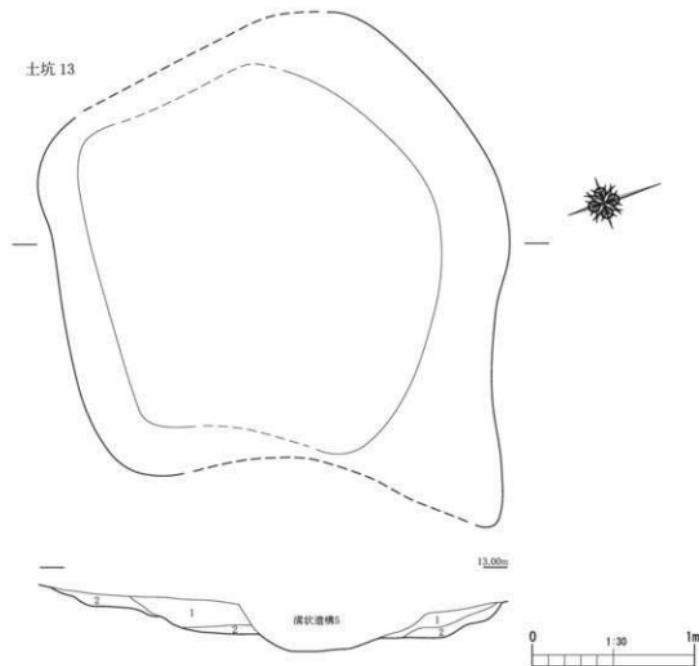
第46図 掘立柱建物115実測図(S=1/60)及び出土遺物実測図(S=1/3)



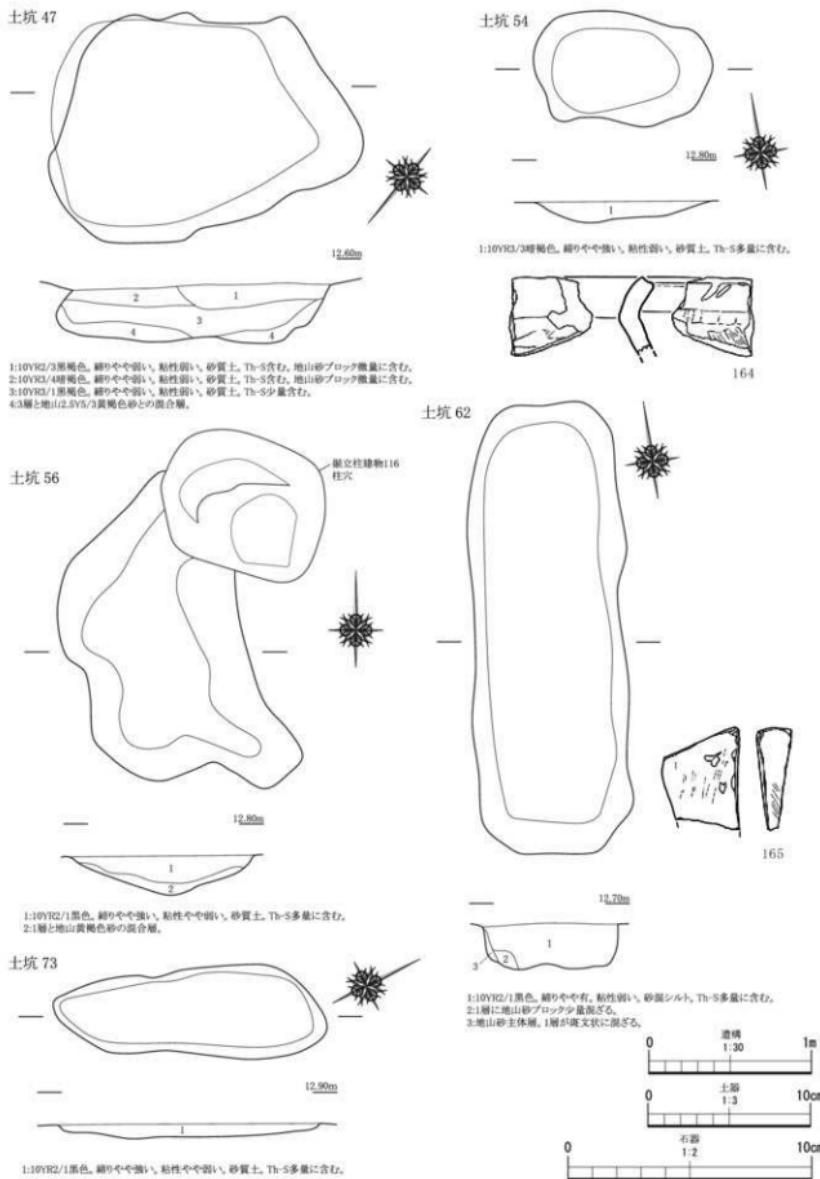
第47図 挖立柱建物116実測図 (S=1/60) 及び出土遺物実測図 (S=1/3)

し、埋土中に霧島新燃享保軽石かと思われる白色軽石粒を多量に含む。

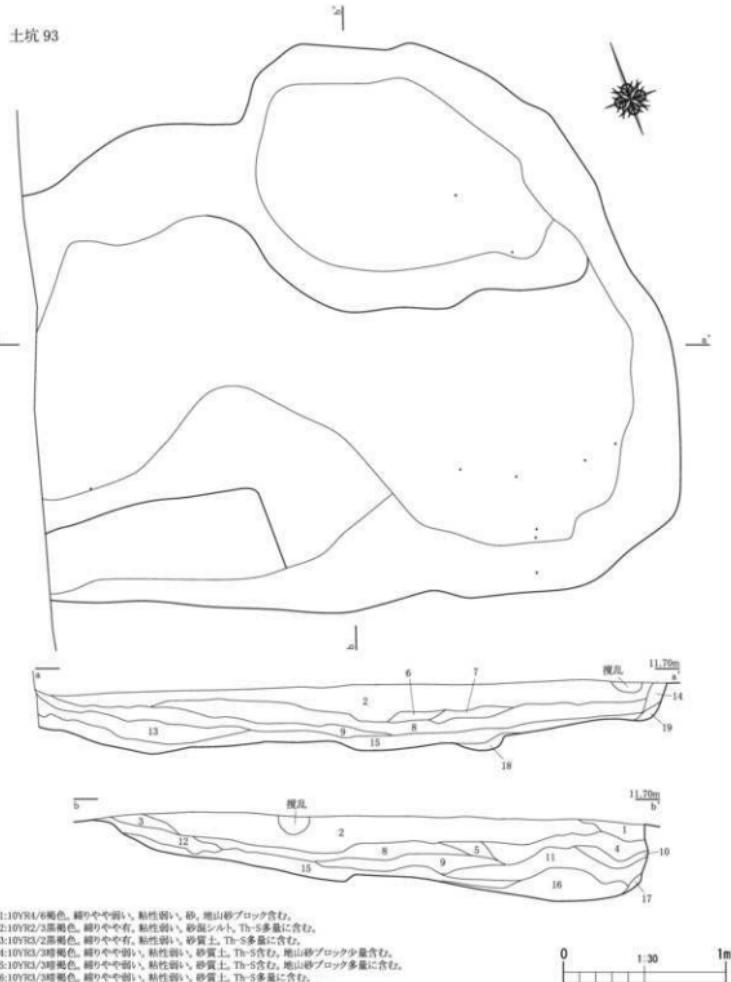
土坑98（第51図） C調査区の北東隅で検出された土坑で、溝状構造97に切られる形で検出された。調査区外に広がる部分も多く全形は明らかではない。埋土中に Th-S を含む。



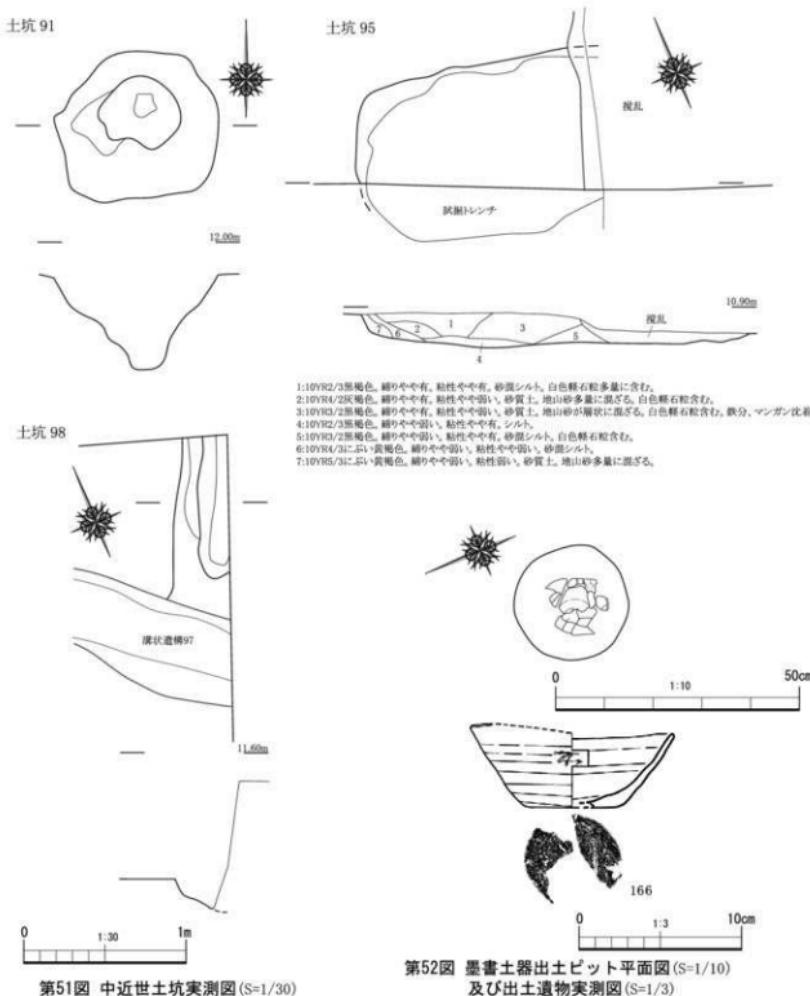
第48図 中世土坑実測図(S=1/30)及び出土遺物実測図①(S=1/3)



第49図 中世土坑実測図(S-1/30) 及び出土遺物実測図②(S-1/3 · 1/2)



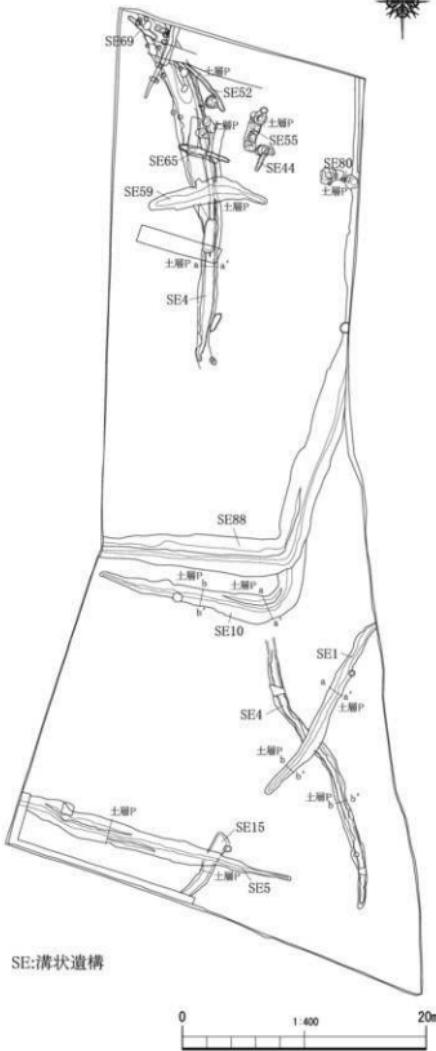
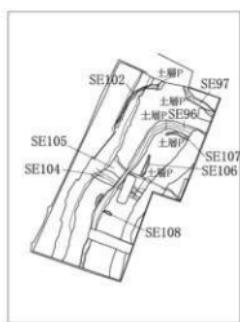
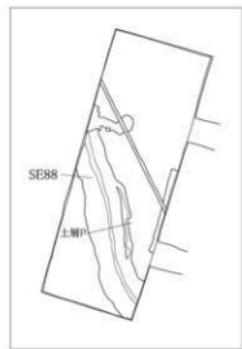
第50図 中世土坑実測図 (S=1/30)



第3項 墨書土器出土ピット（第52図）

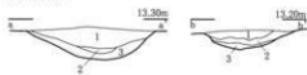
調査区の北端付近で検出された径0.2mのピットである。周辺の地山は灰白色砂で削平を受けており、ピットも底面が辛うじて残存しているような状況であった。

遺物は土師器壺が伏せられたまま押しつぶされたような状況で出土した。166は土師器壺で平底の底部から部はやや内湾しながら立ち上がり口縁部至る。切り離しはヘラ切りである。外面口縁部下に墨書きかれているが不明瞭で判読できない。



第53図 中近世溝状遺構配置図 (S=1/400)

溝状造構1



1:2.5Y3/3暗オーラブ褐色。縦り有、粘性弱い、砂質土。Th-5多量に含む。
2:2.5Y3/2黒褐色。縦り有、粘性弱い、砂質土。Th-5少量含む。
3:2.5Y4/4オリーブ褐色。縦り弱い、粘性無、砂。



167



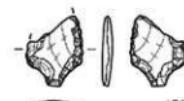
溝状造構4



1:10YR2/3黒褐色。縦り弱い、粘性弱い、砂質土。
地山2.5Y6/4にぶつ、赤色砂ブロック含む。Th-3微量に含む。
2:10YR2/3黒褐色。縦り弱い、粘性弱い、砂質土。
3:2.5Y4/4黄褐色。縦り強い、粘性弱い、砂質土。
ブロック状に硬化した2.5Y6/4にぶつ、黄色砂含む。上面が道路状造構の路面となる。
4:10YR4/4褐色。縦り弱い、粘性弱い、砂質土。
5:2.5Y4/4オリーブ褐色。縦り弱い、粘性弱い、砂。地山砂の崩れ。



168



170



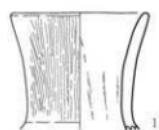
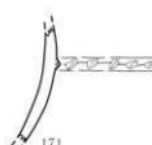
169

1:10YR2/1黒色。縦りやや弱い、粘性弱い、砂質土、墨ボク土。
2:10YR2/4暗褐色。縦りやや弱い、粘性弱い、砂質土、堆山砂質土の流入土。
3:10YR2/2灰黒褐色。縦り強い、粘性弱い、砂質土。
4:10YR2/3暗褐色。縦りやや弱い、粘性やや弱い、砂質土。1層が斑文状に混ざる。
5:10YR2/3暗褐色。縦りやや弱い、粘性やや弱い、砂質土。硬面化ブロック少量混ざる。

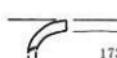
溝状造構15



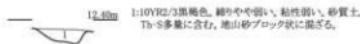
1:10YR4/4褐色。縦りやや弱い、粘性弱い、砂質土。
Th-5多量に含む。
2:10YR2/3暗褐色。縦りやや弱い、粘性弱い、砂質土。
Th-5微量に含む。



172



溝状造構52



1:10YR2/3黒褐色。縦りやや弱い、粘性弱い、砂質土。

Th-5多量に含む。地山砂ブロック状に混ざる。



溝状造構65



1:10YR2/1黒色。縦りやや有、粘性弱い、砂質土。Th-5多量に含む。
2:10YR3/3暗褐色。縦りやや有、粘性弱い、砂質土。Th-5多量に含む。

3:10YR4/3C-54・黄褐色。縦りやや有、粘性弱い、砂質土。Th-5含む。

溝状造構55



1:10YR2/1黒色。縦りやや有、粘性弱い、砂質土。
Th-5多量に含む。地山の度合の暗褐色土ブロック含む。
2:10YR2/3暗褐色。縦りやや有、粘性弱い、砂質土。
Th-5多量に含む。10YR4/4褐色砂ブロック含む。
3:10YR2/2黒褐色。縦りやや有、粘性弱い、砂質土。Th-5多量に含む。
4:10YR2/2黒色。縦りやや有、粘性弱い、砂質土。
5:10YR4/3C-54・黄褐色。縦り弱い、粘性弱い、砂質土。Th-5多量に含む。
6:10YR4/3暗褐色。縦りやや有、粘性弱い、砂質土。道面状造構土と4, 5層の混ざり。



173



174

溝状造構96



1:10YR2/1黒色。縦りやや弱い、粘性弱い、砂質土、Th-5含む。

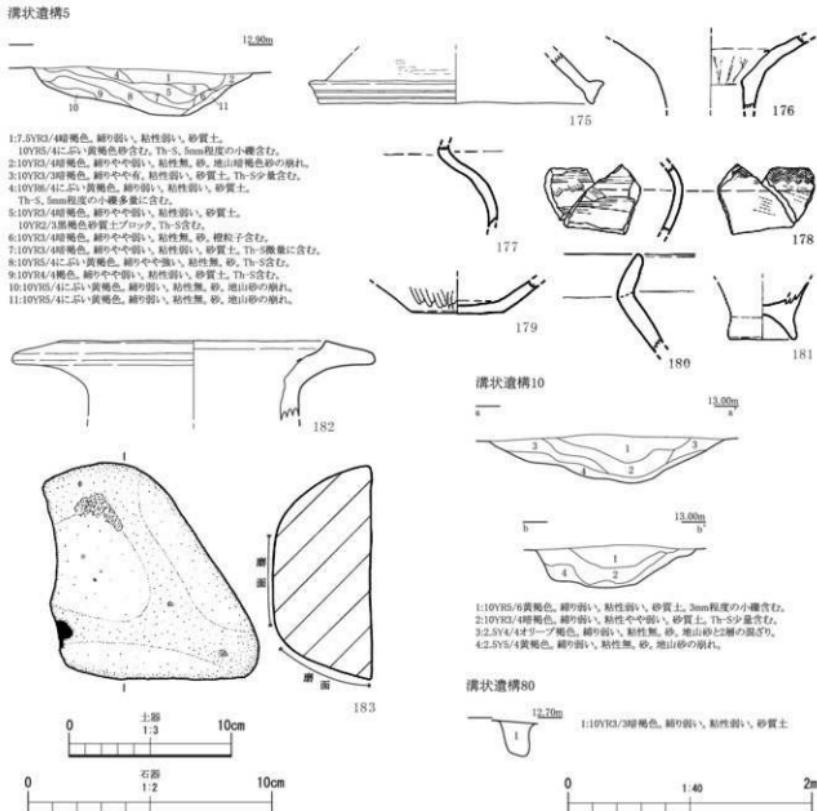
2:10YR5/6黄褐色。縦りやや弱い、粘性弱い、砂質土。地山砂の流入土。



第54図 中世溝状造構断面図(S=1/40)及び出土遺物実測図(S=1/3・2/3)

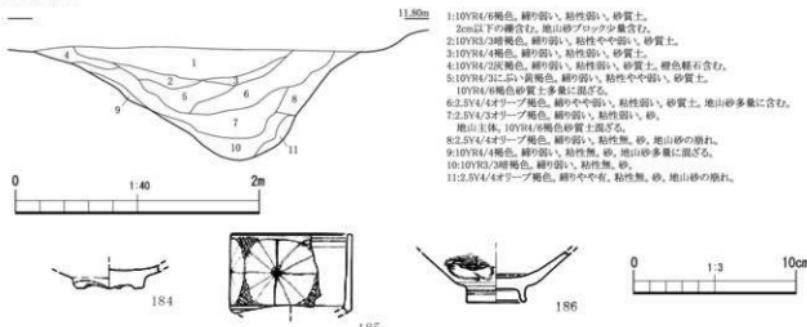


第55図 中世溝状遺構断面図 (S=1/40)



第56図 近世溝状遺構断面図 (S=1/40) 及び出土遺物実測図① (S=1/3 · 1/2)

溝状遺構88



第57図 近世溝状遺構断面図 (S=1/40) 及び出土遺物実測図② (S=1/3)

第4項 溝状遺構

ここでは紙幅の都合から主要な溝状遺構のみ記述する。

溝状遺構1（第53・54図） A調査区の南西側で検出された。横断面は皿状で埋土中に多量のTh-Sを含む。法線や埋土から溝状遺構15と同一遺構であり、上部が削平されることによって2つの溝に分割されたと考えられる。

167は弥生土器の壺口縁部である。口縁端部を折り返し肥厚している。

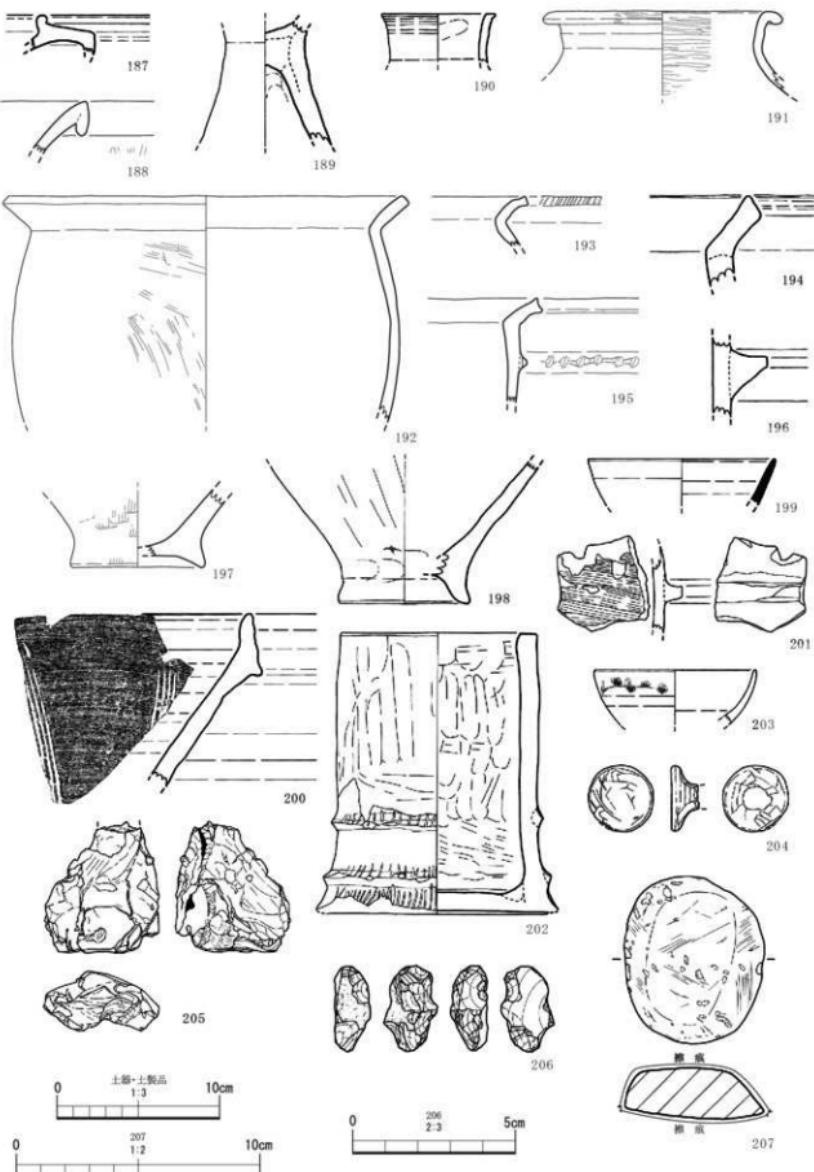
溝状遺構4（第53・54図） A調査区の北西端から南東端付近にかけて検出された溝状遺構である。調査区中央付近は浅い搅乱により削平を受けていた。横断面は皿状で硬化面が検出された。最上層にTh-Sを僅かに含む。

遺物は混入である弥生土器、打製石鏃が出土した。168は弥生土器の高杯口縁部である。外面に凹線文を施す。169は弥生土器の甕口縁部である。口縁部がくの字状に屈曲する。170は安山岩製の有茎式打製石鏃で先端を欠く。

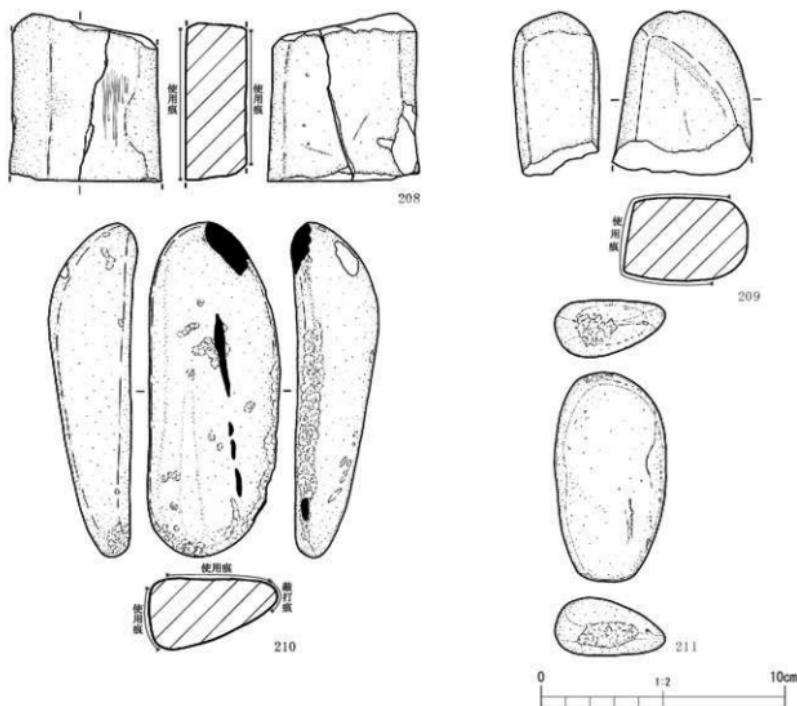
溝状遺構5（第53・56図） A調査区の南端付近で5軒の堅穴建物等を切る形検出された。横断面は皿状で南側に最深部を有する。

掲載した遺物は弥生土器であり、本来は溝状遺構5が切っている堅穴建物に帰属する遺物と考えられる。175は瀬戸内系の高杯脚部である。裾部を肥厚し凹線文を施す。176は器台である。内面に捺り痕が残る。177は壺の頸部から胴部である。178は壺胴部で外面に波状文を施す。179は壺の底部、180は壺の口縁部である。181は甕の底部である。上げ底でハの字状に裾部が外方へ張り出す。その他に図化を行っていないが近世磁器が出土している。

溝状遺構88（第53・57図） A調査区の中央で検出された溝状遺構である。埋土、断面形状、法線からB調査区の北西から南東で検出された溝状遺構も同一遺構と判断した。横断面はV字形で上端幅2.64m、検出面からの深さ0.9mを測る大規模なものである。出土遺物から近世



第58図 その他出土遺物実測図①(S=1/3・2/3・1/2)



第59図 その他出土遺物実測図②(S=1/2)

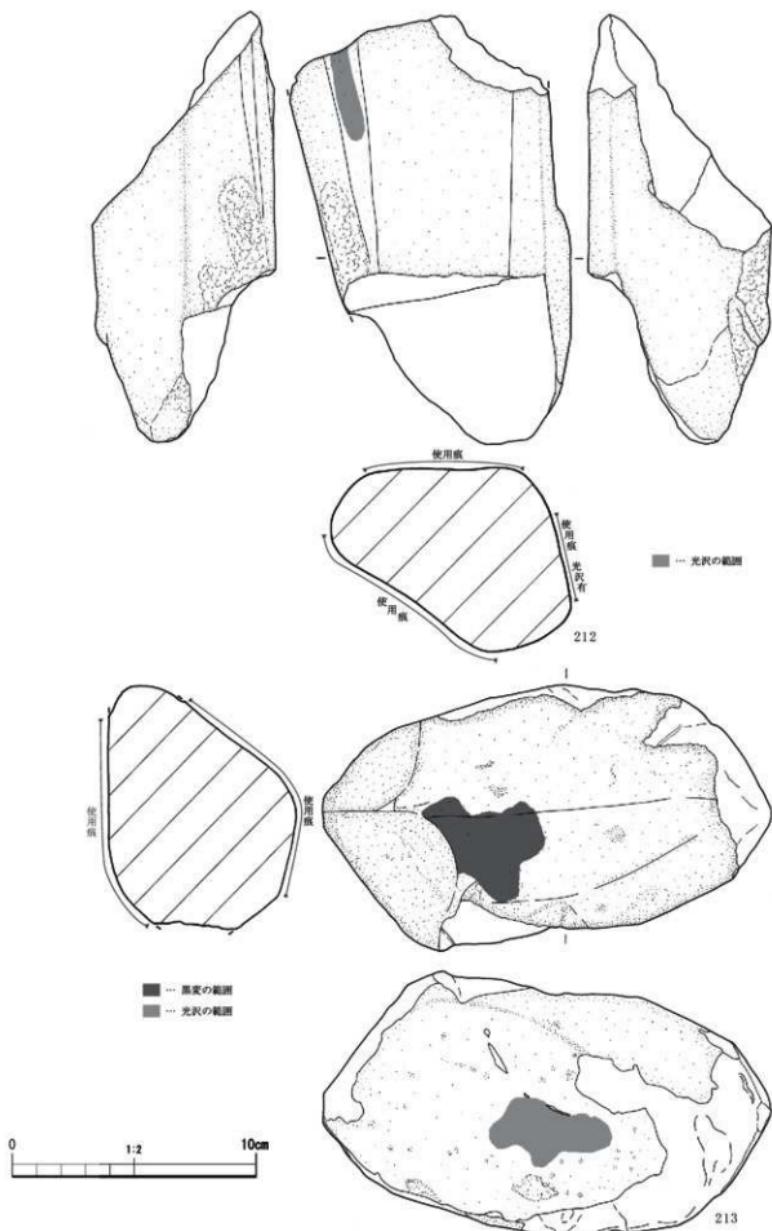
に帰属すると考えられ、線形や断面形から区画溝と考えられる。

184は抉り高台の白磁皿である。185は染付の筒型碗、186は染付の碗である。

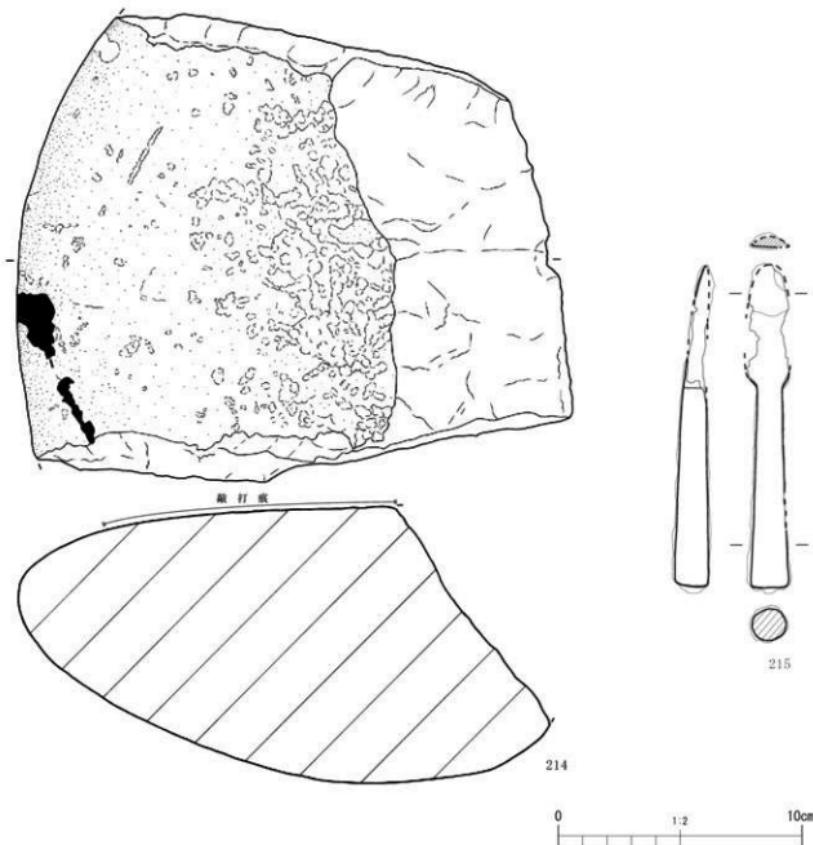
また、遺構とは直接関係は無いが、溝状遺構 88 の壁面地山砂から霧島御池テフラが堆積している層が検出された。このことから霧島御池テフラが噴出した時期には第1砂丘の形成が一定程度進んでいたと考えられ、第1砂丘形成時期を考えるうえで重要な資料である。なお、このテフラが検出された層の標高は約 11.2 m である。

第5項 その他出土遺物（第58～61図）

ここでは搅乱や表土等から出土した遺物について記述する。187から198は弥生土器である。187は垂下口縁の高坏である。188は壺の口縁部で端部を強く折り返している。189は高坏の脚部、190は直口壺の口縁部で口縁部外面に凹線文を施す。191は壺の口縁部から頸部である。192、193は甕で口縁部がくの字状に屈曲する。193は口縁端部に刻目を施す。195は中溝式の甕で頸部下に刻目突帯を貼り付ける。194、196は中溝式の大甕の口縁部と胴部突帯部分の破片である。197、198は甕底部で上げ底を呈する。199は須恵器坏である。200は柘器の擂鉢で



第60図 その他出土遺物実測図③(S=1/2)



第61図 その他出土遺物実測図④(S=1/2)

ある。201は瓦質土器の羽釜である。202は瓦質土器の花瓶で竹根を模したものと思われる。203は磁器碗である。204は瓦質の糸巻きと思われる。205は焼けた粘土塊である。206は石英製の火打ち石、207は軽石製品である。208、209は砂岩製の砥石である。210は砂岩製、211は頁岩製の敲石である。210は1側縁に、211は両小口に使用痕が見られる。212、213は砂岩製の砥石である。212は使用痕の中で筋状に窪む箇所において、にぶい金属光沢が見られる。一方、213は面的ににぶい金属光沢が見られる。214は砂岩製の台石である。被熱により赤化しており使用痕が多数見られる。215は盤状鉄製品、もしくは鉋である。錫膨れがひどく本来の形状を保っていない。堅穴建物72を切る搅乱から出土しており、本来は堅穴建物72に帰属する遺物の可能性がある。

第1表 出土土器観察表①

開拓番 団番号	番号	遺構 等	種別	法量cm () : 深元 口径 径深 高さ	色 調	施成	調 整		出土(上:mm 下:cm) A B C D E	備 考	実 番 号	
							外面	内面				
p. 8 第4回	1	S46-12	生土器 底	(24.0)	にぶい 黄褐色 10187.4 / 10187.3	良好	ヨコナダ ハケメ ミガキ	ヨコナダ ナダ ミガキ	2 1 少 少	痕 痕	口部附近に底底有 貼付茎部1条	3
	2	S46-6	土器器 底		にぶい 黄褐色 10186.3 / 10185.2	良好	ナダ ミガキ ナダ ミガキ	ナダ ミガキ ナダ ミガキ	2 2 多 強			6
	3	S46	生土器 底		暗 5186.8 / 5187.6	良好	ナダ	ナダ	1 少		口縁部分円溝文 口縁端部に刻目	67
	4	S46-4	生土器 底	(6.05)	にぶい 黄褐色 1.5186.4 / 1.5185.2	良好	不明瞭 ハケメ	ハケメ	1 1 多 少		穿孔有	2
	5	S46-4	生土器 底		にぶい 黄褐色 5185.3 / 10186.3	良好	ナダ(不明瞭) 指押え	ナダ	2 1 多 強			5
	6	S46-3	生土器 底环	(23.4)	單 7.5186.6 / 7.5185.6	良好	ナダ ミガキ 淡綠文	ナダ(風化)	1 少	穿孔有(4ヶ所)		4
	7	S46-6 + BG 番	器台	(9.6)	飛 7.5187.6 / 10187.4	良好	ミガキ ヨコナダ ナダ ヨコナダ	ナダ ヨコナダ 強	1 2 少 少			1
p. 11 第7回	11	SAB	生土器 林	(4.6)	圓灰 10184.1 / 10184.1	良好	ナダ ミガキ ナダ(不明瞭)	ナダ(不明瞭)	1 少			18
	12	SAB	生土器 底	(12.5)	にぶい 黄褐色 10186.2 / 514.1	良好	ミガキ(不明瞭) ナダ(不明瞭)	ナダ(不明瞭)	4 少		黒斑有	11
	13	SAB-P1 ニチニア土器	生土器 底	(2.8)	浅黃褐 2.5186.4 / 2.5188.4	良好	指押え ナダ(不明瞭)	指押え ナダ(不明瞭)	2 少			13
	14	SAB	生土器 底	(5.2)	飛 5187.6 / 10188.3	良好	不明瞭(ナダか)	ナダ	1 少			12
	15	SAB	生土器 底	(6.8)	灰黃褐 10186.2 / 10186.2	良好	指押え ナダ(不明瞭)	ナダ	1 少			10
	16	SAB	生土器 底	6.0	にぶい 黄褐色 2.5186.4 / 2.5186.4	良好	指押え ヨコナダ(不明瞭)	不明瞭	2 1 多 多	底部～底部下半 に黒斑有		14
	20	SAB5	生土器 林		にぶい 黄褐色 2.5186.4 / 2.5185.4	良好	ナダ 四線文	ナダ	1 1 多 少			63
p. 12 第8回	23	SAB上層	生土器 底		にぶい 黄褐色 10186.3 / 2.515.2	良好	回転ナダ(不明瞭)	回転ナダ	2 少			73
	24	SAB	生土器 ミチュア土器	(1.8)	にぶい 黄褐色 10186.3 / 10185.3	良好	ナダ	ナダ	1 少		黒斑有	75
	25	SAB上層	生土器 底		明黄褐 10186.6 / 10186.4	良好	ナダ(不明瞭)	ナダ(不明瞭)	1 少	貼付器皿3条		74
	28	SAB1コウ化面 +SAB1上層	器台	(16.6)	1.5185.2 にぶい 黄褐色 7.5186.4 / 7.5186.4	良好	回転ナダ 四線文	回転ナダ	1 1 少		黒斑有	40
	29	SAB1 コウ化面上	生土器 底		飛 7.5187.6 / 7.5187.6	良好	ナダ(不明瞭) 指押え	ナダ(不明瞭) つまみの指ナダ	1 1 少			34
p. 13 第9回	30	SAB1コウ化面 底脚部	生土器 底		黒 5186.4 / 5185.2	良好	重弧文 平行線 文 ハラミガキ	ナダ(不明瞭)	数 多	免式		37
	31	SAB1	生土器 底		にぶい 黄褐色 10186.4 / 10188.4	良好	瓶・櫛位のナダ 點付器皿	ナダ 指押え シボリ跡	1 2 多 少			36
	32	SAB1コウ化面 +SAB1上層	生土器 底	(16.2) 4.8 11.7	にぶい 黄褐色 7.5186.4 / 10186.3	良好	ナダ ミガキ ナダ 工具ナダ	ナダ ヨコナダ ナダ ナダ ヨコナダ ナダ	2 1 少 強	底部に黒斑有		41
	33	SAB1コウ化面 底	生土器 底	(9.6)	にぶい 黄褐色 7.5187.4 / 10185.1	良好	位のナダ	不明瞭	2 少	底面工具痕有		27
	34	SAB1コウ化面 上	生土器 底		にぶい 黄褐色 7.5187.4 / 7.5185.1	良好	ヨコナダ	ナダ	3 少	赤彩 貼付器皿3条		30
p. 14 第11回	35	SAB2+SAB1コウ 化面上	生土器 底		飛 5186.6 / 2.515.1	良好	ヨコナダ ハケメ ミガキ	不明瞭	3 2 多 少	貼付器皿3条		60
	36	SAB1コウ化面 底	生土器 底	(7.2)	にぶい 黄褐色 7.5187.3 / 2.514.1	良好	不明瞭	ナダ	0.5 少			31
	37	SAB1コウ化面 底	生土器 底	(30.8)	飛 7.5186.6 / 2.5186.9	良好	ヨコナダ ナダ ヨコナダ ナダ	ヨコナダ ナダ ヨコナダ ナダ	3 2 1 多 少 強	ヌヌ付着 糊付糊付器皿		19
	38	SAB1コウ化面 底	生土器 底	(27.3)	にぶい 黄褐色 7.5187.4 / 7.5187.4	良好	ハケメ(不明瞭)	ヨコナダ 工具ナダ ナダ	1 少			25
	39	SAB1コウ化面 底	生土器 底	(24.9)	黒灰 2.5184.1 / 7.5185.3	良好	ヨコナダ ナダ ナダ 指押え	ナダ 指押え ミガキ	1 少	ヌヌ付着		26
p. 15 第12回	40	SAB1コウ化面 底	生土器 底	(23.9)	にぶい 黄褐色 10187.4 / 10187.4	良好	ヨコナダ ナダ 工具ナダ ハケメ	工具ナダ ナダ ハケメ	0.5 少	ヌヌ付着		32
	41	SAB1コウ化面 底	生土器 底		灰褐色 7.5185.2 / 10185.3	良好	ハケメの後ナダ	ナダ 工具板有	1 少	黒斑有 貼付突起		29
	42	SAB17	生土器 底		にぶい 黄褐色 10186.4 / 10188.1	良好	ナダ	ナダ 指押え	2 3 多 少			28
	43	SAB1コウ化面 底	生土器 底	(7.6)	にぶい 黄褐色 7.5187.3 / 10187.4	良好	工具ナダ ヨコナ ダ ヨコナダ	不明瞭	2 少	底面に黒斑有		35

参考土 A: 岩崎小石 和: 長石・石英 C: 磷灰・角閃石 B: 黄鐵矿 E: クオリ輝

第2表 出土土器観察表②

測定番号	番号	道 佛 等	種 別	法値 cm () : 備考	外 面	内 面	調 査 要		出土 (上 : mm 下 : mm)	備 考	実 番 号		
							外面	内面					
p. 20 第 16 回	51	SA18	弥生土器 高环		にぶい 黄褐色	良好	ナデ キサミ	ナデ ハラタグリ			穿孔有	49	
	52	SA18	弥生土器 高台		にぶい 黄褐色	良好	回転ナデ 田園文	回転ナデ	2 1	微		45	
	53	SA18 上層 + SA18 → ウ化論	弥生土器 高		にぶい 相 灰黄褐色	良好	素面文 平行流線 文 植物文	ナデ	少	微 強	免田式	48	
	54	SA18+SA 中部 サブトレ	弥生土器 高	4.8	にぶい 黄褐色	良好	ハケメ キコナデ	ナデ	2		被熟	51	
	55	SA18 上層 → BG 高	弥生土器 高		にぶい 相 灰黄褐色	良好	ナデ ハケメの後 ガキ 粒付帶行2条	ナデ (不明瞭)	2 2 多 少	2 少	8.81出土土器と 複合	47	
p. 21 第 17 回	56	SA21	弥生土器 高		にぶい 相 灰	良好	ナデ 流線文	縱位のナデ	1			58	
	59	SA21	弥生土器 高	(5.6)	にぶい 黄褐色 浅黄褐色	良好	ナデ	ナデ	1.5			56	
	60	SA21	弥生土器 高	6.7	にぶい 黄褐色 相	良好	ヨコナデ ハケメ	工具ナデ ナデ 押え	3 多	2 少	外面に黒斑有	55	
p. 22 第 18 回	62	SA22	弥生土器 高		にぶい 黄褐色 相	良好	ナデ 脊付尖底	ナデ	1	1		61	
	63	SA26	弥生土器 高	(18.5)	にぶい 黄褐色 相	良好	回転ナデ 田園文	回転ナデ	3 多	2 少		68	
p. 23 第 19 回	64	SA26	弥生土器 高		相	良好	ナデ 脊付窓袋2条	ハケメの後ナデ	1	1		69	
	67	SA72	弥生土器 鉢	11.1 (5.2)	にぶい 黄褐色 相	良好	ナデ の後ミガキ	ナデ (不明瞭)			黒斑有	78	
p. 24 第 20 回	68	SA72 内 SC	弥生土器 鉢		にぶい 黄褐色 相	良好	10V8G/3 7.5W8G/4		3 多	2 少	外面被熟	80	
	69	SA72	弥生土器 鉢	(5.6)	灰灰	良好	不明	不明	1	1	底部に黒斑有	81	
	70	SA72	弥生土器 高	7.2	にぶい 黄褐色 灰黄褐色	良好	手削削一部ヨコ ナデ	ナデ	多	1	底部に黒斑有	82	
p. 25 第 21 回	71	SA72	弥生土器 高	(19.6)	灰黄褐色	良好	ヨコナデ 脊付窓袋 にキセミ ハケメ	ヨコナデ ナデ 押え	1		ススキ着	79	
	76	SA82	弥生土器 高	(20.0)	にぶい 水滴状 相	良好	ナデ	ナデ	3 多		口縁部円形浮文 内側出に布谷	93	
p. 26 第 22 回	77	SA82	弥生土器 高		相	良好	ミガキ 脊付窓袋	ミガキ	3 多		外面に布谷 26と同一個体	94	
	78	SA82-69	弥生土器 高台		灰灰	良好	ナデ 流点文 流線文	ナデ		1		91	
p. 27 第 23 回	79	SA82-45 + SA82-66	弥生土器 高	(7.0)	黑	にぶい 黄褐色	ヨコナデ ミガキ	丁寧なヨコナデ	1.5 少	1.5 多		90	
	80	SA82-57	弥生土器 高环		にぶい 相 灰环	良好	ミガキ 回線文	ミガキ	3 多			89	
p. 28 第 24 回	81	SA82	弥生土器 高		にぶい 相 相	良好	ヨコナデ ハケメ	ハケメ ナデ	1 少	1 強	貼付尖底	87	
	82	SA82-16, 17	弥生土器 高	(19.6)	にぶい 黄褐色 相	良好	ヨコナデ 刻目貼 付尖底 ハケメ	ハケメ	0.5 少		ススキ着	92	
p. 29 第 25 回	83	SA82-65	弥生土器 高	7.1	にぶい 黄褐色 相	良好	工具ナデの後ミ ガキ ヨコナデ	押え ナデ	3 少	1 多		88	
	90	SC71	弥生土器 高		相	にぶい 黄褐色	ナデ (風化甚しき)	ナデ	1 少	1 少	ススキ着	164	
p. 30 第 26 回	91	SC71	弥生土器 高	(6.8)	灰黄褐色	灰	ヨコナデ	ナデ	0.5 少		内面黒斑有	163	
	92	SC77-4	弥生土器 ミニチャア土器	5.7	3.2	5.1	にぶい 串刺 相	良好	工具ナデの後丁寧 なナデ	ナデ 押え	3 多	黒斑有	179
p. 31 第 27 回	93	SC77-3	弥生土器 ミニチュア土器	(9.1)	2.5	6.2	灰黄褐色	相	2 少			181	
	94	SC77-1	弥生土器 高	(13.2)			にぶい 黄褐色 にぶい 黄褐色	良好	ヨコナデ ナデ	ヨコナデ ナデ	0.5 少		180
p. 32 第 28 回	95	SC77-3	弥生土器 高	(6.4)			相 にぶい 相	良好	ヨコナデ ナデ	ヨコナデ ハケメ	2 少		183
	96	SC77-5	弥生土器 高				にぶい 相 灰	良好	ミガキ (不明瞭)	工具のよきナデ (不明瞭)	2 少		178
p. 33 第 29 回	97	SC77-2	弥生土器 高	(23.0)	にぶい 黄褐色 にぶい 黄褐色	良好	ヨコナデ 脊付窓袋 にキセミ ハケメ	ヨコナデ ハケメ ナデ	0.5 少	0.5 少		182	
	99	SC86	弥生土器 高		灰黄褐色	良好	ヨコナデ ナデ	ヨコナデ ナデ	3 少		船村窑跡2条 口縁部に刻文有	174	
p. 34 第 30 回	100	SC86	弥生土器 高	(12.4)	にぶい 黄褐色 相	良好	ヨコナデ ナデ	ヨコナデ ナデ	3 少	2 少		166	

参考 A: 若崎小石 B: 長石・石英 C: 難母・角閃石 D: 花崗岩 E: くさり隕

第3表 出土土器観察表③

番號 団査番号	遺構 番号	種別 部	法量cm () : 深元 口径 底径 高さ	色 調	施成	調 査		出土(上:mm 下:cm) A B C D E	備 考	実 番 号
						外面	内面			
p. 34 第32回	101	SC86	(20.0)	にぶい 黄褐色 2.5V6/4 10386/3	良好	ミガキ	ミガキ	2		165
	102	SC86		相 2.5V6/4 10386/1	良好	ミガキ (不明瞭)	施位の工具ナ ダ 粗粒のヨレ	1 2		166
	103	SC86	9.3	明褐色 2.5V6/6 534/1	良好	ミガキ 細刻	粗・縦位の工具ナ ダ 粗粒のヨレ	2	外表面有 スヌ付着	173
	104	SC86 -S07		明赤褐色 2.5V6/6 2.5V5/2	良好	ミガキ ナダ	ナダ	3	底部を中心被 熱	175
	105	SC86	便	にぶい 黄褐色 10386/4 2.5V4/1	良好	ナダ (不明瞭)	ナダ (不明瞭)	1	黒斑有	172
	106	SC86	便	にぶい 黄褐色 10386/3 10386/3	良好	ヨコナダ	ヨコナダ ナダ	3		170
p. 35 第34回	107	SC86 下層	(25.4)	灰褐色 10386/2 10386/2	良好	ヨコナダ ハケメ	ヨコナダ 工具ナ ダ 刻目點付密着	3 1		167
	109	SC94		灰褐色 7.5V4/2 10386/4	良好	ナダ	ナダ	1	黒斑有	186
	110	SC94	便	にぶい 黄褐色 10386/3 10386/4	良好	ナダ	ナダ	1	黒斑有	187
	111	SL81-12, 14	(16.8)	相 5V7/6 5V7/6	良好	工具ナダ ヨコナ ダ	ナダ	2		196
	112	SL81-37		にぶい 黄褐色 10387/4 10387/4	良好	ミガキ (不明瞭)	ナダ (不明瞭) し ぼり痕 施位の工 具痕	4 3		117
	113	SL81-16, 27, 168	便	7.5V7/6 7.5V7/6	良好	ヨコナダ 沈線文 刷位のナダ ナダ	ナダ 指押え	1	内面に黒斑有	103
	114	SL81+SL81-31 +SE80-8	土師器 曲	7.5V6/6 7.5V4/1	良好	ナダ 沈線文	粗・縦位の指ナダ 指押え	1	黒斑有	169
p. 37 第36回	115	SL81-100 -96層	(22.0)	相 2.5V6/6 2.5V6/6	良好	ヨコナダ ナダ ハケメ	指押え ナダ (不明瞭)	2	口縁部円形浮子 點付密着2箇	100
	116	SL81-116		にぶい 黄褐色 10387/4 7.5V7/4	良好	ヨコナダ ミガキ	不明瞭	1	駆牛密着3条	115
	117	SL81-103	便	にぶい 黄褐色 7.5V7/3 2.5V6/2	良好	ヨコナダ	指押え ナダ	1	駆牛密着3条	114
	118	SL81-129	便	にぶい 黄褐色 7.5V7/4 10387/3	良好	ヨコナダ 工具ナダか	ヨコナダ	3 狹 多 張		108
	119	SL81-180	便	にぶい 黄褐色 5V6/4 7.5V5/4	良好	ナダ ミガキ	ハケメの後ナダ	2	駆牛密着	116
	120	SL81-126, 150	便	にぶい 黄褐色 7.5V5/4 7.5V5/6	良好	ナダ	ナダ (不明瞭)	4 1, 5	駆牛密着	105
p. 38 第37回	121	SL81-97	(8.0)	にぶい 黄褐色 10387/4 2.5V5/1	良好	不不明瞭	不明瞭	2		109
	122	SL81-131		にぶい 赤褐色 5V6/4 2.5V4/1	良好	ハケメの後ナダ	ナダ (不明瞭)	1		110
	123	SL81-172, 173	(36.4)	にぶい 黄褐色 7.5V6/4 2.5V5/1	良好	ヨコナダ ハケメ ナダ	ヨコナダ ハケメ ナダ	2	點付密着	102
	124	SL81-128		相 2.5V6/6 7.5V6/4	良好	ヨコナダ ハケメ	ナダ	2 1	點付密着	111
	125	SL81-31	便	洗痕 2.5V6/4 5V6/3	良好	ヨコナダ ハケメ	ヨコナダ ハケメ	2 0.5	到日駆牛密着	113
	126	SL81-17	便	相 7.5V7/6 10386/2	良好	ヨコナダ ハケメ	ヨコナダ ナダ?	3 1	スヌ付着 到日駆牛密着	112
p. 39 第38回	127	SL81-29, 89, 95	便	にぶい 黄褐色 2.5V6/4 10387/4	良好	ヨコナダ ハケ メ	ヨコナダ 指押え ナダ	4 2	スヌ付着 駆牛密着	101
	128	SL81	便	にぶい 黄褐色 2.5V6/4 2.5V5/6	良好	ヨコナダ 工具ナ ダ ミガキ	ナダ (不明瞭)	1 1	外表面に黒斑有 スヌ付着	104
	129	SL81	便	にぶい 黄褐色 7.5V6/4 5V6/4	良好	ナダ (不明瞭)	ナダ (不明瞭)	1		107
	131	SL82	便	にぶい 黄褐色 10386/3 7.5V6/3	良好	ナダ ミガキ 間隔 2.5V6/4 10386/3	ミガキ ケズリ しほり痕	1	穿孔 (7つ)	119
	132	SL83-15	便	にぶい 黄褐色 5V6/4 10387/3	良好	不不明瞭	駆牛のケズリ	1	外表面被熱	129
	133	SL80-5	便	にぶい 黄褐色 2.5V6/4 7.5V7/6	良好	ヨコナダ ハケメ	ヨコナダ 工具ナ ダ	1 0.5	到日駆牛密着	143
p. 40 第41回	135	96層	土師器 高环	明褐色 5V5.6 5V5.6	良好	ナダ ミガキ 沈線文	ミガキ (潜伏者らしい)	多	130 同一鉢底	201
	136	96層	土師器 高环	にぶい 黄褐色 2.5V6/4 5V5/4	良好	ミガキ	ナダの後ミガキ	2	130 同一鉢底	202
	137	96層	土師器 高环	にぶい 黄褐色 5V5/4 10387/1	良好	ナダ 沈線文	ナダ	1 1	全面的に被熱	207
	138	96層	生土器 高环	便 2.5V6/6 7.5V7/4	良好	ハケメ ヨコナダ	ヨコナダ	4	穿孔 布屑 土師器付合せ	206

参考上: A: 灰褐色 B: 黄褐色 C: 砂質 C: 砂質 D: 黄褐色 E: くさり繩

第4表 出土器物観察表④

測定番号	番号	遺構等	種別	法値 cm (): 備考	外縁 内面	色調	調査要		出土 (上: mm 下: 番)	備考	実番号				
							外面	内面	A	B	C	D	E		
	139	HG層	土師器		にぶい褐色	にぶい褐色	ナダ	ミガキ (不透明)	1				210		
			高环		7.5W6S/4	7.5W6S/4	ナダ	指拌丸							
	140	HG層	陶生土器	(10.2)	にぶい褐色	にぶい褐色	良好	ミガキ	0.5	0.5			198		
			壺		7.5W6T/4	5W6E/4	ミガキ	ナダ	少	少					
	141	HG層	陶生土器	(8.9)	にぶい褐色	にぶい褐色	良好	ナダ	ナダ	3				197	
			壺		10W6S/4	7.5W6T/4	ナダ		多						
	142	HG層	陶生土器	(10.0)	にぶい褐色	にぶい褐色	良好	ヨコナダ ハケメ	ヨコナダ	ナダ	2			195	
			壺		7.5W6T/4	7.5W6T/3	ヨコナダ		強						
	143	HG層	陶生土器		にぶい黄色にぶい褐色	にぶい褐色	良好	ミガキ	ナダ	指拌丸	1			196	
			壺		10W6S/3	10W6E/3	ミガキ		強						
	144	HG層	陶生土器		にぶい褐色にぶい赤褐色	にぶい褐色	良好	ナダ	回織文	ナダ	2			199	
			壺		5W6S/4	5W6S/3	ナダ		強						
	145	HG層	陶生土器		にぶい褐色にぶい黄褐色	にぶい褐色	良好	ヨコナダ ハケメ	ヨコナダ	ナダ	1			200	
			壺		10W6T/3	10W6T/2	ヨコナダ		強						
	146	HG層	陶生土器	(21.4)	にぶい褐色にぶい黄褐色	にぶい褐色	良好	ヨコナダ ハケメ	ヨコナダ ハケメ	工具ナダ	2			スス付着	
			壺		5W6E/4	10W6T/4	ヨコナダ ハケメ		工具ナダ	ナダ	強		内部に墨斑有	209	
	147	HG層	陶生土器	(25.2)	にぶい褐色	にぶい褐色	良好	ヨコナダ ハケメ	ヨコナダ	ナダ	2			スス付着	208
			壺		7.5W6T/4	7.5W6T/4	ヨコナダ		強						
	148	HG層	陶生土器	(8.6)	にぶい黄色にぶい黒褐色	にぶい黒褐色	良好	工具ナダ	ミガキ		1			203	
			鉢		10W6T/2	10W6T/2	ミガキ		強						
	149	HG層	陶生土器	6.3	褐色	褐色	良好	ナダ	指拌丸	ナダ	1.5			黒斑有	204
			壺		10W6T/1	5W6E/6	ナダ		多						
	150	HG層	エニチア土器	2.4	淡黄	淡黄	良好	ナダ	指づまん	ナダ	1			スス付着	205
			器		2.5W6T/3	2.5W6W/4	ナダ		強						
	154	SC39	陶生土器		灰褐色	褐色	良好	ナダ	回織文	ナダ	1			黒斑有	154
			壺		7.5W6E/2	7.5W6E/1	ナダ		強						
	159	SC61	陶生土器	(10.6)	褐色	灰褐色	良好	工具根	工具ナダ	不明瞭	3	強			161
			器		5W6T/6	10W6E/2	工具根		少	少					
	161	SC27	陶生土器		にぶい褐色	にぶい褐色	良好	ナダ	回織文	ナダ	2	2			150
			高环		7.5W6E/6	7.5W6E/4	ナダ		少	少					
	162	SC27	陶生土器	9.25	にぶい褐色にぶい黒褐色	にぶい褐色	良好	ナダ	ナダ	ナダ	4	強			149
			鉢		10W6T/4	10W6T/4	ナダ		多	少					
	163	SC27	陶生土器	(9.0)	にぶい褐色にぶい褐色	にぶい褐色	良好	ナダ (不明瞭)	ナダ (不明瞭)	ナダ (不明瞭)	1	強			151
			鉢		7.5W6E/4	7.5W6E/4	ナダ (不明瞭)		少	少					
	164	SC54	陶生土器		明黄褐色	にぶい黒褐色	良好	ヨコナダ	斜位のハケメ	ナダ	1				159
			壺		10W6T/6	10W6T/2	斜位のハケメ		横位の工具ナダ	多					
	166	馬鹿土器 出土ピット	土師器	12.35	にぶい褐色にぶい褐色	にぶい褐色	良好	凹輪ナダ	凹輪ナダ	凹輪ナダ	無	無	馬鹿土器 底部凹輪一帯	194	
			壺		10W6E/4	7.5W6E/4	凹輪ナダ		強						
	167	SE1	陶生土器		にぶい褐色にぶい褐色	にぶい褐色	良好	ナダ	ナダ	ナダ	1			貼付帯部	121
			壺		10W6E/3	7.5W6E/4	ナダ		強						
	168	SE4	土師器		灰褐色	にぶい黒褐色	良好	ナダ	ヨコナダ	回織文	無	強			124
			高环		10W6E/2	10W6E/3	ナダ		少	少					
	169	SE4	コウ化面上		にぶい褐色にぶい黒褐色	にぶい褐色	良好	ナダ	ナダ	ナダ	1	1		黒斑有	123
			鉢		7.5W6E/4	7.5W6E/3	ナダ		多	少					
	171	SE15	陶生土器		にぶい褐色にぶい黒褐色	にぶい黒褐色	良好	ヨコナダ	ナダ	不明瞭	3			斜位貼付帯部 スス付着	139
			壺		10W6T/4	10W6T/3	ヨコナダ		多	少					
	172	SE15	陶生土器	(8.6)	にぶい褐色にぶい黒褐色	にぶい黒褐色	良好	ミガキ	ナダ	しぶり痕	2			炭化物有	140
			壺		10W6T/4	10W6T/3	ミガキ		少	少					
	173	SE15	陶生土器		にぶい褐色	にぶい褐色	良好	ナダ (不明瞭)	ナダ (不明瞭)	ナダ (不明瞭)	1	1		炭化物有	137
			壺		10W6E/3	10W6E/3	ナダ (不明瞭)		強	強	1	1			
	174	SE15	陶生土器		にぶい褐色	褐色	良好	ミガキ (不明瞭)	指拌丸	指拌丸	1	1			138
			壺		10W6E/4	2.5W6S/1	ミガキ (不明瞭)		多	多					
	175	SE5	陶生土器	(18.2)	にぶい褐色にぶい黒褐色	にぶい褐色	良好	ヨコナダ ミガキ	ナダ	不明瞭	3				127
			高环		10W6T/3	10W6T/3	ヨコナダ ミガキ		少	少					
	176	SE5・ソウセイ	陶生土器		にぶい褐色	にぶい褐色	良好	ナダ (不明瞭)	ナダ (不明瞭)	ナダ (不明瞭)	1			黒斑有	145
			高环		7.5W6E/3	7.5W6E/3	ナダ (不明瞭)		強	強					
	177	SE5	陶生土器		褐色	褐色	良好	ナダ	ナダ	ナダ	3	1		全面的に被熱	130
			壺		10W6E/6	10W6E/6	ナダ		多	少					
	178	SE5	陶生土器		にぶい褐色	褐色	良好	ミガキ	流状文	ハケメ	無	強		黒斑有 内縁二部赤変	136
			壺		7.5W6E/3	7.5W6E/3	ミガキ		少	少					
	179	SE5	陶生土器	(5.7)	褐色	褐色	良好	ナダ	ミガキ	ナダ (不明瞭)	無	強		黒斑有	131
			鉢		10W6T/1	2.5W6L/1	ナダ		少	少					
	180	SE5	陶生土器		にぶい褐色	にぶい黒褐色	良好	ナダ (不明瞭)	ナダ	ナダ	2	1			129
			壺		7.5W6E/4	10W6E/4	ナダ		多	少					
	181	SE5	陶生土器	(3.9)	にぶい褐色	にぶい褐色	良好	ナダ	ナダ	ナダ	1			黒斑有	132
			壺		10W6E/2	10W6E/2	ナダ		少	少					
	182	SE5	陶生土器	(22.4)	灰褐色	灰褐色	良好	ヨコナダ	工具ナダ	一部ナダ	1			垂下工具環	128
			壺		10W6E/2	10W6E/2	ヨコナダ		強	強	少			黒斑有	126
	187	A	土器	陶生土器	高环	にぶい褐色	にぶい褐色	良好	ナダ	ミガキ	ナダ	3	強	垂下工具環	216
					2.5W6T/2	10W6T/2	ミガキ		少	少				黒斑有	

参考 A: 若崎小石 B: 長石・石英 C: 離石・角閃石 D: 貝殻 E: クラゲ

第5表 出土土器観察表⑤

揭露番号	遺構等	種別	法量cm() : 深元 口径 径底 高さ	色調 外面 内面	焼成 外面 内面	調査					出土(上: mm 下: 厘) A B C D E	備考	実測号
						A	B	C	D	E			
188	A ソウセイ 壺	生土器		灰黄 2.5W6.2 / 10Y8E/2	良好 ヨコナダ ミガキ	ヨコナダ				0.5 少			192
189	C	生土器 壺		灰黄 10Y8E/4 - 7.5W7.6	良好 ナダ(不明瞭)	ナダ 指押丸	3	2	多				235
190	A ソウセイ 壺	生土器 (7.0)		灰黄 7.5W8E/4 - 7.5W8E/3	良好 ナダ 陶文	ナダ				少			191
191	A	生土器 壺	(14.8)	灰黄 7.5W7.7 / 10Y8E/3	良好 ミガキ	ミガキ				2 少			215
192	A	生土器 壺	(25.0)	灰黄 7.5W6.4 / 7.5W8E/4	良好 ヨコナダ ハケメ	ヨコナダ ナダ	1 少	0.5 傷			スヌ付着		213
193	表土 壺	生土器 壺		灰黄 7.5W8E/3 - 7.5W8E/2	良好 ヨコナダ	ヨコナダ ナダ	3 少				口縁端部に 剥離		239
194	C	生土器 壺		灰黄 5W7.6 - 10Y7.6	良好 ヨコナダ	ヨコナダ	1 傷						233
195	A	生土器 壺		灰黄 10Y8E/3 - 10Y8E/2	良好 ヨコナダ	ヨコナダ ナダ	1 少				削目剥村付 剥離		237
196	C	生土器 羽垂		灰黄 7.5W8E/3 - 7.5W8E/2	良好 ナダ 工具ナダ	ナダ				2 少	貼付剥離		234
197	表土 壺	生土器 壺	(8.30)	灰黄 5W8E/3 - 10Y8E/1	良好 ハケメ ナダ	ナダ	2 多						238
198	C	生土器 壺	(7.8)	灰黄 10Y8E/4 - 7.5W7.4	良好 横・斜位のナダ ハマ記号	ナダ	1 多	1 少			黒斑有 上げ底		232
199	B	粗挽器 杵	(11.6)	灰 5W5.1 / 5W5.1	良好 回転ナダ	回転ナダ							231
201	E SE88 瓦質土器 酒器	瓦質土器 酒器		灰黄 10Y8E/4 - 10Y8E/3	良好 ナダ 貫村帶葉	ハケメの箇ナダ	1 少						225
202	E SE88 瓦質土器 花瓶	瓦質土器 (12.0)	(14.8)	灰 8A/0 - 8A/0	良好 ナダ 工具ナダ	ナダ 工具ナダ	1 傷						228

参考土 A: 岩崎小石 B: 長石・石英 C: 雞石・角閃石 D: 黑母 E: くさり繩

第6表 出土陶磁器観察表

揭露番号	遺構等	種別	法量cm(): 深元 口径 径底 高さ	色調 外面 内面	焼成 外面 内面	調査					備考	実測号
						A	B	C	D	E		
155	SH114 壺	壺		灰白 2.5G7V1 / 2.5G5V1	良好 施釉	施釉					型押しの菊印	155
156	SH114 壺	(5.0)		黑褐 10Y3E/1 - 10Y3E/2	良好 施釉	施釉					花瓶	157
157	SH114 紅皿	壺	3.8	1.65 8W9	灰白 8W9 - 8W9	良好 施釉	施釉				型押し成形	158
160	SH116 壺	壺		暗灰 N3.0	良好 施釉	施釉					楊柳	160
184	SE88 瓦	壺	4.1	灰黄 2.5T7/2 - 2.5T7/2	良好 施釉	施釉					抉り高台(4ヶ所) 目隠(3ヶ所)	220
185	SE88 筒型陶	(7.3)		灰白 8W8/0	良好 施釉	施釉					外面菊芋末列文 内面三重團継 團籠	223
186	SE88 壺		3.6	明緑灰 10G3E/1 - 10G3E/2	明緑灰 良好	回転ナダ後施釉	回転ナダ後施釉					219
200	SE88 壺			灰 5W5/4	灰 2.5W8E/4	良好 施釉	施釉				側面系	229
203	SE88 壺	(9.8)		灰白 8T7/1	良好 8T7/1	回転ナダ後施釉	回転ナダ後施釉					221

第7表 出土土製品観察表

揭露番号	遺構等	種別	法量cm(): 深元 口径 径底 高さ	色調 外面 内面	焼成 外面 内面	調査					出土(上: mm 下: 厘) A B C D E	備考	実測号
						A	B	C	D	E			
p. 11 第7箇	17	SAB	勾玉	3.3 2.75	1.6	灰 10Y8E/3	良好			2 少		表面風化著しい	15
p. 36 第12箇	44	SAB17コウ化粧	粘土陶			灰 10Y8E/2	良好	ワフ瓶有				確認瓶有 被熱瓶有	20
p. 57 第58箇	204	A ソウセイ	系繋か	4.1	4.9 (1.75)	灰 NA/0	灰 10Y8E/1	良好 工具ナダ	工具ナダ			瓦置	199
p. 57 第58箇	205	E SE88	粘土陶			灰 10Y8E/3	灰白 7.5W8E/2	良好 回転ナダ後施釉	回転ナダ後施釉			窯の可能性有	227

参考土 A: 宮崎小石 B: 長石・石英 C: 雞石・角閃石 D: 黑母 E: くさり繩

第8表 出土鉄製品観察表

揭露番号	揭露番号	遺構等	種類	長さ(cm)	幅さ(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	調査					実測号
								A	B	C	D	E	
p. 24 第29箇	75	SAB2	鉄片	1.6	1.1	0.35	1.6						251
p. 27 第23箇	89	SAB2		1.7	1.6	0.15	0.7						252
p. 60 第69箇	215	SAB2を切る鋸片	鋸状切替品か	(13.4)	(1.7)	(1.4)	67.9						253

第9表 出土石器・石製品観察表

測定頁	測定番号	遺物等	器種	石材	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	備考	測定 番号	
p. 9	第5回	8	SA6-13	砾石	頁岩	7.80	1.70	4.30	74.1	金属光沢有	9
		9	SA6-15	砾石	尾鈴山酸性岩	11.10	13.85	7.30	1320.9		8
		10	SA6-11	台石	尾鈴山酸性岩	12.90	10.90	8.10	1480.0		7
p. 11	第7回	18	S48	砾石	砂岩	3.70	3.00	0.65	8.1		16
		19	S48	砾石	砂岩	9.60	9.90	4.30	420.0		17
p. 12	第8回	21	SA25	磨製石器	綠色堆積岩	(4.15)	(2.55)	0.30	(3.7)	先端・系部欠損	64
		22	SA25	石器	安山岩	8.7	2.3	0.75	12.5		65
p. 12	第9回	26	S428	石器	安山岩	(3.95)	1.65	0.50	(2.2)		76
		27	SA28-72	砾石	砂岩	8.30	2.95	2.05	82.5		77
p. 17	第13回	45	SA17-130	石器	チャート	(1.90)	(1.30)	0.35	(0.9)		42
		46	SA17-コ化面	砾石	砂岩	12.50	3.95	3.40	240.0		22
		47	SA17	台石 砾石	砂岩	11.6	(12.75)	8.30	(156.0)		38
		48	SA17-コ化面	不明	不明	15.60	9.90	5.90	1940.0		23
		49	SA17-コ化面	磨石	尾鈴山酸性岩	10.90	9.55	6.95	1840.0		21
p. 18	第14回	50	S428	砾石	砂岩	41.2	14.8	8.1	8300.0		46
p. 20	第16回	56	SA18-100	磨製石器	綠色堆積岩	3.30	(2.10)	0.20	(2.0)	茎部欠損	54
p. 21	第17回	57	SA18上層	磨石	尾鈴山酸性岩	7.30	6.10	5.25	337.3	一端削度	53
p. 23	第19回	61	SA21-27	台石	凝灰岩	16.95	11.30	8.15	1830.0		59
		65	S426	石器	チャート	1.55	(1.40)	0.25	(0.1)		71
p. 24	第29回	66	S426	砾石	硬質砂岩	10.50	5.35	4.40	448.1		70
		72	S472	スクレイバー	尾鈴山酸性岩	9.00	2.20	4.80	94.0		85
p. 27	第23回	73	S472	砾石	頁岩	8.85	3.70	1.70	86.7		84
		74	S472	不明軽石製品	輕石	7.40	7.10	4.95	37.9		86
p. 32	第30回	84	SA82-1	石器	安山岩	4.15	1.45	0.55	3.2		95
		85	SA82-12	不明軽石製品	輕石	2.50	3.50	1.60	1.4		96
		86	SA82-23	砾石	砂岩	5.10	6.80	2.15	66.1		98
		87	SA82	砾石	砂岩	(6.20)	(7.55)	2.90	(157.5)		97
		88	SA82-61-67	砾石	砂岩	19.95	4.75	3.75	502		99
p. 32	第30回	98	SC7-6	磨石	尾鈴山酸性岩	7.80	7.40	3.15	281.3		184
p. 35	第33回	108	SC87+SC86下層	輕石加工製品	輕石	15.15	(11.6)	4.00	(107.2)		188
p. 38	第37回	120	SL81-53	砾石	砂岩	8.70	4.05	2.60	138.1		118
p. 41	第46回	134	SE90-7	磨石	尾鈴山酸性岩	(4.20)	(6.40)	(4.80)	(120.8)		144
p. 43	第42回	151	HG層	石錐	砂岩	7.90	9.75	(2.00)	(193.4)		212
		152	HG層	石錐	砂岩	8.40	9.90	2.65	283.5		211
		153	HG層	算盤玉	水晶	1.75	0.80	0.89	1.2		247
p. 47	第45回	158	SC42	磨石	砂岩	(4.20)	(4.40)	2.70	(67.1)		156
p. 50	第49回	165	SE62	砾石	頁岩	(4.20)	3.25	1.40	(20.0)	擦痕有	162
p. 54	第54回	170	SE4-コ化面上	石器	安山岩	(2.90)	2.35	0.40	(2.7)		126
p. 55	第56回	183	SE5	磨石	砂岩	8.90	8.90	4.10	402.4		135
p. 57	第58回	206	表土	火打ち石	石英	2.60	1.65	1.10	4.3		246
		207	表土	軽石製品	輕石	6.80	5.80	2.10	24.0		244
p. 58	第59回	208	A ノウセイ	砾石	砂岩	(6.90)	6.30	2.50	(201.0)		193
		209	表土	砾石	砂岩	(6.70)	(5.70)	3.55	(187.3)		242
		210	表土	砾石 薄石	砂岩	13.70	5.40	3.70	312.4		241
		211	表土	砾石	頁岩	8.50	4.60	2.35	121.5		243
p. 59	第60回	212	表土	砾石	砂岩	(17.60)	11.70	7.50	(1139.2)	金属光沢有	248
		213	SE97	砾石	砂岩	18.50	10.90	7.80	1890.0	黒斑有 金属光沢有	236
p. 60	第61回	214	表土	台石	砂岩	19.25	22.80	11.40	6720.0		250

第5節 自然科学分析

中ノ原第2遺跡のテフラ分析

株式会社 古環境研究センター

1.はじめに

中ノ原第2遺跡B区の発掘調査では、砂層中に黄橙色の軽石混層が認められた。ここでは、テフラ（火山灰）の岩石学的諸特性（鉱物組成、火山ガラスの形態、火山ガラスと斜方輝石の屈折率など）を明らかにすることにより、指標テフラとの対比を試みた。なお、テフラの岩石学的諸特性や年代については新編火山灰アトラス（町田・新井, 2003）を参照した。

2. 試料

分析試料は、B区において軽石混層（No.2）およびその上層（No.1）と下層（No.3）から採取された計3点である。

3. 分析方法

超音波洗浄機で試料を分散し、1φ（0.5mm）、2φ（0.25mm）、3φ（0.125mm）、4φ（0.063mm）の篩を重ねて湿式篩分けを行った。また、4φ篩残渣についてテトラブロムエタン（比重：2.96）を用いて重液分離を行い、重鉱物と軽鉱物のフракションに区分した。

重鉱物は、カナダバルサムで封入してプレパラートを作成し、偏光顕微鏡下で斜方輝石（Opx）、单斜輝石（Cpx）、角閃石（Hd）、磁鉄鉱（Mg）を同定・計数した。軽鉱物は、簡易プレパラートを作製し、軽鉱物組成と火山ガラスの形態分類を行った。

火山ガラスの形態は、町田・新井（2003）の分類基準に従い、バブル（泡）型平板状火山ガラス（b1）、バブル（泡）型Y字状火山ガラス（b2）、軽石型纖維状火山ガラス（p1）、軽石型スponジ状火山ガラス（p2）、急冷破砕型フレーク状火山ガラス（c1）、急冷破砕型塊状火山ガラス（c2）に分類した。

屈折率は、温度変化型屈折率測定装置（古津澤質製、MA10T2000）を用いて、4φ篩残渣の火山ガラスについて測定を行った。なお、候補となるテフラには火山ガラスの屈折率のみでは識別が困難なものがあることから、No.2については斜方輝石についても屈折率を測定した。

4. 結果

テフラ分析結果を表1および図1に示し、以下に各地点ごとに試料の特徴を記載する。

（1）No.1

試料は、暗オリーブ色の砂である。粒度組成は3φ篩残渣が最も多く、重液分離では重鉱物の割合が高い。火山ガラスは非常に少なく、バブル型Y字状ガラス（b2）、軽石型スponジ状ガラス（p2）などが含まれる。火山ガラスの屈折率は1.5062-1.5119（平均1.5095）である。

（2）No.2

試料は、黄橙色の軽石混じり砂である。軽石は1φ篩残渣中に多く含まれ、最大30mmでやや発泡が良い。粒度組成は3φ篩残渣が最も多く、重液分離では重鉱物の割合が高い。火山ガラスは少なく、軽石型スponジ状ガラス（p2）、バブル型Y字状ガラス（b2）などが含まれる。火山ガラスの屈折率は1.4996-1.5128（平均1.5077）で、1.500付近の低い屈折率を示すものも含まれる。軽石ガラスは、バブル型Y字状ガラス（b2）、バブル型平板状ガラス（b1）が多く、軽石型スponジ状ガラス（p2）などが含まれる。重鉱物は、斜方輝石（Opx）が多く、单斜輝石（Cpx）が少量含まれる。軽石ガラスの屈折率は1.5078-1.5105（平均1.5087）、斜方輝石の屈折率は1.7248-1.7303（平均1.7272）である。

（3）No.3

試料は、オリーブ色の砂である。粒度組成は3φ篩残渣が最も多く、重液分離では重鉱物の割合が高い。火山ガラスは非常に少なく、バブル型Y字状ガラス（b2）が含まれる。火山ガラスの屈折率は、15粒について1.4988-1.5111（平均1.5066）であり、1.500付近の低い屈折率を示すものも含まれる。

5. 考察

テフラの岩石学的諸特性（鉱物組成、火山ガラスの形態、火山ガラスと斜方輝石の屈折率）、顕微鏡観察の所見および土層の堆積状況などから、軽石混層（No.2）に含まれる黄橙色軽石は、霧島御池テフラ（Kr-M、約4,600年前）に由来すると考えられる。また、その上層（No.1）と下層（No.3）にも霧島御池テフラに由来するテフラ粒子が混在していると考えられる。

霧島御池テフラは、約4,600年前に霧島火山から噴出した降下軽石（pfa）および火碎サージ（ps）で、火山灰は南東方向50km以上に分布する。主な鉱物は斜方輝石（Opx）と单斜輝石（Cpx）で、角閃石も少量含まれる。火山ガラスの屈折率（n）は1.508-1.511、斜方輝石の屈折率（γ）は1.724-1.730である（町田・新井, 2003）。

なお、軽石混層（No.2）とその下層（No.3）において、4φ篩中に見られる屈折率1.500付近の火山ガラスは、始良Tn火山灰（AT、約2.9万年前）に由来すると考えられる。

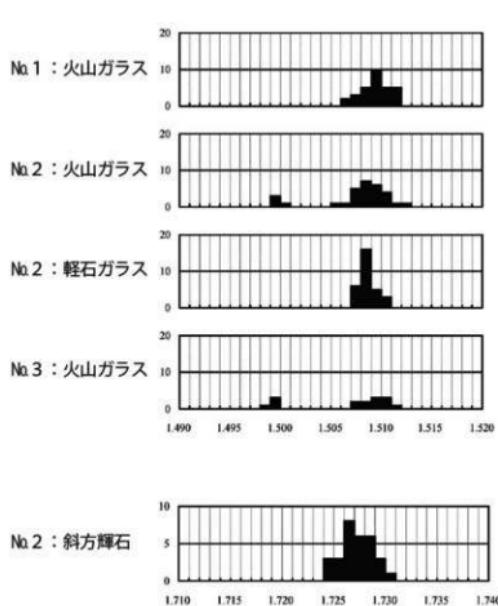
文献

- 町田洋・新井房夫（2003）新編火山灰アトラス－日本列島とその周辺－、東京大学出版会、336p.
- 横山卓雄・櫻原徹・山下透（1986）温度変化型屈折率測定装置による火山ガラスの屈折率測定、第四紀研究、25, p. 21-30.

第10表 中ノ原第2遺跡におけるテフラ分析結果

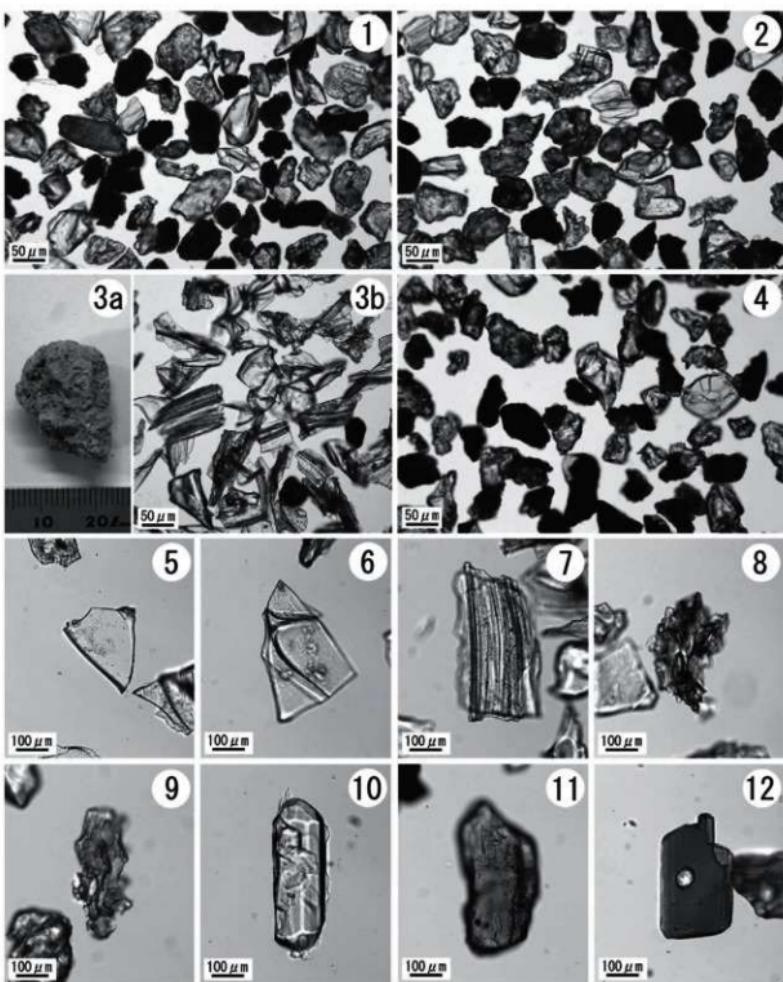
No.	処理重量(g)	含水率(%)	乾燥重量(g)	砂粒分の粒度組成(重量g)				重液分離(重量g)	
				1φ	2φ	3φ	4φ	軽鉱物	重鉱物
1	38.69	0.47	38.51	0.09	9.86	23.39	2.31	0.16	0.23
2	40.90	0.64	40.64	1.06	8.77	23.50	2.55	0.12	0.20
3	35.47	0.40	35.33	0.05	6.71	23.79	2.42	0.13	0.20

分類群 No.	石英 (Qn)	長石 (Pl)	不明 (Opx)	火山ガラス				ガラス 合計	重鉱物	重鉱物 の合計			
				バブル(泡)型		軽石型							
				平板状 (h1)	Y字状 (h2)	織維状 (p1)	スピンドル 状 (p2)						
1	5	114	107		1	1	1	3	229	116	33		
2	1	100	105	1	5	12		18	224	125	34		
2 軽石		36	2	57	119	8	15		199	237	137		
3	10	91	121		2			2	224	128	41		
									1	35	23		
										228			



範囲(range)	平均(mean)	個数
1.5062 - 1.5119	1.5095	30
1.4996 - 1.5128	1.5077	30
1.5078 - 1.5105	1.5087	30
1.4988 - 1.5111	1.5066	15
1.7248 - 1.7303	1.7272	30

図62 中ノ原第2遺跡における火山ガラス・斜方輝石の屈折率測定結果



中ノ原第2遺跡におけるテフラ試料の顕微鏡写真

1. 4φ軽鉱物 (No.1)
2. 4φ軽鉱物 (No.2)
- 3a・3b. No.2の軽石と4φ軽鉱物
4. 4φ軽鉱物 (No.3)
5. バブル型平板状ガラス (No.2の軽石)
6. バブル型Y字状ガラス (No.2の軽石)
7. 軽石型繊維状ガラス (No.2の軽石)
8. 軽石型スponジ状ガラス (No.2の軽石)
9. 軽石型スponジ状ガラス (No.2)
10. 斜方輝石 (No.2の軽石)
11. 単斜輝石 (No.2軽石)
12. 角閃石 (No.1)

第Ⅲ章　まとめ

ここでは今回の調査の中心となった弥生時代の調査成果を記述することでまとめたい。竪穴建物について　今回の調査では弥生時代の竪穴建物は11軒検出された。この中で出土遺物から時期が明らかなものは中期末から後期初頭に位置づけられ比較的短期間に収まる。第Ⅱ章でも記述したが、本来標高が高かった場所は削平を受けているため、滅失しているという可能性は残るもの、詳細な時期が明らかでない竪穴建物74を除くと、北側に所在する竪穴建物72、竪穴建物82は何れも間仕切りを有する。一方、南側に所在する竪穴建物は何れも方形基調である。また、詳細な時期比定に足る遺物が出土していない建物もあるが、北側の間仕切りを有する建物は中期末、南側の方形基調の竪穴建物は中期末から後期初頭と僅かながら時期差も想定される。集落内での住み分けなのか、時期による居住域の移動であるのかは、今後周辺での発掘調査成果が蓄積した段階で再度検討する必要がある。

竪穴建物17の炉跡について　竪穴建物17では建物の東に偏った位置から炉跡が検出されている。炉跡は浅い掘り込みを持ち、掘り込み内には焼土層と炭化物を多量に含む砂層の互層が堆積していた。掘り込みの北側は強い被熱により赤化し硬質になっている。竪穴建物17から出土した遺物を見ると、鉄器、鉄片は出土していないが、被熱した粘土塊、砥石、敲石、磨石、被熱した台石（写真のみ掲載）が出土している。鉄器製作遺構の要件として齋宜田氏は、(1) 竪穴建物の床面に焼土面を有する、(2) 台石、敲石、磨石類、砥石などの石製鍛冶具、(3) さまざまな形態の鉄製品、あるいは鉄片、(4) 焼粘土塊を挙げている（齋宜田2020）。竪穴建物17はこれらのうち(3)を欠くため積極的に鉄器製作遺構であったとは断定できないが、その可能性がある事例として考えたい。仮に鍛冶炉であった場合、浅い掘り込みを有するものの、カーボンベッドが確認できなかったため、建物床面をそのまま炉床とする村上氏の分類のIV類に該当すると思われる（村上2007）。

周溝状遺構について　今回発掘調査では3基の周溝状遺構が検出された。削平や調査区外に広がっていたため全形が確認できた事例はないが、想定される平面形は円形と隅丸方形がある。残存状況が悪いものの隅丸方形を呈する周溝状遺構83、85は検出状況から周溝が途切れている可能性が高い。また、円形を呈する周溝状遺構81では周溝中央の最下層が硬化している状況が確認された。硬化した層である3層は、周溝の壁や周囲の地山から周溝内に流れ込んだと考えられる4層が堆積した後に堆積している。通常であれば3層の堆積までに一定の期間を想定すべきであるが、砂丘上に立地する当該地では、4層程度の堆積であれば数時間で堆積することが調査中に明らかになっている。そのため周溝掘削後に時間をおくず、底面を均すために敷設された層である可能性も想定できる。この硬化した層以外には埋葬施設や建物の痕跡、祭祀遺物等の出土も無く、中ノ原第2遺跡における周溝状遺構の性格は不明と言わざるを得ない。

瀬戸内系の土器について　今回の調査では瀬戸内系の土器が一定量出土した。弥生時代中期から後期に南部九州、特に宮崎平野部から多数の瀬戸内系の土器が出土することは古くから知られており、近年では特に河野氏によって詳細な検討がなされている（河野2011a、2011b）。本来はそれに従い、胎土も考慮したうえで、搬入土器、模倣土器、折衷土器に分類すべきである

が今回はそこまで至れなかった。本遺跡からは甕、(鉢)、壺、高坏、器台と多様な器種が出土しており、瀬戸内系の中でも細かく見ていくと、高坏については器形や透かし孔が円形であることから東部瀬戸内系が主体と考えられ、頸部が長い広口壺(63)や口縁部に凹線文を施す小型の直口壺(141、190)も東部瀬戸内で散見される器形である。ここから中ノ原第2遺跡では東部瀬戸内地域との交流が主体であったと考えられる。一方、中ノ原第2遺跡に近接する本村遺跡からは、工事中の採集資料ではあるが伊予系高坏が出土している。本村遺跡の資料は中期後葉から末葉に位置づけられ、中ノ原第2遺跡出土資料よりも若干遅る時期のものである。時期による傾向については、河野氏が中期中葉から末葉は伊予系が主体で、後期初頭から中葉は伊予系に加え東部瀬戸内系のものが増加することを指摘しており、中ノ原第2遺跡で東部瀬戸内系が主体となることはこの傾向を反映したものと考えられる。

打製石鎌について 中ノ原第2遺跡では6点の打製石鎌が出土した。当遺跡では縄文時代の遺構、遺物が確認されていないため弥生時代に帰属することは明らかである。この中で凸基式、有茎式の大型の石鎌に関しては全て安山岩製であり、素材、製作技法の両面から搬入品であると考えられる。一方、縄文時代からの伝統的な打製石鎌の形態を引く2点はチャート製である。おわりに 中ノ原第2遺跡では、瀬戸内系土器以外にも、須玖式の壺や豊後系の壺、黒髮式の鉢、近畿系もしくは東部瀬戸内系の垂下口縁高坏といった各地域の土器、製作地は明らかではないが搬入品の水晶製算盤玉、搬入品の安山岩製の打製石鎌が出土した。これらのことから中ノ原第2遺跡を営んだ人々は、瀬戸内地域をはじめ多くの地域と交流をもつた集団であると考えられ、その集落である中ノ原第2遺跡は交流の中心となる拠点的集落といえる。しかし集落の継続期間をみると中期末から後期初頭が中心であり比較的短期間の内に終息する。この点については、今回は集落の一部を調査したのみであり未調査部分に異なる時期の遺構が存在する可能性がある。また、本来は近接する本村遺跡も同一集団の集落と考えてよい位置にあるほか、周辺の遺跡も未調査のものばかりであることから、複数の弥生時代集落が存在する可能性もある。今後の周辺の調査事例を待つかないが、本来は河野氏が学園都市遺跡群で想定したように、「比較的小規模な集団単位が一定の地理範囲内に複数存在し、それらが少しずつ場所を移動しながら集落が展開する」(河野 2015)という状況が砂丘上でも展開していたのではなかろうか。

【主要参考文献】

- 大賀克彦 2011「弥生時代における玉類の生産と流通」『弥生時代』上、講座日本の考古学5、青木書店。
- 河野裕次 2011a「南部九州における弥生時代瀬戸内系土器の基礎研究」『地域政策科学研究』第8号。
- 河野裕次 2011b「南部九州における弥生時代瀬戸内系土器の動態」『日向における弥生文化の謎』宮崎県立西都原考古博物館。
- 河野裕次 2015「宮崎平野南部における弥生集落の様相」『Archaeology from the South III』本田道輝先生退職記念事業会。
- 谷澤亜里 2020「玉類からみた日韓交渉－弥生時代前期後半～後期を中心に－」『新・日韓交渉の考古学－弥生時代－』
「新・日韓交渉の考古学－弥生時代－」研究会、『新・韓日交渉の考古学－青銅器～原三国時代－』研究会。
- 綿宜田佳男 2020「近畿における鉄器製作遺跡の「再発掘」」『新・日韓交渉の考古学－弥生時代－』
「新・日韓交渉の考古学－弥生時代－」研究会、『新・韓日交渉の考古学－青銅器～原三国時代－』研究会。
- 村上恭通 2007『古代国家成立過程と鉄器生産』青木書店。

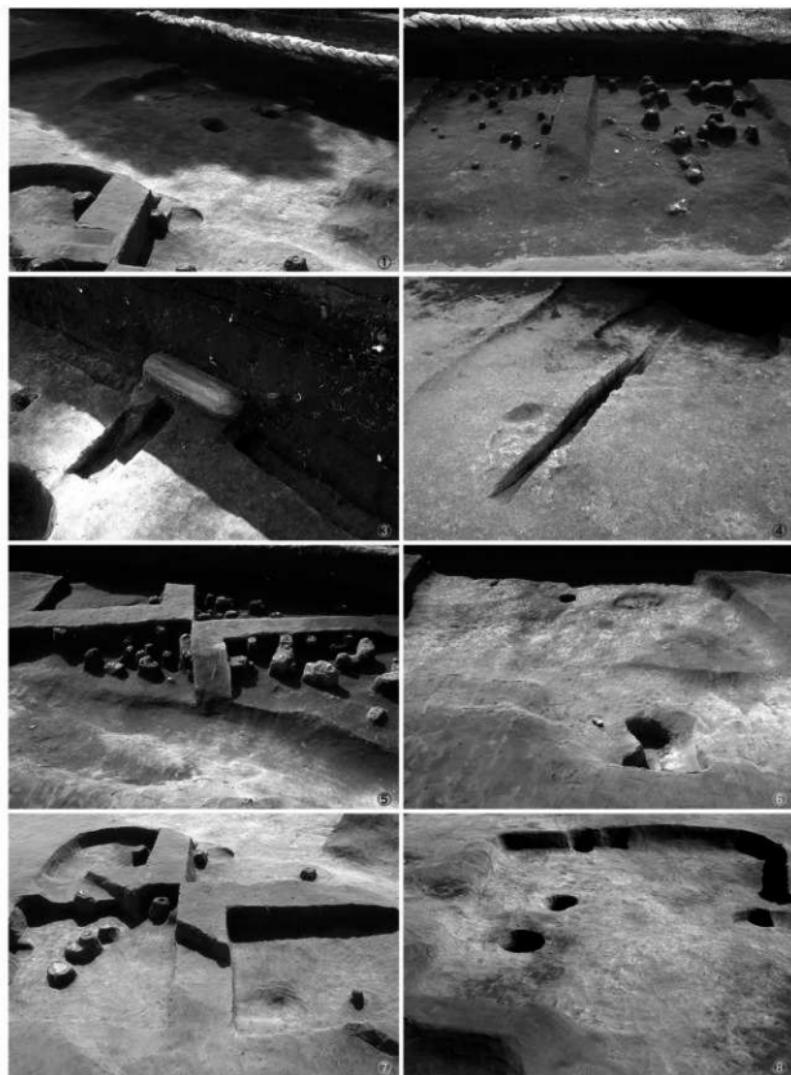


A 調査区垂直写真（合成）



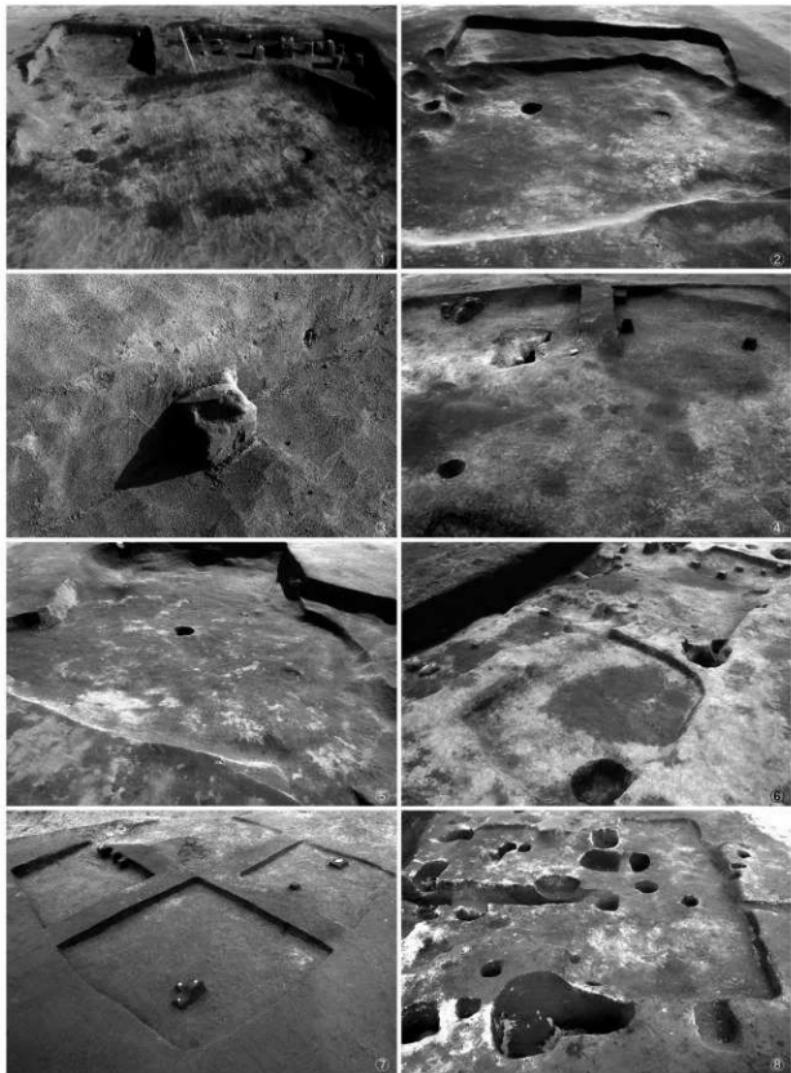
①A調査区北側調査終了時（南東から）
 ③B調査区調査終了時（南から）
 ⑤竪穴建物6調査状況（西から）
 ⑦竪穴建物8調査状況（南西から）

②A調査区南側調査終了時（北西から）
 ④C調査区調査終了時（北から）
 ⑥竪穴建物6遺物出土状況（南西から）
 ⑧竪穴建物8砥石出土状況（西から）



① 窪穴建物 17・21 完掘（北西から）
③ 窪穴建物 17 砥石出土状況（北西から）
⑤ 窪穴建物 18 調査状況（北から）
⑦ 窪穴建物 22 調査状況（北から）

② 窪穴建物 17 調査状況（北から）
④ 窪穴建物 17 炉跡断ち割り状況（北から）
⑥ 窪穴建物 18 完掘（北西から）
⑧ 窪穴建物 22 完掘（西から）



①竪穴建物 25 調査状況（北西から）

③竪穴建物 25 石鐵出土状況（北から）

⑤竪穴建物 28 完掘（西から）

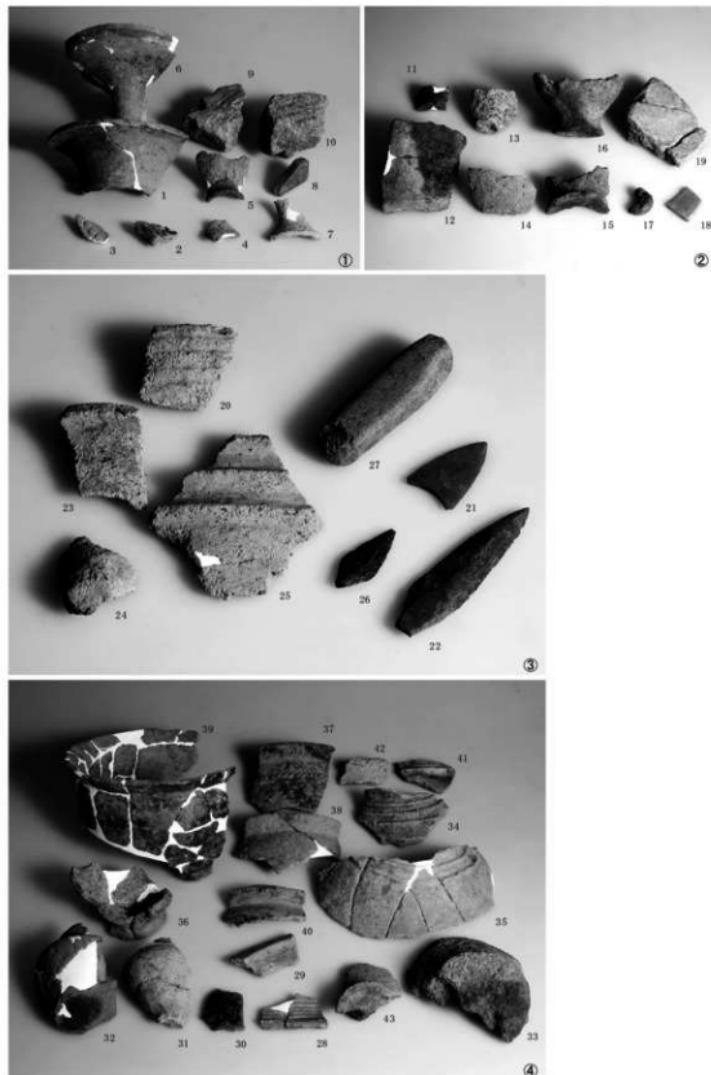
⑦竪穴建物 74 調査状況（南から）

②竪穴建物 25 完掘（北西から）

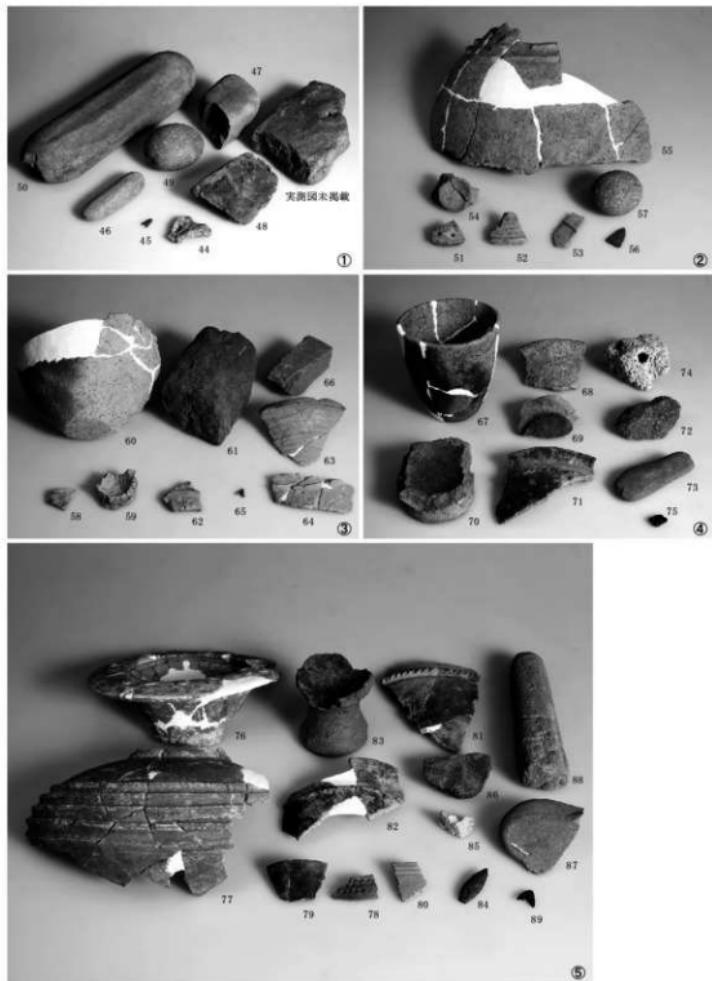
④竪穴建物 26 調査状況（南から）

⑥竪穴建物 72 調査状況（北西から）

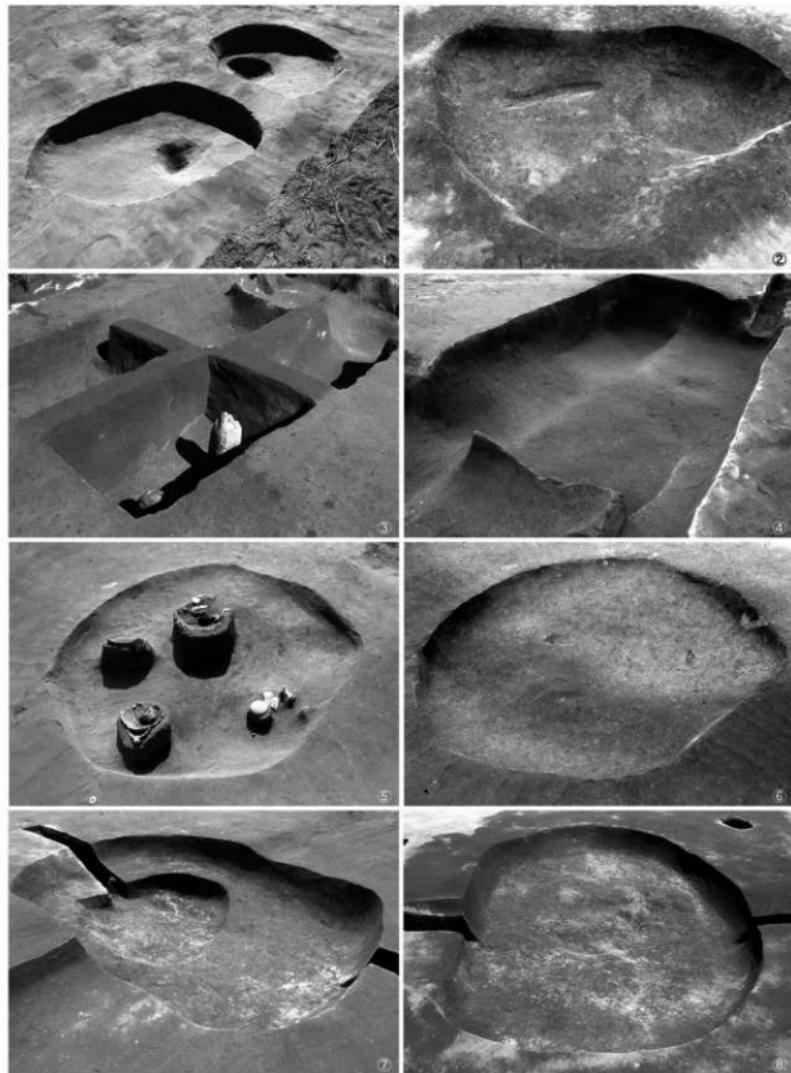
⑧竪穴建物 82 完掘（西から）



① 竪穴建物 6 出土遺物
② 竪穴建物 8 出土遺物
③ 竪穴建物 25・28 出土遺物
④ 竪穴建物 17 出土遺物 1

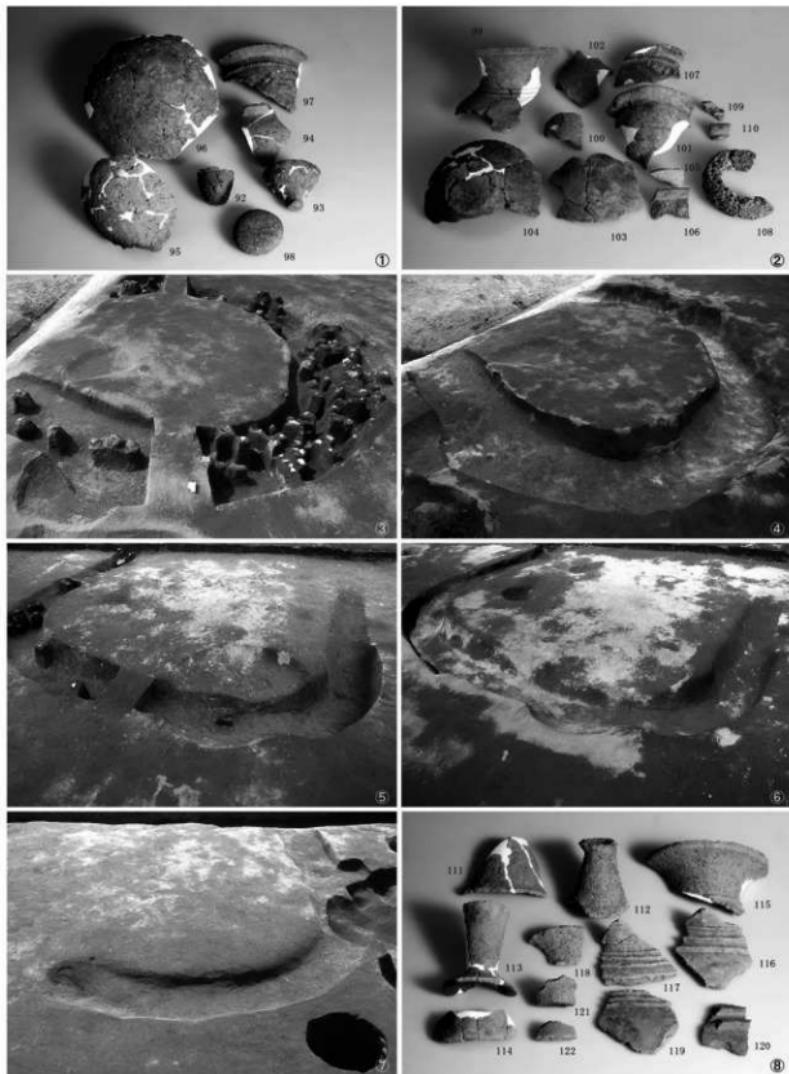


① 竪穴建物 17 出土遺物
② 竪穴建物 18 出土遺物
③ 竪穴建物 21・26 出土遺物
④ 竪穴建物 72 出土遺物
⑤ 竪穴建物 82 出土遺物



①土坑 2・3 完掘（北から）
③土坑 71 調査状況（南西から）
⑤土坑 77 遺物出土状況（北東から）
⑦土坑 86 完掘（北から）

②土坑 30 完掘（北から）
④土坑 71 完掘（北から）
⑥土坑 77 完掘（北東から）
⑧土坑 94 完掘（北西から）

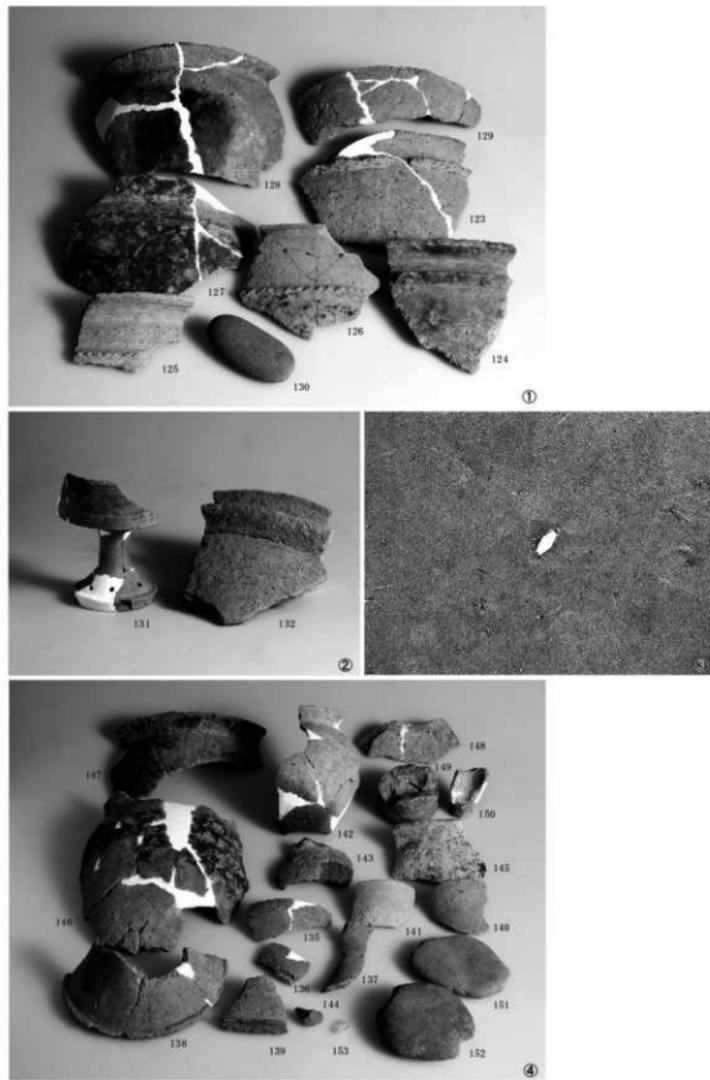


①土坑 77 出土遺物

- ③周溝状遺構 81 調査状況（北から）
 ⑤周溝状遺構 83 調査状況（東から）
 ⑦周溝状遺構 85 完掘（西から）

②土坑 86・94 出土遺物

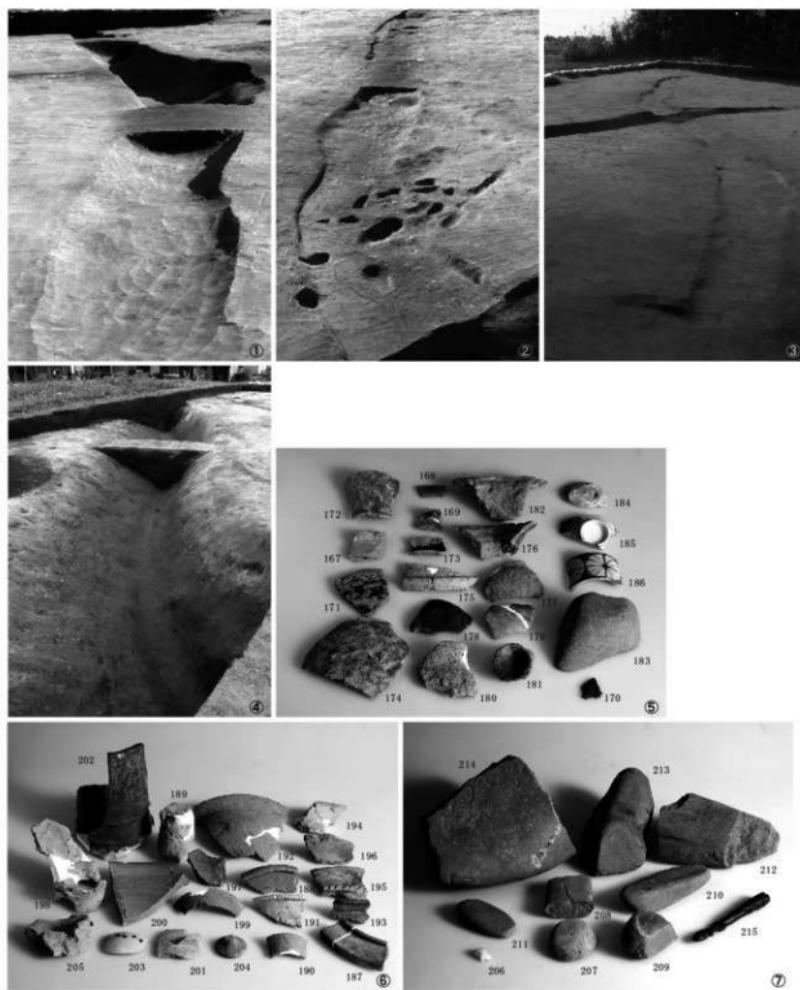
- ④周溝状遺構 81 完掘（北から）
 ⑥周溝状遺構 83 完掘（北東から）
 ⑧周溝状遺構 81 出土遺物 1



①周溝状遺構 81 出土遺物 2
②周溝状遺構 83 出土遺物
③弥生時代包含層水晶製算盤玉出土状況
④弥生時代包含層出土遺物



- ①近世掘立柱建物群完掘（西から）
- ②近世掘立柱建物出土遺物
- ③土坑 62 完掘（北東から）
- ④土坑 93 調査状況（北から）
- ⑤中近世土坑出土遺物
- ⑥墨書き器出土状況（西から）
- ⑦墨書き土器



- ①溝状遺構 1 調査状況（南西から）
- ②溝状遺構 4 南側硬化面検出状況（北西から）
- ③溝状遺構 4 南側完掘（北西から）
- ④溝状遺構 88 調査状況（南から）
- ⑤中近世溝状遺構出土遺物
- ⑥その他出土遺物 1
- ⑦その他出土遺物 2

報告書抄録

ふりがな	なかのはらだいにいせき						
書名	中ノ原第2遺跡						
副書名	新宮崎営農センター建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書						
シリーズ名	宮崎市文化財調査報告書						
シリーズ番号	第138集						
編集者名	石村 友規						
発行機関	宮崎市教育委員会						
所在地	〒889-1696 宮崎市清武町西新町1番地1						
発行年月日	2021年3月31日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
なかのはらだい 中ノ原第2遺跡	みやざき じょうおあざはう じあいいまで 宮崎市大字芳士字今出 2657-1 外	45201	31° 57' 57" 付近	131° 27' 06" 付近	2017.1.30 ~ 2017.6.5	2,035 m ²	その他 建物
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な出土遺物	特記事項		
中ノ原第2遺跡	集落地 散布地	弥生 古代 中世 近世	堅穴建物 掘立柱建物 土坑 溝状遺構 周溝状遺構	弥生土器・打製石鏃・ 磨製石鏃・鐵鏃・水晶 製算盤玉	瀬戸内系土器出土 安山岩製打製石鏃出土 水晶製算盤玉出土		
要約	中ノ原 第2遺跡	弥生時代中期末から後期初頭を中心とした集落が確認された。多数の瀬戸内系土器に加え、北部九州、豊後系、近畿系などの土器、搬入品と考えられる安山岩製の打製石鏃、水晶製算盤玉が出土したことから、広い地域と交流を行っていた拠点的な集落であったと考えられる。					

宮崎市文化財調査報告書 第138集

中ノ原第2遺跡

新宮崎営農センター建設事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

2021年3月

発行 宮崎市教育委員会